

教員にまれ教育事務官にまれ西洋語に通じ能く西洋書を読み得んことは最も肝要なり、今日の如く教員中にも教育事務官中にも洋語に通せず洋書を読むことを知らぬ者の多きは國家の爲に決して悦ぶべきことにあらず、教員にまれ教育事務官にまれ未だ洋語に通せず洋書を読むことを知らざる者共は今より速に洋語を學ぶべきなり。(草稿)

## 洋語を學び學科を研究するの必要なること

(明治十七年五月二十五日教育談話會演説)

二十年前  
の日本と  
今日の日  
本と開化  
の優劣

今日の日本を二十年前の日本に比べ見んに開化の度に於て實に著るしき差異を見るならん、兵制より、軍備より、政治より、法律より、財政より、郵便より、商賣より、教育より、學藝美術に至る迄で皆西洋開明國の流に改良せられて、殊の外整頓せざるはなく、二十年前の日本と今日の日本とを比べ見んに實に半開國と開明國との相違なり、旅行の便の如き二十年前には陸に駕籠ある而已水には日本形のかよわき帆船前船ある而已にて日々の行程は至つて僅少なりき今日は大に之と異り水にしては汽船の便あり陸にしては人力車あり、乗合馬車あり、蒸氣車あり、馬車人力車と雖も日に數十里を行くことを得るなり、流車汽船あらば往時數十日にて行くことを得たる所も一兩日にて能く行くことを得るなり、通信の便の如き二十年前の飛脚屋の制と今日の郵便の制とを比べ見んに往時の制は不便を極はめたる者にして今日の制は便利を極はめたる者なり往時に在りては東京内でも他へ書を遣はさ

通信の便

旅行の便

醫者

んど欲する時は仲間小者に持たせて遣はすか但しは人を雇ふてやらねばならぬ如き有様なりき、遠國へ文通を爲さんと欲する時は日本橋室町下りまで持ち行き、て飛脚屋に依頼し如何に京都迄八日限りて八百位貫目のなき手紙と雖も多くの賃錢を拂はざるを得ざりき、京都大阪下り迄三日限り杯云ふ文通も爲さん時は莫大の賃錢を拂はざるを得ざりき、今日の如く二錢の郵便切符さへ貼り附れば何方何地のはて迄でも三四日の中に届かん如き便利とは天地の相違なり、醫者の如き二十年前に在りては坊主が惣髮にて難有そうに山牛蒡の根やかん草をひねくり、子供の病氣は何でも蚊でもかんなり虫なりと云ひ立てん如き者の多かりしも、今では頭は散髪にて身に洋服を着し、化學上の方法を以て製したる最も貴き薬を用ひ肺病ならば聴胸器にてうかどふことを知り、眼病ならば照眼鏡を以てのぞく事を知り、痘瘡神は種痘で之を寄せ附けず、さぶをさらふて「コレラ」を退治し、熱を減じて熱病を直すこと云ふ如き絶妙なる術を知る者少なからず、服制の如き二十年前には軍人を除くの外は如何程多忙なる者も如何程奔走せねばならぬ職掌の者と雖も武士は袴羽織にて「ビタ／＼」「ズル／＼」とやつて居らねばならざりしも、今では何より簡便なる洋服と云ふ者が流行していそがしきもひまなるも皆一樣にて出掛

衣服

法律

けんとする如き時勢なり甚だしきに至りてはいそがしさうに洋服を着たる所はよけれども車の上では居ねむりを爲て彼所にては茶を飲み煙草をふかし新聞紙を讀むより外には餘り用のなき者も時としてはありと云ふ、法律の如き二十年前に在りては僅の金圓を盗みたる者と雖も死刑に處せられんとする如き最も苛酷なる者なりしも今日我が邦の法律なる西洋諸國にも稀に見る如き完全の者なり、教育の如き二十年前には普通教育は寺子屋にて讀み書き算術を僅か許り學ぶに止り高等教育と雖も漢書を讀み詩文を作る位の事より外にはなかりしも、今日は大に之と異なり小學、中學、大學、専門學校等の設ありて普通教育と雖も讀み書き、算術等の外化學、物理學等の眞理を教授するあり、大學並に専門學校等に於ては一學科を學生生徒の好みに任せて専修せしむるの便あり、又た萬民の教育の爲めには博物館あり動物館あり教育博物館ありて教育の道は實に開けたりと云ふべし、往時に在りては子に教育を授くると授けざると馬鹿に育つると利口に育つるとは親々の勝手次第なりしも、今日は教育令と云ふ者がありて、いやでも應でも學齡兒は教育を幾分か受けねばならぬと云ふ難有き世と成りたり、無學なる者は日々に減少するなり、何人と雖も化學、物理學等の理を多少辨へんとする如き有様なり、何

教育

博物館

教育令

洋語を學び學科を研究するの必要なること

漢語の流

新聞紙

洋服の婦人

貨幣

國立銀行

人と雖も讀み書きの出来る様に成らんとする如き有様なり、六ヶしき漢語を多少  
 不知る者は百姓町人の中にも殆んどなき如き有様なり。二十年前には大地震大火  
 事敵討等のありたる時に一枚ずりの次第書を讀賣り歩きたる位の事にて其他  
 の事は國に如何なることがありても之を知るすべとは少しもなかりしも今日  
 は幾百幾千とのきを並べて此所にも彼所にも新聞屋が出来て日々刊行の物を發  
 兌する社あれば、毎週出す者あり、毎週出す者あれば、毎月出す者あり、政治に關する  
 者あれば、宗教に關する者あり、おどけの雜誌あれば、まじ目の者あり、政黨に屬する  
 者あれば、無政黨の者あり、賣れる者あれば、賣れざる者あり、實に今日は新聞の世の  
 中と云ふも過言にあらざるなり、洋服を着する婦人は日々に多く、立食の夜會は夜  
 夜に多し、用は有ても無くつても馬車に乗て馳せ廻る者は次第々々に多くなり、西  
 洋人が「ウエツヂング、トリップ」と號して婚姻すること直に旅行に出掛くる故に我邦  
 にも新婚の夫婦の熱海湯治若くは江の島鎌倉めぐりと出掛くる者も近來は尠  
 なからず、金銀貨幣が西洋風の者に改まりたる而已ならず、日に用ふる紙幣までが  
 古風の者ではなくなりて西洋風の者と成りたり、西洋發明の國立銀行杯云ふ者は  
 我國にも實に夥多しく出来たり、西洋の銀行が鎖店する者あれば、我邦にもまけぬ

大陽曆

今日の日本は西洋諸國に劣らざる者なり

上野の博覽會にて一老人の云へること

小石川砲兵工廠

氣で鎖店する者あり、古來農用の大陽曆は忽地に廢せられて大陽曆に改まりたり、  
 今日日本は決して二十年前の日本にあらず、二十年前の日本に比する時は今日  
 の日本は實に開明國なり、蓋し今日の日本は西洋諸國にも決して劣らざる者なら  
 ん杯と思ふ如き者は今日決して尠なからざるならん、而して今日の日本は既に歐  
 米諸國にも劣らざる者なり、杯と思ふ如き者は抑も如何なる人物ぞ、蓋し西洋の事  
 情には極はめて疎き者共なり、西洋の事情に疎き者程日本こそ天下隨一の富強國  
 なりと思ふなり、西洋の事情に最も疎き者は則ち宇宙間に日本あるを知つて歐米  
 諸國のあることを知らざる者なり、先年上野の博覽會にて一老人の愉快雀躍する  
 者を余は見たり、其の何の爲に愉快雀躍に堪へざるやと疑ひしに、日本は實に物産  
 に富みたる國なり、器械の製造に精妙を極はめたる國なり、斯る國は世界廣しと雖  
 も又とはあらざるならん、西洋人の我邦に來るも固より怪むに足らず、製絲器械の  
 如き便利なる者ある以上は其工風を盗まん爲めに歐米人のはるゝと我邦に來  
 るも固より當然の事なりと、獨り口ずさみ居りたり、今日小石川の砲兵工廠を見物  
 し横須賀の造船所を拜見して其盛大なるに驚き、是ならば世界中何れの國と戦ふ  
 ても勝つに相違なしと思はん如き者は決して尠なからざるならん、今日我邦人中

洋語を學び學科を研究するの必要なること

多數は給  
共進會

ナポレオン

多數は東京高崎間の鐵道あるを知つて、パシヒイツキレイルロードあるを知らざる者ならん、多數は柳ヶ瀬隧道のあるを知つて、タイムストンネルあるを知らざる者ならん、多數は上野の繪畫共進會へ行きて畫工の名人の日本程多き國は天下に又とはあらざるならん、杯と思はん如き者共ならん、我邦人中に斯く西洋の事情に疎き者の多きは悦ぶべきことなるや、甚だ憂ふべきことなり、何となれば斯くの如き者は歐米諸國の恐るべき者たることを知らざればなり、斯くの如き者は我邦の開化は如何程西洋の開化におくれ居るかを知らざればなり、憤發心を起して歐米人と競争せんとせざる者なればなり、何人を論せず己の當時の有様を以て最上の者と思ひ居らん如き者は自己の改良を計ることを知らざる者なり、昔時ギリシヤのソクラテスと云へる人は常に我は無學無識の者なりと云ひ居りたり、然れども無學無識なれどもそれでも尙ほ他人には優れりと云へり、何となれば他人は無學無識にてあり乍ら其無學無識なることを知らずして大得意で居る者なればなりと云へり、己を知り彼を知るの必要なるは特り個々人の上の事にあらず、一國人に取りても亦然り、今日の如く各國の關係の密なる時に當つて己を知らず、彼れを知らざる如き人民は他國の爲めに侮辱を被らんことは決して免れ難し、ナポレオン

アラビ  
將軍

黒旗軍

支那人

朝鮮人

治外法權

三世が佛國と兵端を開きて却つて大敗を取りたるは何の故ぞ全く敵國の事情に疎き而已ならず、自國の事情にも疎かりしが故なり、遂に生捕られて流罪に處せらるゝことをも知らずしてアラビ將軍が英軍に抗したるは何の故ぞ、全く海外の事情に疎かりしが故なり、到底佛軍には打ち勝ち難き者たることを知らずして黒旗軍が佛軍に抗したるは何の故ぞ、海外の事情に疎かりしが故なり、支那人の脅喝を以て佛人を籠絡せんとして竟に耻辱を取るに至りたるは何の故ぞ、全く海外の事情に疎かりしが故なり、朝鮮人が國の一大事になることを知らずして我公使館を襲ひたるは何の故ぞ、全く海外の事情に疎かりしが故なり、我邦人民をして西洋諸國の事情に通せしめんことは何よりの急務なり、彼と戦はんか彼の事情に通せざるべからず、彼と交はらんか彼の事情に通せざるべからず、我に最上の良砲あるも彼に何程堅固なる軍艦あるかを知らざるべからず、我に十年の圍みを引受けん爲め糧食あるも彼に幾十年間我を圍み得べき資財あるかを知らざるべからず、治外法權を停止せんか何故に彼は私の求めに應せざるか其の理由を知らざるべからず、彼と親密の交際を爲さんか何事が彼の信を得、何事が彼の信を失ふべき者たるかを知らざるべからず、彼と商賣を爲さんか彼は如何に商法に巧にして我は如何

洋語を學び學科を研究するの必要なること

婚姻せん

に拙きかを知らざるべからず彼と新婚を爲さんか彼が夫婦の關係を見る事果して如何なるや彼の宗旨上の思想は如何なるや之等のことを一々知らざるべからず我邦人は不徳なる者に非ずとせよ我邦人は無智なる者に非ずとせよ東西の人品其間に少しも優劣なしとせよ全體の上にくそ文明諸國に及ばざる所あれ個々人に就ては異同なき者とせよ良し然るも彼の事情に疎き者は政治、經濟、兵制、文學、宗教、教育、學藝、美術、商賣、工業、建築、衣食等何くれとなく近來僅に西洋風を眞似得たるを見て大得意に成り我は固陋社會を脱したる者なり我は文明社會に入社したる者なりと固陋主義の熾んに行はるるをも忘れて意氣揚々として安息せんとする者なればなり開國もよし内地雜居もよし彼我雜婚もよし然れども之を主張せんとする者は眞面目に事實を見ることを知らざるべからず徒に自惚心に耽りて彼我の優劣を認むることを知らざる如きは決して悦ぶべきことにあらず今日我邦の有様を見るに東西開化の優劣の著しきことを知らずして安息する者實に多し我邦の歐米諸國に劣る所は特り國會の未だ立たざること而已の如く思ふ者尠なからず明治二十三年に至りて一度國會の立つに至らんには歐米諸國と少しも優劣なき者と成らん杯と思ふ如き者尠なしとせずされば治外法權を憂ふる者は

大得意

自惚心

内地雜居

西洋の事情に通せん  
の方法

我言

あれども其存在する原因を認知する者はなし民權を唱ふる者は多くあれども教育上不便を極はむる文字を廢さんことを主張する者は至つて尠なし我邦人をして西洋の事情に通せしめ我邦人をして自惚心を脱せしめんことは今日の急務なり殊に外國に全國を開き内地雜居を許さるる杯云ふことのあらんには我邦人をして彼の事情に通せしめんことは最も必要なり。然り而して我邦人をして西洋の事情に通せしめんには如何なる方法を用ふべきか之をして西洋語に通せしめ西洋書を讀ましむるより外はあらざるなり西洋語を熾んに起さんことは實に今日の急務なり蓋し西洋語に通せんことは何人も甚だ有用なる事なれども取分け人の教育を専門にする者の如きは洋語に通じ、洋書を讀み得んことは最も必要なり何となれば第一人の教育を主る者の如きは自ら卒先して海外の事情に通じ人を誘導することを勉めずんばならず第二今日の教育中其大分は西洋の學科を以て成立つが故に西洋の書に就て之を研究せんことは教員には何より必要なり就ては今日諸君に建言致さんと思ふこと一つあり近來教員諸君が教育に關する智識を得られん爲の道は大に開けたりと云ふべし教育會あれば教育談會あり教育談會あれば、理醫講談會あり斯くの如き會の各

洋語を學ぶ學科を研究するの必要なること

地に起るは教育上何より悦ぶべきことなり然れども余は是ではまだ満足致さぬなり余の考にては教員諸君の爲に最も裨益あらんことは教員諸君が研究会と云ふ者を立てられて自身に其々の學科を研究せらるゝにありと思ふなり人に演説をさせて置きて之を聴聞し人に試験をさせて之を見物致し居るは樂は則ち樂なり然れども裨益あることは自ら研究するには遠く及ばざるなり教員諸君が最寄最寄にて組合を立て大學若くは師範學校等の教員を聘し之に就て各々好まるゝ所の學科を研究せられんことは教員諸君の爲に最も裨益あることならん獨り裨益ある而已ならず極めて必要なることならん何となれば今日の有様にては師範學校東京大學等は日々に改良に赴くが故に後から出来る教員程善良なる割合なり此際に於て舊來の教員が自ら研究もせず五六年も居らんには舊來の教員と新來の教員とは其優劣實に著しきことに至るならん竟には教員が勤まらぬ様に成るならん若し諸君にしてそこに心が附かれて今より研究会を起して少々づゝでも學力を進められんには後に來る所の教員に劣らるゝことのない様にも出来る事ならん諸君が諸學科を研究せられんことの必要なるは概ね斯の如し然らば諸君は此研究を爲さん爲に最も要用なる西洋語學は勉めて之を學ばれざるべか

らざるなり英語にまれ佛語にまれ獨逸語にまれ其一を學びて西洋書を讀み得る時は専門上教育上何んに付け彼に付け實に一方ならぬ便利なり御年を食したる方には敢て御勧め申さねごまだ若年の方々の如きは大に御奮發あらんことを願ふなり。(草稿)

詞

藻

# 新體詩鈔

初編

(明治十五年八月出版)

## 新體詩抄序

唐の横町の毛唐人が云ふには「大凡物不得其平則鳴艸木之無聲風撓之鳴水之無聲風蕩之鳴」云々人之於言也亦然不得已而後言其歌也有思其哭也有懷凡出乎口而爲聲者其皆有弗平者乎と我邦にも長歌だの三十一文字だの川柳だの支那流の詩だのと様々の鳴方ありて月を見ては鳴り雪を見ては鳴り花を見ては鳴り別品を見ては鳴り矢鱈に鳴りちらすとも十分に鳴盡すこと能はず何となれば古來長歌を以て鳴れる者なきにあらねどもこは最と稀なることにして殊に近世に至りては長歌は全く地を拂へる有様にて事物に感動せられたる時の鳴方皆三十一文字や川柳や簡短なる唐詩と出掛け實に手輕なる鳴方なればなり蓋し其鳴方の斯く簡短なるを以て見れば其内にある思想とても又極めて簡短なるものたるは疑なし甚だ無禮なる申分かは知らねども三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り盡すことの出来る思想は線香烟花か流星位の思に過ぎざるべし少し連續したる



思想内にありて鳴らんとするときは固より斯く簡短なる鳴方にて満足するものに  
あらず又唐風の詩を作り稍々長々と鳴るもの近來世間に尠じとせざれども抑  
も詩と云ふものは其意味も固より大切なるもの其音調の良否も又甚だ大切なり  
夫れ變則者流の漢學者が唐詩を作るや固より平仄てふものありて其詩たる一通  
りは音律に叶ひたることは萬々疑なきと雖も芥子坊主をして之を呼鳴らしめたる  
らんには果して心地よき音調のものなるか將た破鍋を楯木にて叩くが如きもの  
なるかは未だ知るべからず蓋し日本人に取りては支那流の詩は恰も啞の手眞似  
若くは操人形の手踊の如きものなり啞に生れずして啞の眞似をなし人と生れて  
人形の眞似をするもの又憫まざるべけんやそこで我等は連続したる思想内にあ  
る譯にもあらず心地よき音調を以て能く鳴ることの出来るものにもあらねども  
全く三十一文字や堅くるしき唐詩の出来ざる悔しさに何にか一つと腕組したれ  
どやはり古來の長歌流新體なご名を付けるは付けたが矢張自分免許の鼻高で  
あたら西詩を惜げなく譯も分らぬ文句以て譯したものでや尙拙なものをのせる  
長文句能く見れば

新體と名こそ新たに聞ゆれどやはり古體の大佛の法螺

法螺と知りつゝ古を我よりなさん下心笑止とこそは云ふべけれ法螺は我より始  
まれるものにあらぬはまだしもぞ人のなさることては假令へ法螺でもなき  
ぞかし唯々人に異なるは人の鳴らんとする時はしれた雅言や唐國の四角四面の  
字を以て詩文の才を表はすも我等が組に至りては新古雅俗の區別なく和漢西洋  
ごちやませて人に分かるが專一と人に分かるご自分極め易く書くのが一ツの能  
見識高き人たちは可咲なものど笑はゞ笑へ諺に云ふ蓼食ふ虫も好き〜なれ  
ば多くの人の其中には自分極の我等の美譽を賛成する馬鹿なごせす安んぞ知  
らん我等のちんぶんかんの寢言ごても遂には今日の唐詩の如く人にもてはやさ  
るごことなきを穴賢

明治十五年五月

山仙士 外山 正一識

○ブルウムフールド氏兵士歸郷の詩

涼しき風に吹かれつゝ  
椅子にもたれてあるさまは  
その座をしめし腰掛の

ありし昔しの我が父の  
實に心地克くありにける  
堅く作れる臂掛に

よそぢの昔し荒々ど  
 猶ありくごみゆるなり  
 元にかはらぬ其音色  
 満つる思ひは猶ほ切に  
 忘れんとして忘られず  
 後ろに掛けし古略曆  
 ひらくくご誘はれて  
 嵐に逢ふて翻へる  
 一枚つゝに又下へ  
 數も合せて二十年  
 暮せる年の數取りぞ  
 來たる一羽の知更鳥は  
 我をつらく不審顔  
 はにかむ如く見えにけり  
 嗚呼老いたりや老いにけり

刻みのこせる我が名前  
 柱に掛けし古時計  
 聞きて轟く我が胸に  
 はりさく如く堪へがたし  
 嗟歎に堪へぬ其時に  
 忽ち寄するそよ風に  
 上るはこれぞ陣前に  
 小幡こそは見ゆるなれ  
 下りて落るその紙の  
 故郷をはなれ遠國に  
 折しも家の入口へ  
 人に押れたる鳥なれど  
 怖づるが如く且つは又  
 口に云はねどそのふりは  
 それに居はする武士は

昔しの友にあらぬかと  
 斯く心中に彼れ是れと  
 眺にながめつくくご  
 苔の席を眺むれば  
 その美しくさあてやかさ  
 是も誰がわざ稚子の  
 敷て樂むものなりと  
 思ひは更にいやまさり  
 年をも日をも打ち忘れ  
 わつご計りに啼きにけり  
 あゝ我れながら愚まじと  
 過ぎ越し方をさまんに  
 辱かしく又口惜しく  
 軍の神をのこしれり  
 可惜勇士の失せぬるは

尋ぬる様に見えにけり  
 物を思へるその間  
 窓の限に織りなせる  
 緑の色の青々と  
 又と類はあらなくに  
 あしたゆふへの手すさみに  
 推量すればいとどなほ  
 胸はそごろに塞りて  
 前後も知らず立上り  
 稍時ありて心付き  
 再び椅子につくくご  
 思ひつゞけて按ずれば  
 意はず髪も逆立ちて  
 名譽の淵に落ち入りて  
 實に傷まじき事ぞかし

殺傷放火分捕の

今更思ひめくらはせば  
 我身を守るたからぞと  
 我身の罪をかさねたる  
 恨はいとどいやまされ  
 二人の影ぞ見ゆるなる  
 あるしの老と見受けたれ  
 計らすめぐり逢ふ坂や  
 せき來る涙せきあへず  
 喜し泣きにぞ泣きにける  
 目元涼しき小女子に  
 これナンセーと手を取りて  
 こゝに居やるはやうくと  
 そなたの伯父のチャイルぞと  
 じらをの如き指をあげ

其有様を熟々と

あら恐ろしやむごたらし  
 頼み頼める劍こそ  
 仇と思へばなほさらに  
 聲するかたをうちみれば  
 此の影こそは稚子と  
 やがて入り來る我父は  
 我子の顔をひと目見て  
 我を抱きて老いの身の  
 そが傍らにイめる  
 腰打屈め老人は  
 口を合はすもあまる愛  
 イスバニヤより歸國せる  
 云へば女は近寄りて  
 いとど曇れる老の眼を

そと打弾きぐわんせなく  
 嗚呼我ながら愚なり  
 繰り返へすこそ無益なれ  
 此の老卒ぞ幸多き  
 心に掛る雲もなし

笑ふ姿は可愛ゆらし  
 身の上ばなし斯く長く  
 それに付きても兎に角に  
 浮世の中に今はまた

○テニソン氏輕騎隊進撃の詩

左の詩は一千八百五十四年英佛の兩國土耳其を援けて魯西亞と兵端を開き、遂に高名なるクライミヤの戦争となり、此間數多の合戦此處彼處に在りたる中、最も有名なるものは同年六月二十五日バラクラバの戦争にて、英國の輕騎隊六百騎が目餘る敵の大軍中へ乗り込み、古今無雙の手柄を顯はしたれども、惜い哉衆寡素より敵に難く、其大概は討死し或は擒にせられ、無難に歸陣したる者甚だ僅にてありきと、當時英國に有名なる詩人テニソン氏が其進撃の有様を吟詠したる者にして、何國人に限らず、苟も英語を解するもの此詩を暗誦せざるなしといふ。

其 一

一里半なり一里半

死地に乗り入る六百騎

士卒たる身の身を以て

答をなすも分ならず

死ぬるの外はあらざらん

其二

右を望めば大筒ぞ

共に打出す砲聲は

響の如く凄まじや

猛り立ちてぞ進むなる

勇んで乗り入る六百騎

其三

抜けは玉ちるやいばをば

さら／＼と輝けり

大砲方をなで切りす

並びて進む一里半

將は掛れの令下す

譯を糾すは分ならず

これ命これに従ひて

死地に乗り入る六百騎

前も左りも又筒ぞ

天に轟くいかづちの

彈丸雨飛の間にも

死地にこそ入れ罅の口

皆もろ共に振りあげて

敵陣近く乗り掛けて

最と目冷しき働きぞ

烟の中に飛込みて

太刀の早業見ごとなり

遂にさゝふる事ならず

馬の頭ぞ立直す

残るはいとどわづかなり

其四

右を望めば大筒ぞ

共に打出す砲聲は

彈丸雨飛の其中に

死地より出でゝ乗り歸へす

歸るは元の一里半

残るはいとどわづかなり

其五

あゝ勇まじきものゝふの

手柄は永く傳へなん

烈しく陣を破るなり

敵の軍勢たぢ／＼と

むら／＼ばつとむらくづれ

以前に進みし六百騎

左りも後も又筒ぞ

天に轟くいかづちぞ

縦横むじんに切り靡く

罅の口より脱れ出て

六百人の其中で

よに香ばしきその譽れ

今のをさなご生ひ立ちて

とる年あまた重りて  
頭に霜を戴きて  
六百人の豪傑が  
そのふる事を語りなば

腰は梓の弓となり  
孫ひこやしやご多き時  
敵の陣へと乗り入れる  
末代までも名は朽ちじ

○ロングフェルロー氏人生の詩

そも靈魂の眠るのは  
人の一生夢なりと  
眠らにや夢は見ぬものぞ  
夢とおもへごさにあらず  
人の一生夢ならず  
人の終りは慕なくも  
土より來り又土に  
そりや靈魂の事ならず

死ぬといふへきものぞかし  
あはれなふしでうたふなよ  
此世の事は何事も  
最とたしかなる事ぞかし  
墓にうづまるものならず  
歸ると云ふは肉體ぞ

此世に在りて楽しむも  
世にある趣意にあらざらん  
日毎々に怠らず  
功を立てねばならぬぞよ

又苦しむも固と人の  
生るは役に立つ爲めぞ  
今日は今日丈け一日の

光陰實に箭の如く  
心は如何に猛く共  
送葬太鼓打つ胸は  
最ともあはれにひびくらん

藝道最とも易からず  
慕なく進む葬禮の  
音止めされたる太鼓の音

此世の中は戦争ぞ  
人に生れた甲斐もなく  
あゆむ羊や牛たるな  
功名手柄なすべきぞ

其戦争の中に居て  
人に使はれ追はれつゝ  
人に劣らず奮發し

如何に楽しく思ふ共  
如何にうれしくありつとも  
働くべきは現在ぞ  
胸の心と天の神

未來はあてにすべからず  
過去はむかしに過し事  
其の働きを見る者は

豪傑輩の一生を  
生きて甲斐なきものならず  
稀なる譽れ得るならば  
永く傳へて残るらん

熟く思ひめぐらせば  
人に勝れし手柄して  
名は香ばしく後の世に

其の香ばしき名を聞かば  
艱苦辛苦の浪風に  
助け船さへあらぬ身も  
功名遂ぐる者あらん

社會の海に乗り出して  
吹き廻はされて破船して  
氣を取り直し奮發し

されば人々怠るな  
運命如何につたなきも  
たゆまず止まず自若とし  
勤め働くことをせよ

暫時も猶豫するなかれ  
心を落すことなかれ  
功名手柄なしつとも

### ○拔刀隊

西洋にては、戦ひの時、慷慨激烈なる歌を謡ひて士氣を勵ますことあり。即ち佛人の革命の時「マルセイエーズ」と云へる最に激烈なる歌を謡ひて進撃し、普佛戦争の時、普人の「ウオッチメン、オン、ゼ、ライン」と云へる歌を謡ひて愛國心を勵ませし如き皆な此の類なり。左の拔刀隊の詩は即ち此の例に倣ひたるものなり。

我は官軍我敵は  
敵の大將たる者は  
之に従ふ兵は  
鬼神に恥ぬ勇あるも  
起しと者は昔しより

天地容れざる朝敵ぞ  
古今無雙の英雄で  
共に慄悍決死の士  
天の許さぬ叛逆を  
榮えし例しあらざるぞ

敵の亡ぶるそれ迄は  
玉ちる劔抜き連れて

皇國の風と武士の

維新このかた廢れたる

又世に出づる身の擧れ

刃の下に死ぬべきぞ

死ぬべき時は今なるぞ

敵の亡ぶるそれ迄は

玉ちる劔抜き連れて

前を望めば劔なり

劔の山に登らんは

此世に於てまのあたり

我身のなせる罪業を

進めや進め諸共に  
死ぬる覺悟で進むべし

其の身を護る靈の

日本刀の今更に

敵も味方も諸共に

大和魂ある者の

人に後れて恥かくな

進めや進め諸共に

死ぬる覺悟で進むべし

右も左りも皆な劔

未來の事と聞きつるに

劔の山に登るのも

滅ぼす爲にあらずして

賊を征伐するが爲め  
敵の亡ぶるそれ迄は  
玉ちる劔抜き連れて

劔の光りひらめくは

四方に打出す砲聲は

敵の刃に伏す者や

絶えて墓なく失する身の

其血は流れて川をなす

敵の亡ぶるそれ迄は

玉ちる劔抜き連れて

劔の山もなんのその  
進めや進め諸共に  
死ぬる覺悟で進むべし

雲間に見ゆる稻妻か

天に轟く雷か

丸に碎けて玉の緒の

屍は積みて山をなす

死地に入るのも君が爲め

進めや進め諸共に

死ぬる覺悟で進むべし

彈丸雨飛の間にも  
進む我身は野嵐に  
墓なき最後をさぐるとも

二ツなき身を惜まずに  
吹かれて消ゆる白露の  
忠義の爲めに死ぬる身の

死して甲斐あるものならば  
我と思はん人たちは  
敵の亡ぶるそれ迄は  
玉ちる劔抜き連れて

死ぬるも更に怨なし  
一步も後へ引くなかれ  
進めや進め諸共に  
死ぬる覺悟で進むべし

我今茲に死なん身は  
捨つべきものは命なり  
忠義の爲めに捨つる身の  
永く傳へて残るらん  
義もなき犬と云はるゝな  
敵の亡ぶるそれ迄は  
玉ちる劔抜き連れて

君の爲めなり國の爲め  
假令ひ屍は朽ちぬとも  
名は芳しく後の世に  
武士と生れた甲斐もなく  
卑怯者となそしられそ  
進めや進め諸共に  
死ぬる覺悟で進むべし

○チャールズ、キングスレーー氏悲歌

無常を告ぐる入相の  
三人の漁夫は帆を上げて

鐘の音するたそがれに  
入る日を指して西の海に

走らす船は進めども  
心の中は皆な同じ  
おきに向ひてイめる  
まうけは薄く子澤山  
洲に打掛くる浪音の  
かせがにやならぬ男の身

妻子の爲めに引かざる  
父の出船を眺めつゝ  
童子は外に餘念なし  
雨の降る日も風の夜も  
最とすさまじき其時も  
袖のひぬのは女子の身

三人の漁夫の妻三人  
鐘もほのかに聞ゆれば  
火を挑んと立寄りて  
窓の戸開けて眺むれば  
空ら打ち過ぐるむら雲は  
暴風は如何に吹けばとて  
洲に打ち掛くる浪音は  
かせがにやならぬ男の身

日も西山に入相の  
共に籠りし燈臺の  
つまめる心の夫思ひ  
驟雨やら暴風やら  
色黒々と物すごし  
水かさ如何に増せばとて  
如何程すごく聞けばとて  
袖のひぬのは女子の身



朝日かゞやく砂礫に  
 残るは三つの屍ぞ  
 歸らぬ旅に門出して  
 髪振り亂し取りすがり  
 目もあてられぬ風情なり  
 袖のひぬのは女子の身  
 一日も早く樂をせん  
 寄せ來る浪のくだけつゝ

潮引き去りて其跡に  
 三人の漁夫の妻三人  
 歸らぬ夫のなきがらに  
 消ゆる計りに啼き入りて  
 かせがにやならぬ男の身  
 一日も早く世を去らば  
 屍の跡の砂礫に  
 鳴りたきや鳴れよと儘よ

此篇は高僧ウルゼー初め王の寵愛を得て、大權を握り、威を海内に振ひ、其  
 富王室に劣らざるに至りしも、忽ち王の意に戻り、官職を奪はれ、所有を沒  
 收せられし時、世運の定まりなきを嘆息する所にして、頗る有力の作なり。  
 おさらばさらばいざさらば  
 榮譽に永く別るべし  
 再び會はぬ暇乞ひ  
 人の習は皆な都て

利運の端の芽出しなば  
 位に位重なりて  
 天にも登る龍なりと  
 冬や深く置く霜の  
 根までを枯らす霜枯れに  
 見ると慙れな有様は  
 永の年月心なく  
 浮き袋にてうかゝと  
 丈の立たざる淵に入り  
 こらえおふせず張り裂けて  
 忠を盡して年寄れる  
 身の零落に涙川  
 浮世の虚飾や譽れ程  
 今に至りて我が胸に  
 廣き世界の其内で

八重咲きにはふ花盛り  
 榮耀榮華を極むれば  
 悦びいさむをろかさよ  
 情け用捨も荒野原  
 運極はまりし身の墮落  
 我が今日の身の上ぞ  
 名譽の海に浮べるは  
 遊ぶ童子に異ならず  
 飽まで強き我が意地も  
 勞れはてたる精神に  
 其の甲斐もなく今ははや  
 水屑とこそは成るべけれ  
 忌むべき物はあらずかし  
 初めて悟る所あり  
 王者の機嫌取り取りに

此の世を渡る男ほど  
願ふ所は其の笑顔  
彼と是との氣がねして  
軍するより尙ほ多し  
遂に零落する時は  
再び浮ぶ瀬はあらず

憐むべきは無きぞかし  
恐るゝ所は其の不興  
憂さ恐怖さの数々は  
女子の機嫌取るに増す  
天より落るルシフツなり

○社會學の原理に題す

宇宙の事は彼れ此れの  
規律の無きはあらぬかし  
微かに見ゆる星とても  
云へる力のあるゆるぞ  
又定まれる法ありて  
且つ天體の歴廻れる  
必ず定まりあるものぞ  
地震の如く亂暴に

別を論せず諸共に  
天に懸れる日月や  
動くは共に引力と  
其引力の働きは  
猥りに引けるものならず  
行道とても同じこと  
又雨風や雷や  
外面は見ゆるものとても

一に定まる法はあり  
地をはふ蟲や四足や  
其の組織より動作まで  
又萬物は皆な共に  
あらざる物はなきぞかし  
別を論せず諸共に  
遺傳の法で子に傳へ  
適せぬものは衰へて  
桔梗かるかや女郎花  
牡丹に縁の唐獅や  
木の間囀る鶯や  
雲居に名のる杜鵑  
友を慕ひて奥山に  
譯も分らで貝の音に  
羊に近き猿はまだ

野山に生ふる草木や  
空翔けりゆく鳥類も  
都て規律のあるものぞ  
深き由來と變遷の  
鳥けだものや草木の  
親に備はる性質は  
適するものは榮えゆき  
今の世界に在るものは  
梅や櫻や萩牡丹  
菜の葉に止る蝶々や  
門邊にあさる知更鳥や  
同じ友をば呼子鳥  
紅葉ふみわけ啼く鹿や  
追はれてあゆむ牛羊  
愚なことよ萬物の

靈とも云へる人とても  
元を質せば一樣に  
積みかさなれる結果ぞと  
見極はめたるこれぞこれ  
優すも劣らぬ脳力の  
これに劣らぬスペンセル  
化醇の法で進むのは  
動物而已にあらずして  
活物死物それのみか  
區別も更になかりしを  
感ずるも尙あまりあり  
思想智識の發達も  
社會の事も皆な都て  
既にものせる哲學の  
生物學の原理やら

今の體も腦力も  
一代増に少しづつ  
今古無雙の濶眼で  
アリストートル、ニウトンに  
ダルウキン氏の發明ぞ  
同じ道理を擴張し  
まのあたりみる草木や  
凡そありとしあるものは  
有形無形それ／＼の  
眞理極めし其の知識  
されば心の働きも  
言語宗旨の改良も  
同じ理合のものなれば  
原理の論ぞ之に次ぐ  
心理の學の原理をば

土臺となして今更に  
書にもものさるゝ最中ぞ  
そも社會とは何ものぞ  
其結構に作用に  
種族と親と其の子等の  
男女の中の交際や  
取扱の異同やら  
違ひの起る源因や  
其變遷の源因や  
智識美術や道德の  
遷り變りて化醇する  
最とも目出度き美舉にこそ  
讀みたる者は誰あつて  
實に珍らしき良書なり  
何から何とせわをや

社會の學の原理をば  
此の書に載せて説かるゝは  
其發達は如何なるぞ  
社會の種類如何なるぞ  
利害の異同如何なるや  
女子に子供の有様や  
種々な政府の違ひやら  
僧侶社會のある故や  
儀式工業國言葉  
時と場所との異同にて  
其の有様を詳細に  
既に出でたる一卷を  
此の書を褒めぬ者ぞなき  
社會の事に手を出して  
責任重き役人や

走り書きやらからしやべり  
 天下の事はト飲みと  
 新聞記者や演説家  
 人をあやまる罪どがの  
 それ等の事はさて置きて  
 蠶一枚させばとて  
 長の年月年季入れ  
 出来る事にはあらざるに  
 年季も入らず學問も  
 新聞記者や役人と  
 斯様な者が多ければ  
 尙ほ恐ろしき虚無黨の  
 揉めに揉めたる其上句  
 秩序も立たず自由なく  
 再び浪風静まりて

舌も廻らぬくせにして  
 法螺吹き立てり利口ぶる  
 此の書を讀みて思慮なさは  
 少しは減りもするならん  
 凡そ天下の事業は  
 足袋を一足縫へばとて  
 寝る眼も寝ずに習はねば  
 獨り社會の事許り  
 するに及ばぬ譯なれば  
 成るは最と最と易けれど  
 忽ち國に社會黨  
 起るは鏡に見る如し  
 此蜂取らずの丸潰れ  
 泥海にこそなるべけれ  
 大平海と成る迄は

百年足らず掛らんは  
 有様見ても知れたこと  
 妄りに手出しする勿れ  
 廣き世界の其中に  
 盲目<sup>めくら</sup>同士の戦に  
 規ひきまらぬ棒打の  
 今の世界は旋風<sup>つむじかぜ</sup>  
 烈しき中へついで一寸  
 足も据はらず眠眩き  
 ぐるくぐるくと廻はされて  
 上句のはては空中へ  
 初めて悟る其の時は  
 後悔先きに立たぬなり  
 其の吹く中へ過ちて  
 上手どころは云ふべけれ

革命以後の佛蘭西の  
 そこに心が付きたらば  
 妄りにしやべること勿れ  
 恐るべきもの多けれど  
 越したるものはあらぬか  
 仲間入りこそあやうけれ  
 烈しく旋る時なるぞ  
 絡き込まれたら運の盡  
 頭はいとどぐら付きて  
 すき間もあらず廻はされて  
 絡き上げられて落されて  
 早遅蒔の辣椒  
 颶風烈しく吹く時は  
 船を入れぬが楫取の  
 政府の楫を取る者や

輿論を誘ふ人たちは  
能く慎みて輕卒に

○失題

最と下賤なる我人の  
今しも眠る其數は  
あゝ羨まし羨まし  
天より我に賜はりて  
如何なる罪の祟りにや  
假令暫時の間なりとも  
險まよたを閉ちて眠らんと  
そも如何なれば眠神  
くすぼりかへる藁の床  
心地もよげに横たはり  
飛びくる虫の羽音さへ  
すや／＼眠るものなるに

社會學をば勉強し  
働かぬやう願はしや

枕を高く高いびき  
幾千萬かあるならん  
眠の神よ眠り神  
伽するごこそ云ふべけれ  
眠の神に見はなされ  
胸の苦しさ忘れたさ  
如何にすれども眠られず  
見る影もなきあばら家の  
むさ苦しきも厭はずに  
枕のほとりふん／＼と  
眠りを誘ふ助にて  
伽羅沈香を炷たき立て

床の上なる天蓋は  
眠を誘ふ樂の音は  
貴人高位の寢屋までは  
實に愚なる神ぞかし  
不潔な床に横たはる  
王者の床に來らぬぞ  
比べものにはならぬのを  
ゆら／＼ゆる／＼帆柱の  
水夫の目をば閉ぢさして  
吹き來る嵐凄じく  
天地とどろく浪の音は  
下は無間の地獄なる  
浪にゆらめき眠らす  
總身水にひたされて  
斯く騒じき其の折も

金襴緞子以て作り  
最と心地よく聞ゆなる  
何とて來ることのなき  
何故にかく見苦しき  
下賤な者と寢はするも  
金の時計と號鐘と  
はていぶかしき神の意ぞ  
高き上にも安く寢る  
情け用捨も荒浪や  
うづ巻く浪を巻き上げて  
死人も覺むる程なるに  
高き柱の其上で  
神の力ぞ不思議なる  
身を粉に碎く水夫には  
眠りの神は憎き添ふに

草木も眠る丑三に  
手を替へ品を替ゆるとも  
依怙最負なる神にこそ  
寝ろや眠むれや羨まし  
冠着たる頭程

眠りを誘ふ其の工風  
王者の傍に來らぬは  
あゝ幸多き賤の身は  
つらく思ひ合はすれば  
苦しきものは世にあらじ

○シェークスピア「ハムレット」中の一段

死ぬるが増か生くるが増か  
つたなき運の情なく  
堪へ忍ぶが男兒ぞよ  
一層のことに二ツなき  
死んで眠りてそれぎり  
さらりと去つて消え行くも  
一ト眠りにてつもりこし  
萬の艱苦それぎり

思案をするはこゝぞかし  
うきめからきめ重なるも  
又もおもへばさはあらで  
露の玉の緒うちきりて  
からきくるこき世の中を  
卑怯の業にあらぬかや  
胸の焦れや現身の  
去りて去らるゝものならば

それによまされることなきも  
眠りて後に又や見ん  
死んで眠りて肉身を  
如何なる夢を見ることぞ  
無情き世にながらへて  
もとはご云へばのちの世の  
人の非道や下すみや  
公事訟の永引きや  
堪へ忍ぶは何故ぞ  
一本あれば何のその  
あだし命をながらへて  
うんすと云はん馬鹿はなし  
此世の愛目堪ふるも  
方角さへも誰知らぬ  
飛んで火に入る夏虫の

死ぬる眠ると云ふものゝ  
夢の行末おぼつか  
離れは離れ行くものゝ  
人の迷ふもことほりよ  
憂い目つらい目堪ふるも  
夢を恐るゝ故ぞかし  
叶はぬ戀の悲しみや  
役人づらの權柄を  
なまくら刀錆刀  
極樂往生出來ふなら  
重荷を脊負つて汗みづく  
死なんごしても死に兼ねて  
十萬億土とは云へど  
人の歸らぬ國へ行き  
虫も知らさぬ恐怖い目に

、山存稿 詞藻

逢ふのがいやさ恐ろしや

臆病神にさそはれて

思ひ金つ大謀も

もさを質せばこゝぞかし

くり言するも益なしや

オヘリヤ殿よ辨天よ

祈つて給へ我罪の

二三三

世間の人の思案して

据ゑたる胸も小ゆるぎし

途にはたさず水の泡

あゝ愚さよ我ながら

のうこれまをし美くしの

後世のねがひする時は

亡ぶる様に頼むぞや

## 耶蘇辨惑

(明治十五年十月)

序

余先年米國に遊學せる時、歐文にてロウマン、カソリック宗の惡口を云へる一篇の文章を草せることありき、而して竊に以爲く外國人の分際にて、さうなりかうなり斯く惡口を云はんことの出來たるは、全く英語は元來惡口好きの人民の國語にて、惡口を云ふには至つて便利なる性質の故にして、中々我が人民の如く謹直にして、惡口嫌の最と上品なる人民の使用する言語にては、惡口てふことは、絶えて出來ざることなりと、其の後或る宴會の席にて某新聞の隊長、余に云はるゝに、氏は嘗てロンドンにて、余の斯の文を讀まれたることありしが、斯く細かに惡口を云ひまはすことは、本邦語にては所詮出來ざる事ならん、其時は余も又然かく思へり、而して爾來彼の隊長先生の新聞紙を讀む毎に、未だ曾て其惡口の巧なるに感ぜざるはなし、是に於て大に悟る所あり、先日宴會の席に於て隊長の余に語られしも、蓋し亦惡口の最も巧なるものなりしかと、本邦人にも斯る惡口の名人のあるからには、本

邦の言語と雖も全く悪口に不適當なるものにはあらぬこと明けし。そこで余も隊長先生に倣ひ、何か好き種がありたらば、一番思ふ存分悪口を云ふてみると思ひ、何か好き種こそあれど、待詫びたれども別に是ぞと云ふ種もなし。随分なきにあらぬども、何れも至つてけんものなるもの計り、悪口は政府の悪口程易きものはあらぬことは、近來碌に筆も廻はらぬ者迄が、猫も杓子も矢鱈に政府の悪口と出懸るを見ても知らるゝならん。併し天下の事は何事も時と場所とに依つて異なるものなり。他人には政府の悪口程云ひ易きものはなきも、官吏に取りては政府の悪口程云ひ難きものはあらぬなり。云へば去年の暮の通り、到底目算があるか大馬鹿でなければ、官吏にて政府の悪口は云ひ難き筈なり。余の如きは差當り別に目算もなし、又其れ程の大馬鹿でもなし、因つて外に何か好き悪口の種もがなし、頻りに考ふれども何分なし。代言先生の悪口を云はんか、名譽回復と出懸られ、ごのつまり、代言人を頼み、阿漕な金を取られねばならず。新聞記者の悪口を云はんか、其返報には雑録とか漫言とか雑報とか云ふ恐敷い恐怖い奴で、無きこと迄を有つた様におつにやられることもなしと保し難し。醫者の悪口を云へば、コレラになつた時に忽地困る。自分の悪口を云へば人に怒られる氣遣はあらぬども、肝腎の題が干上る。此等の事は

如何程悪口の好き種でありても、めつたに手は出せず、然るに茲に唯一ツ悪口の最も好き種こそあれ、耶蘇宗徒即ち是なり。夫れ政府なり、代言人なり、新聞記者なり、若し之が悪口を云ふ時は、必ず怒らざるはなし。政府の外は必ず犬の糞で敵と出懸けぬは稀なり。特り耶蘇宗徒に至りては斯る憂は更になし。耶蘇宗徒に限り、如何程之を悪様に云ふも、少しも悪まるゝ氣遣はなき而已ならず。却つて爲めに愛せられんとするなり。耶蘇教の本尊が曾て人に、爾聞有言、爾必愛爾隣、爾敵、惟我語爾敵、爾者愛之、爾爾者祝之、爾爾者善視之、爾爾者爲之祈禱、如是則可爲爾父在天者之子と云ふことありと聞けるは、誤謬か。實にさることのあるならば、如何程耶蘇の宗教を信する者の悪口を利くも、悪まれ咀はるゝことはなくして、愛さるゝ譯なる故に、世の中に是程妙なことなきも、二千年足らずの間、彼の宗の人の舉動を史に徴し能く視るに、彼の宗の人の教に、斯ることありとは露も見えぬなり。されば余は今彼の人達の悪口を利きて之を試さんとするなり。此悪口の爲に彼の人達益々余を愛し、益々余と親を結ばれんとせらるに於ては、余の満足之に過ぐるものあらざるなり。口に人を咀ふべからずと云ひ、實際人を咀ふ者、口に敵を愛せと教ふるも、實際兄弟牆に闘ぐ者、斯る族は余の最も感服せざる所なり。斯る族の耶蘇宗人の中に甚



だ多きは、余の最も彼の宗旨の爲めに惜む所なり。嗚呼耶蘇宗人よ、口に爾の宗の他の宗に優る事を喋々するを止めて、爾の舉動に由つて之を人に示せ。爾の舉動にして眞に世人をして、之に感服せしむる如き者たらしめんには、爾の宗教に歸化せん者多くあらんこと、敢て疑ふべからざるなり。耶蘇曰く、由果而識樹矣。爾の行は果なり。爾の宗教は樹なり。人をして果の善なるを知らしめば、樹の善なるを知らしむるは又易き而已。爾僞善者乎、先出梁木於己目、則爾可明見以出物屑於爾兄弟之目矣。同じ耶蘇教を奉ずる徒が、同じ耶蘇教を擴張せん爲に設けたる、新聞雜誌の記者同士の不和の如きは、該宗人の最も耻づべき事なり。年々幾萬圓とも知れぬ金を費しなから、斯る事をなし居る位では、果の善なることを人に知らしむることは甚だ覺束なし。其れが出来ざる日には、樹の善なることを如何程喋々するも、徒に口に風をひかするに過ぎず。憐むべきは耶蘇の犬死なり。

余の胸膈固より狭しと雖も、耶蘇教を容るゝの地なきにあらず。余の學識淺薄なりと雖も、二千年足らずの間億萬人の信仰せるものには必ず取るべきものあらんを知らざるにあらず。余固より、我邦人の耶蘇教を信せんことを憂ふる者にあらず。特に之を信する者、其信薄きを憂ふるなり。佛にまれ、孔子にまれ、耶蘇にまれ、眞に之を

信じ、其説く道を能く隨ふ者は、余の常に見るを歡ぶ所なり。然るに近來漢學者流の有様を見るに、其最も經學に精しき者と雖も、主とする所は其精に誇るに過ぎず。之に精しく、其精しきに由つて、心を正し、身を修め、家を齊へ、國を治めんとする者の如きは最も稀なり。如何に孔孟の道に明るきも、之を實際行はんとせざる者の如きは、眞に其の道を信する者なりとは云ひ難し。これは是れ所謂の論語讀みの論語知らず。斯くの如き儒者は之を鸚鵡儒者と云ふべし。鸚鵡儒者は社會の品行を改良せん爲めに頼むべきものにあらず。蓋し今日に有りては、其道を説く者も、之を聴く者も、共に其道を實際行はんとする如き者にはあらずして、特に其道の如何を知らば、則ち以て足りれどするものならん。笑止の至りなり。又願みて佛僧社會の有様を見るに、實に言語同斷なる景狀なり。夫れ佛僧たる者、身に衣を纏ひ、肩に袈裟を掛け、手に珠數を爪繰れる所は、僧は則ち僧なれども、其行ひを視、其心を察するに、邪界より人を救脱して、極樂往生をさせん。杯とは中々思も付かぬ事にて、自ら邪界の底に墮落し、身より起れる煩惱の繩にて縛られ、疑の闇路に迷ふ心より、彌陀を頼みて往生を願ふ心は露もなく、自身は現に罪惡の生死流浪の凡者にて、貪欲の心は日々に彌勝り、供養貪の心は強く、威儀にめで、人の財をむさぼりて、我が寶をばをしむなり。顯色

貪を制し兼ね遊女狂ひや、妾を蓄へ酒食に耽ける不身持は浮屠の教の衰へし證據とこそは云ふべけれ。此の風俗を一洗し、佛教の衰へたるを回復し、世人の品行を改良なさんには、蓋しルーサー若くはロヨラの如き豪傑の僧徒中に現出せんことを肝要なれ。今日の所にては其れも至つて覺束なし。此の時に乘じ他の宗教の侵入せんことは最も容易にして、且つ今日の所にては浮屠の道も孔孟の道も、眞に之を信じ、此道に由つて人を救はんとする如き人物至つて乏しきが故に、己が宗教を信すること眞實にして、之を以て人を救はん爲には生命を省みず、財産を惜まず、口で道を説かんよりは、行にて之を示さんとする如き者、多き宗教の我邦に入り來らんことは、何より願はしきことなれば、耶蘇教にても、回々教にても、其任に堪ふる者でさへあれば、何宗教にても厭ふことは固よりあらねども、回々教も、耶蘇教も、既に佛教同様の衰頽に就かんとするの恐あり。されば耶蘇宗の如きは年々幾萬圓共知れぬ金を費し、宣教師を萬邦へ派遣し、或は會堂を建てる等のことはすれども、肝腎の傳教師先生に、錢取仕事に宗教を弄ぶ者多く、眞に救主の言を信じて、人を救はんとする如き者寡きを如何せん。耶蘇云へるあり、爾中欲爲大者當爲爾役、又爾中欲爲首者當爲爾僕、即如人子至非以役人、乃役於人、且捨其生爲衆贖也。傳教師中能く此言

を守る者幾人ありや。傳教の道は、煉瓦石堂中に於て己が宗教の善なるに誇り、或は雜誌を著して仲間同士の悪口を云ふに止るか。煉瓦石堂や、新聞雜誌を待つて初めて傳教の道を得たりとせば、耶蘇や、日蓮、マホメット、ポール、サビエーは如何して傳教せるぞ。煉瓦石堂たり、新聞雜誌たり、固より傳教の爲に有用なるものなるべし、然れども傳教の道は尙ほ其他にもなくんばあるべからざるなり。今の傳教師たる者此に見るある者至つて鮮し、豈難せざるべけんや。

余の本詩を著すや固より耶蘇教に對し、寸毫の惡意あるにあらず、余の此序を作るや固より浮屠孔孟の道を害せん爲にあらず、特り耶蘇の教を奉ずる者、孔孟の道を説く者、其信薄きを憂ふる而已、耶蘇信仰の人達よ、爾に誚諷する者を以て、特り爾の友とする勿れ、爾の非を擧ぐる者を以て、悉く仇とする勿れ。

井上巽軒曰、按筆一呼、衆理奔命、如引敵陷八陣中、妙。又曰、耶蘇之教、雖有可取者、而亦不免奇怪荒誕之詆、然世之濫稱信儒、或不知其所非、而妄信焉、是以我、山先生著書以排擯之、蓋亦出于老遊心歟。

辨惑 新體 耶蘇狂詩 (未定稿)

敵を愛せど口では云ど 敵を愛せぬ而已ならず  
 同じ宗旨の國まで同じ 人と人との殺し合ひ  
 焼殺されつ焼殺し 兄弟にても斯くなるに  
 いかで敵をば愛す杯 途方途轍もなきことぞ  
 兄弟殺す者共が いかで他人を愛すべき  
 敵を愛せと云ふ神の 悪魔は大の敵なるが  
 神は悪魔を愛するか 神は悪魔に免許せり  
 己が子分の人類を 苦しめさす譯なるか  
 我が子を害す其敵を 亡ぼす術は知りながら  
 亡しはせてべん／＼と 見遁し置きて日に増に  
 敵の勝利と成り行くは なんほ敵をば愛すると  
 云ふ精神によればとて あんまりむごい神心  
 此世の親に斯くむごき 心の者がありたらば

親でも親にあらぬなり 親は親でも鬼親じや  
 我子をさらう人あるも 我子の髮首かくとても  
 我目の前でするとても 更にとがむる事もなく  
 見ぬふりなして捨置て 得たり顔にて居る親は  
 之を何と云ふべきぞ 是が我子を愛すること  
 云へる者にて有ならば 子は皆親の敵となり  
 敵を愛する其神に 愛せられたが優るなり  
 實に神意は不思議なり 人の心と斯く違ふ  
 神の心を當て事の 念佛祈願するとても  
 神は納受になることか

耶蘇又人に教へらく 汝命も飲食も  
 汝着るべきものとても 意にばし掛る事なかれ  
 命は肉に優らぬか 體は衣服に優らぬか

汝知らずや空中を 飛行く鳥は種時かず  
 又刈り收れず穀物を 貯ふ倉に收れもせず  
 されど汝の天父には 之を養ひ給ふぞよ  
 して汝等は空中を 飛行く鳥に優らぬか  
 と云ひたるは是ぞ是れ 士農工商諸共に  
 寝て居て食べる教なり 今より前非後悔し  
 耕す者は鋤鋤を 抛擲なしてしまふたら  
 赤裸で道中はまた愚か 赤裸の議員帝王も  
 珍奇しからぬ者ならん 若し耕さず織らすして  
 着られ食はるゝものならは 汗水流す世話もなし  
 重荷を擔ふ馬鹿もなし 晝は更なり夜迄も  
 稼ぎに稼ぎ盡くしても 多き家族をさへ兼ね  
 飢て凍へる億萬の 人も泣くには及まじ  
 斯る教のありながら 耶蘇教人は何故に  
 外の宗旨の人よりも 金を欲しがらる辨はある

教を聴かぬ故なるか 教の足らぬ故なるか  
 教に力なき故か 耶蘇の教を二千年  
 足らずの間絶間なく 無数の寺で教へても  
 エメン／＼と云ひつゝも 信する事は口許り  
 金を欲がる而已ならず 人の國まで取りたがり  
 耶蘇鐵砲の筒先や 破裂丸にて攻めたてゝ  
 慈悲も情も泣く許り 罪なきものを慶し  
 亞米利加國や天竺や 其他の國を暴威以て  
 無理掠りなせし國々は 皆耶蘇教を誇る國  
 亞米利加人や天竺の 人は如何なる罪の爲め  
 斯る強慾非道なる 耶蘇宗門の國々に  
 幾萬年の昔とも 知れぬ時より住慣れし  
 國を掠らるゝ而已ならず 玉の緒迄を絶たるぞ  
 天竺人や赤人の 斯る愛目を見る譯は  
 天道知らぬ故なるか 信愛薄き故なるか

決して斯る故ならず 天竺人や赤人の  
 罪は全く外ならず 善き鐵砲や彈藥や  
 疾く行く船や兵隊や 是等をすぶる奸計の  
 遅く開けた哀さに 耶蘇宗人に及ばぬが  
 何より大の罪なるぞ 慈悲や情を説く者や  
 無慾を勧め敵迄も 愛せと諭す宗門を  
 奉ずる人の行ひは 斯る者にてある者か  
 早く引導渡すのが 耶蘇宗門の主意なるか  
 金を欲しがる癖あるは 特り俗人而已ならず  
 我宗特り真なりと 我宗特り善なりと  
 人に教ゆる僧徒も 慾に目なきは同じこと  
 耶蘇の宗旨を弘むるも 源を糾せば金の爲め  
 年給あてにする仕方 昔と違ひ一ト言の  
 教も今は金の種 左らずば誰か僧たらん  
 腕に覺えのある者や 智力に富める人徒は

外の事業を営めり 外の事業の出来兼る  
 人の宗旨は口すこし されば今日耶蘇教の  
 僧侶は人の層多し 今の僧侶は何故に  
 セントポールやサビターの 眞似はなさずにケルセイや  
 彼のベケットの眞似許り 教の足らぬ故なるか  
 教に力なき故か  
 唐天竺や日本へ 宗旨弘めに來る者は  
 今では丸で本國に 居ると異なる事なきも  
 野蠻人種の中に居て 憂き艱難に逢ふ如く  
 國の徒に書き送る 又日本や天竺や  
 唐や其他の國々で 善き改革のある時は  
 何でも蚊でも己等の 手柄の如く書き立る  
 宗旨の爲か身の爲か ホリライ(聖職)とはなるか  
 函根の山に堂を建て 説教するに云ふ時は  
 虎狼の中に居て 人食ふ人を相手にし

宗旨の爲に命迄 捨てて傳教する如く  
 本國にては思へども 葡萄酒付の洋食で  
 湯治がてらの遊山事 最と面白き趣向なり  
 斯る事とは露知らぬ 後世を願ふ老翁や老婆  
 臍くり金も宗教を 弘むる爲めと惜まずに  
 出す者こそ殊勝なれ 虚心の者は福ありの  
 又彼の宗の教には 云へる事杯ありとても  
 柔和の者は福ありと 口に唱へはするものゝ  
 抑も虚心だの柔和とは 事は誰しも知るならん  
 事實大に相違する 行をばし見る時は  
 彼の宗門の人たちの 押は益々強かれと  
 面の皮をば厚くせよ 他教の人は思ふなり  
 云へる教へのある事と 惡に敵すること勿れ  
 耶蘇又人に教へらく 汝の右の頬を若し  
 更に抵抗なす勿れ

打つ者あらば打せ置き 左の頬も打てと出せ  
 若し法廷に訟へて 汝の裏衣取り去らば  
 斯る者にはおしまずに 外服も共に興ふべし  
 抑も是れは盜に 追錢しろと云ふ教へ  
 斯る教をうかゝるに 信する馬鹿の有たらば  
 金は更なり命まで 耶蘇僧輩のしめものぞ  
 此手を食ふな昔より 此手を食ひし者もある  
 耶蘇教人は皆都て 我より一步譲りなば  
 二歩も三歩も譲らする 弱みをねらふ癖あるは  
 世間の人の知る處 耶蘇の教を道具とし  
 人を従順温和にし 都て勝手にする手段  
 インドの始末知る者や 亞米利加採れる顛末を  
 知りたる者は我言を 疑ふべきにあらぬなり  
 カラフト取ば蝦夷迄も 蝦夷を取つたら日本の  
 九州四國のはて迄も 取らねば心濟まざれば

宗旨の爲に金錢を 湯水の如く使ふのも 神を譽めたる説教を 聴きて一日を送りつゝ  
 味深き趣向あり 害する人のありとても エメン／＼と云ひ囃し 神に事ふる義務濟し  
 更に手向ひなきぬ様 右の頬打つ者あれば 又七日目に成る迄は 六日の間起るより  
 左の頬も出す様に 教へ込むのは是ぞ是れ 臥る迄金の事許り 唯の一日を六日に  
 耶蘇の教を道具とし 人を充分馬鹿になし 比ぶる時は不公平 なるはなれ共兩神に  
 都て勝手になす手段 一里汝を行かしむる 事ふることは是で出来 是に心の付かざりし  
 者若しあらば二里行けと 云ふのが耶蘇の教なり 耶蘇を笑へる今の人 斯る徒に出逢ふては  
 此手を食ふは馬鹿者ぞ 食はせる奴は利口なり 神もあきれてしまふらん  
 二人の主<sup>に</sup>事ふるは 誰も出来ざる事ぞかし 抑も耶蘇宗の人徒は 唐天竺や日本や  
 一つを惡めば他を愛し 一つを戀へば他は蔑視 トルコ其他の國々の 宗旨は都て偽物にて  
 せざるを得ざる事なれば 神と財に事へんと 耶蘇教特り真なりと 云ふて其又證據には  
 しても出来ざる事なりと 教へられたは耶蘇の時 豫言當りし事もあり 稀有の靈も夥多あり  
 今の時代に耶蘇教を 奉ずる者は斯く迂なる 其經文にある道は 神の語ばの事なれば  
 者にはあらで兩神に 事ふる術を善く知れり 他の宗教の經文に 載せざる所夥多あり  
 七日の中の一日を 神に捧げて寺に行き 是等のことは皆ともに 萬づ疑なきこと

己が迷と知らずして 人に誇るが面白し 耶蘇海面を歩み行き 遙の瀛に逆風の  
 されど豫言は漠然と したる語の者なれば 爲に揺られて漂へる 舟に至りしことありと  
 信者の都合善き様に どうでも解し得る者ぞ 是も譬と云はゞよし 左なくば僧の一演も  
 又耶蘇教の豫言者も 今の賣卜同様に 空に立ちたる事もあり 又源の頼信の  
 人を欺して金を取り 酔ふて管巻く知れ者や 爲に海水退去して 五萬の兵をつゝがなく  
 馬鹿やたわけも多ければ 斯る徒の戯言が 渡せる例もありしなり 又源の義家は  
 當りし事と思ふのは 馬鹿な我子の出鱈目も 早魃の時祈念して 飛泉岩より涌出し  
 先見深き善言と 無理こち付にこち付る 例も文に載せてあり (水上ヲ渡ル僧アリ前々太平記)  
 親の最負と同じこと 帶下<sup>オビ</sup>が止り塞立ち 彼は真で此は偽 と云ふ道理も別になし  
 又其稀有の靈惟は 俄にきける様になり 證據は本の外になし  
 盲目が目明き癡が口 杯云ふ類のことなれど 聖書に載せて又曰く 耶蘇に従ひ五千人  
 豊の耳が近くなる 是等の事は何國の 宗旨と云ふ書に載せて 荒地に出て夜に入れど 食料更に持たざれば  
 云ひ傳へぬは有ぬなり 釋迦や日蓮マホメット 其時人の持ち合す 五つのパンと其外に  
 何れも稀有の神徳を 表はされぬは有ぬなり 二尾の魚のありければ 耶蘇は之をば取上げて

天を仰ぎて謝した上 扱パンを學弟子をして  
 之を諸人に興へしむ 諸人食ひ飽き尙ほ餘り  
 屑を拾ひて集めしに 十二の篋にぞ盈にける  
 實にさる事の有たらば 實に不思議と云べけれ  
 若し今の代にさる事の 出來る人ばしありたらば  
 最も目出度事ならん 耶蘇の門徒の其中の  
 餓死する者の千萬を じこの目指の一疋か  
 目高二疋で食飽かす こそが出來鱈他の宗の  
 者も忽ち宗旨變へ する者多くあるならん  
 何故なれば今日は 斯る奇瑞は有ざるか  
 或る時鬼に附かれたる 子を携帶する者あれば  
 耶蘇は鬼をば斥めり 鬼は直ちにいで行きて  
 其子忽ち平癒せり 其時弟子は不審かりて  
 我儕はこれを逐出す こそこの出來ぬは何故と  
 來りて耶蘇に問ひたれば 耶蘇の彼等に云けるは

爾信なき故ぞかし 我爾曹に聞かすべし  
 芥種程の信あらば 若し此山に此の處  
 去りて彼處に移れよと 命共定つと行くならむ  
 又爾曹に何とて 出來ざる事は非ざらん  
 今の僧徒に露程の 奇瑞もなきは芥子の種  
 程の信だになき故か されど耶蘇教信仰し  
 我宗特り眞なりと 思ふ徒は何事も  
 善くこち付る癖あれば 蒸氣船やら電信機  
 スエズの堀やタイムスの 隧道指して之を見よ  
 耶蘇の云るは是なるぞ 是等の事の出來るのは  
 けしつふ程の信心が 耶蘇の門徒にある故と  
 得たり顔にて云ふ者の ある事なきにあらぬ共  
 少しく歴史を知る者は 是れは眞赤の虚言なる  
 事を知らぬはあらぬなり  
 抑耶蘇教は昔より 人の知識の妨げを

なす而已ならず學問の 人に優れて世に秀で  
 世に裨益ある發明を なす者あれば誰彼の  
 別を論せず皆共に すったもんだの名を付て  
 水責火責其而已か 惣身までを燒盡し  
 人の心を束縛し 世の學問の進むをば  
 害せしことは多けれど 助けしことは尠くて  
 思ふ存分意を得たら 今の天下の開明も  
 何時に至りて來らんか 知れざる程の事なれば  
 此開明を耶蘇宗の 結果杯とおこがまし  
 して耶蘇教の學問に 仇せる事は左の如し  
 昔し羅馬に耶蘇教の 未だ入らざる其時は  
 凡そ羅馬の領内は 宗旨も自由學問も  
 我が意に任せ各々に 思ひくの神さんを  
 おがむ者やら我が好な 學問學ぶ者あるも  
 更に咎むることもなく 人の心を徒らに

束縛なせしことなきも 其帝たりしコンスタン  
 タインの時に耶蘇教が 羅馬の教と成りしより  
 宗旨はおろか學問も 己が好かざる事ならば  
 慈悲も用捨も有ばこそ 無法不敵の振舞で  
 男女の區別なく 非業の死をぞ遂さする  
 うたてき世とぞ成りにける  
 されば其頃エジプトに セオンと云へる數學の  
 博士の女にてハイベシヤと云へる者の有けるが  
 世にも稀なる學者にて アリストートル、プントーの  
 道に明るき而已ならず アポロロニヤス其外の  
 幾何學の書に注釋を 下せる程のものなれば  
 其講談を聽かん爲め 日々につごへる門人の  
 車馬は門邊に市をなし 人の智識の發達を  
 最と懇に助けしも 料らず茲に起りたる  
 難儀と云ふは其土地の シリルと云へる高僧は

宗旨を以て人民を 迷はず事は得たれども  
 兎角上等紳士には ハイペシヤをば貴びて  
 實理を好み此宗に 従はざるを憤り  
 哀れ該女は學校へ 行かんを爲せし其路次で  
 多くの僧に襲はれて 衣服を剝がれ引摺られ  
 寺院に於てはかなくも ビータと云へる耶蘇宗の  
 人手に掛り果てたれば 死骸をさざみ目を抉り  
 骨より肉をかき取りて 上旬の果に火に投じ  
 唯一片の煙とぞ 科なき者をなしにける  
 トレミー王の起されし 理學は何も時を得ず  
 遂に此時亡びたり 昔稀なる圖書館も  
 是に散じて去せにけり 是よりアレキサンドリヤ  
 昔に變り今は早や 思想の自由絶えにけり  
 頃しも四百十四年 僧に諷らひ阿らぬ  
 者は安息せざりけり アセンストでも又同じ

理學は遂に禁せられ 其學校は閉ぢられぬ  
 して耶蘇教は何故に 斯くは理學を惡めると  
 其原因を尋ぬるに 抑も耶蘇人は信すらく  
 凡そ天下の學問は 天文學も地理學も  
 物理の學も他の學も 凡そありとある學は  
 都て聖書に載せてあり さなきは僧の心傳にぞ  
 備はり居れば是を是れ 解釋なすは僧許り  
 其説く道や學問と 違へるものは皆虚言と  
 知るも知らぬも諸共に 世に害あるにあらね共  
 己が宗旨や米櫃に 害あるものと認めれば  
 假令眞理を説く者も 宗旨の爲とくるしめる  
 最と恐しき仕掛なり  
 して其宗の學問は 如何なるものと尋ぬるに  
 此地は丸き球ならで 平たきもので其上の  
 天は空にはあらずして 九天井の如くにぞ

張り詰られし者にして 中に日月星辰は  
 運動なして人の爲 夜晝照すものなりと  
 地は又神の虚無よりぞ 作り給へるものにして  
 これに住へる動物や 又植物も皆共に  
 六日の内に出来し 極樂淨土は天の上  
 地獄は地の下闇の夜の 炎熱極まる所にて  
 抑地は都て萬物の 位置は真中何よりも  
 至極大切なるもので 其他の者は星辰とて  
 此地の爲の用許り  
 又人類の男性は 塵もて出来し者にして  
 最初は唯の一人にて 伴は更になかりしを  
 其後神は其肋骨 一本取りて之を以て  
 婦人を一人又作り 所はイウワラーチースの  
 河の岸なる樂園に 二人の者を置きたるが  
 最初は至極清淨で 最と大人なくありたるも

後はおうちやく癖が付 神の命にも逆ひて  
 禁せられたる果物を つまんでくひし其科に  
 彼樂園を追ひ出され 稼ぎて暮し上旬には  
 死なねばならぬ人となる 食して惡しき果物を  
 何故なれば彼の神は いちのきたなき人徒の  
 手届く處に置きたるか 抑も神は此處彼處  
 過去や未來の區別なく 何でも蚊でも知らざる  
 云ふ事あらぬ者なれば アダムやイブも造らる  
 其初より兩人が 必ずへびにだまされて  
 禁せし實をば食ふ事は 百も承知で居り乍ら  
 疾より承知なるべきに 後の事をば露知らぬ  
 人の如くにしらばくれ 食ふと知れたる果物を  
 食ふなど云ふは何の爲 不深切にも程がある  
 いけ一概に人間を 馬鹿にしたがよかるべし  
 我子は未だがんせなく 必ず食ふと知り乍ら

食ふなと云て子の前へ 毒まんちうを据置きて  
 止すに之を食はせ置き 食ひたる後に我命に  
 なせ逆けると打殺す 親は何とか云ふべきぞ  
 之を實ある親なりと 云ふべき日には我國の  
 極くいち悪きまゝ母は 皆實のある親ぞかし  
 又最初より食ふことを 百も承知で居り乍ら  
 食ふなど云ふは何の爲 其又子だの孫だのは  
 扱又アダマイブの子や 悪事増長なしければ  
 先祖の事にこりすして 神も之にはこうじ果て  
 萬事自在と云ひながら 起して人を皆殺し  
 忽ち茲に洪水を 人の心を改むる  
 萬事自在の神なれば 何故なれば此下策  
 ことも易く出来べきに 隣者が却て毒をもち  
 病氣を癒す術を知る 之を何とか云ふべきぞ  
 其病人を殺しなば

又殺すべきものなりと 固より知れる事なるに  
 此人間を作れるは 殺生好む神なるか  
 ちとじやうだんが過ぎるなり  
 して洪水に助かりし 者は誰にノアと其  
 息子三夫婦而已なりき シエムはアシャに止りて  
 茲に子孫をのこしけり ハムはアフリカジャツフェットは  
 ヨウロッパにぞ止りて 人の先祖となりける  
 昔の僧が此説を 説き初めたる其時は  
 亞米利加國の知れざりし 時なりければ此國の  
 先祖の用意なかりけり されば其後コロムブス  
 亞米利加國を見出せる 時に初めて聖經に  
 先祖の用意更になき 人種を見たる事なれば  
 神の作りしものならば 聖書に載せぬ事はなし  
 されど聖書に載せたるは シエムとジャツフェット、ハム而已ぞ  
 シテ見る時は此民は 惡魔の種に違ひなし

惡魔は神の敵なるぞ 惡魔の種は人の敵  
 殺せや殺せ憫れませ 其種の絶ゆる其迄は  
 殺して殺し殺しぬけ 杯と云はれて各國の  
 耶蘇人徒に殺されて 遂に今では絶えなんと  
 するに至りしふびんさよ  
 又耶蘇人は此地球 丸しと云へる其説を  
 嘲弄なして云へる様 此地の裏に草木は  
 ぶら下り居り人類は 足が却て頭より  
 高きに居れること杯を 信する如き馬鹿者も  
 如何して世にはある者か 又第一に地の裏に  
 人類あらう筈はなし あるものあらば經文に  
 載せて有べき譯なるに 載せぬは是ぞなき證據  
 地の丸からず其裏に 人なきことは審判の  
 時に臨みて其人は 空より降り給はらん  
 上帝仰がむとならぬ 此一事でも知れたりと

云へる説をば真とし 聖書に載する其外に  
 眞の事はなきものと 思ふ宗旨のことなれば  
 智力懶く發達し 學問日々に進む程  
 眞理窮むる其人を 害せし例し夥多あり  
 今を去る事四百年 フロイス國の人にして  
 コペルニカスと云ふ人は 天文學を研究し  
 羅馬に來り數學や 二説を深く研究し  
 地動の説と天動の 地動に相違なき事を  
 宗旨の人は何と云へ 書に著らばせば其説は  
 探知したれば其理由を 此書を出す其時は  
 宗旨の説と違ふ故 如何なる憂目見る事が  
 僧徒の爲に捕へられ 其出版を延ばせるは  
 知れざる故に恐怖して 死期に臨みて漸くに  
 三十餘り六の年 出版なせし其書物 案に違はず耶蘇宗の



爲に邪説と認められ 禁止こそは成にけれ  
 耶蘇宗門が此書をば 禁制せるも道理なり  
 真に此書に云ふ如く 此地は一ツの丸にして  
 動くは星や日にあらず 晝夜のあるは此地球  
 ごろ／＼／＼ところづつ、絶えず光れる太陽に  
 向ふ所は晝となり 裏なる分は夜となりて  
 天にかゝれる億萬の 星は此地の太陽の  
 如きものにて其々に 之を取り巻く地球あり  
 地球があれば其上に 吾輩如き良心の  
 備はる者もなしとせず 果してあらば誰の子ぞ  
 アダムの子にはあらぬなり アダムの子等は洪水で  
 皆殺されて残りしは シェムとジフネツト、ハム而已ぞ  
 此三人が星の世へ 行きたることは經文に  
 載せぬ所のことなれば 其人類の出所の  
 なきは第一不都合ぞ 又其人は此土地の

人の如くに悪性で 之を救はん救ひ主  
 無ればならぬ譯なるか コペルニカスの説にして  
 一度真とせられたら 千も二千も經文と  
 齟齬する事の有なれば 先々斯る新説は  
 虚言か真か知らね共 人の知らぬが宗教と  
 糊口の爲と僧徒等の 思へる事ぞうたてかる  
 其又次にガリレオと 云へる古今の英雄は  
 物理其の外數學の 奥意窮めし而已ならず  
 人に先立ち望遠鏡 自ら作り之を以て  
 廣き宇宙の日月や 星辰迄を點檢し  
 星なく見えし所にも 夥多の星を見出せり  
 又木星のまはりをはば 三四の星のめぐる様  
 杯を發見なしたれば 事實を愛す人徒は  
 悦び限りなかりしも 耶蘇僧徒の驚きは  
 一方ならぬことなりき 更に見えざる數萬の

星が實際あるなれば 星の在るのは人の目を  
 悦ばしむる爲なりと 云て濟むべき事ならず  
 地動説をば嫌ふ者 之を批難し云ひけるは  
 コペルニカスの説にして 果して眞の者ならば  
 此太陽のまはりをはば まはると云へる水星や  
 金星とても皆共に 月の如くに盈昃の  
 有べき理にて有なりと さてガリレオは金星に  
 最と判然と盈昃の あるを眼鏡で見出せり  
 斯る發明多ければ 天道説のくづれんは  
 言はでも知れた事なれば 僧侶社會の心配は  
 一方ならぬ事にして そもガリレオの云ふ事は  
 詐欺ならざるは一もなし 彼は欺騙者不信神  
 邪教を信じ天帝を 譏毀罵詈するものなりと  
 皆口々に云ひ囃し 糺問なして邪教をば  
 改むべきか左もなくば 禁獄せしむべき由を

申渡されガリレオは 眞理の途に榮ゆるは  
 夢疑はぬ者なれば 一時僧侶の意に任せ  
 地動説をば説かぬ旨 假に承諾なしにけり  
 此糺問のありてより 十六年の其の間  
 耶蘇宗門の僧徒は 枕を高く寝たりしも  
 頃は一千六百に 三十と二つ餘る年  
 書を著はしてガリレオは 地動の説を公に  
 なしたる故に僧徒等は 再び彼を糺問し  
 上句の果に永牢の 重き刑にぞ處したりし  
 手をバイブルの上に置き 膝を地につき地の動く  
 ことを今更信せぬと 誓はしめたる其上句  
 七八十の老人を 獄につないで苦めし  
 又其頃にジオダルノ プルノーと云へる人ありき  
 氏は伊太利の人にして 當時稀なる學者にて  
 眞理を戀ひ邪を惡み 見識殊に卓ければ

いかで僧侶を恐るべき 天文学や哲學の  
 多くの書をば著して 地動の説を主張なし  
 邪蘇の宗旨の不都合を 誰憚らず批評せり  
 斯る英雄豪傑を 僧徒はいかで捨て置む  
 遂にブルノイを捕縛なし 六年間も禁錮して  
 訪ふ朋友も會はしめず 書物を初め筆墨も  
 一つも興ふるとはなし 其後彼はベニスより  
 羅馬の獄に移されて 烈しき責を受けし後  
 罪ある者と認められ 破門を受けし其上で  
 變説せざる其科に 羅馬に於て焼かれけり  
 嗚呼非道なる耶蘇宗よ 嗚呼壯なるブルノイよ  
 闇夜の世界に唯一人 眞理を窮め世を照し  
 開化を助け人類の 迷を覺まし幸福を  
 増さんが爲に身命も 顧みること更になく  
 衆を相手に唯一人 道を守りし其科に

如何なる責に逢とても 更に屈する所なく  
 變説なきは取らるべき 命も助けらるべきに  
 假令命は助かるも 眞を虚言と云ふことは  
 斷然せざる所にて 己を責むる彼人に  
 いづれも共に心中は 我云ふ事の虚ならぬを  
 疾より承知なるべしと 云より外に他事もなく  
 怖るゝ所更になく 露だに曇り胸になく  
 眞理の爲に死に就けり  
 嗚呼壯なりブルノイよ 爾死すとも極樂の  
 望を持てるものならず 死したる後に昇天し  
 神にはめられ樂をなす 私利の心はなかりけり  
 宗旨の爲に死ぬ者は 艱難辛苦なき人の  
 天に昇りて極樂を 占むるが爲に要用の  
 道なる而已に非ずして 其輕重の度に依りて  
 後の位も高くして 扱今焼かれ死なん身の

後の望みで氣も夢中 耶蘇や天女が天降り  
 死なば手を取り昇天し 神の邊りに伴れ行かん  
 様もあり／＼日に見て 焼かれて死する時とても  
 苦痛は左程知らざらん 宗旨の爲に死する身は  
 死ぬも身の爲慾の爲 此世で死んであの世では  
 極樂往生したき爲 海老で鯛釣る慾心  
 死ぬが却つて立身の 階梯とこそ云ふべけれ  
 焼かれる時に僧徒等が 力み散じて死するごと  
 更にはむべき事ならず 斯る望のなきものが  
 眞理を愛す一徹の 心の爲に身を棄てよ  
 此世を去るぞ壯なる 如くに眞理研究する  
 斯くブルノイやガリレオの 眞理をいかで蔽ふべき  
 者を困辱なしけれど 人に存する其内は  
 眞理を戀ふる願念の 眞理を害す者あるも  
 假令へ身の爲慾の爲

眞理は遂に榮ゆらん さればブルノイガリレオは  
 困辱されて死せりとも 地動の説は日に増に  
 人の信するものとなり 僧徒の詐欺は多く共  
 信せぬ者ぞ増じにける 命令如何に嚴なるも  
 逆く者のみ多かりき  
 斯くては遂に耶蘇教の 衰微なさんは知れたれば  
 豫防の爲に恐るべき 二つの道を使用せり  
 則ち一つは耳に口 みてゝ爲なる懺悔なり  
 又他の者は兼てより 用ひ來りし糺問ぞ  
 ざんげは人の思想をば 束縛なさん而已ならず  
 人の家内の機密迄 精しく知らん爲にして  
 親子兄弟夫婦をば 互ひ／＼の間者とし  
 附け置く爲の手段にて 實に恐るべき仕掛なり  
 又糺問は拷問で 鐵器で指ねち足のわく  
 水責火責食責や 水も興へず眠らせず

爲さぬ事迄白狀を  
 數は參拾四萬人  
 數は參萬貳千人  
 立つべき者は世にあらず  
 眞理は如何で亡ぶべき  
 域は益々弘くなり  
 日に衰へる所たり  
 堅く信せしバイブルの  
 事實と違ふこと分り  
 初耶蘇教説く者の  
 六日間にて此世界  
 手足をのばし休暇せる  
 纒か四千か五千年  
 ありしは地球一面で  
 今に有する動物は

させて罰せし其人の  
 中で焼れし其人の  
 斯る非道の手段にて  
 如何に壓制蒙むるも  
 日増に進む開明の  
 僧侶社會の權力は  
 地理も窮理も追々に  
 捨ねばならぬ事となり  
 考にては上帝の  
 創造なして七日目に  
 時より耶蘇の生れ迄  
 足らずのことも洪水の  
 此洪水に生残り  
 ノアのアルクに救りし

者より外はあらざるぞ  
 七千年に足らざると  
 追々進む地質學  
 事實に依て徴すれば  
 出來るは千も萬年も  
 天地の年が七千に  
 七千年はさて置きて  
 幾百萬の年を経て  
 まして況んや其迄に  
 今の學者の考にも  
 初の程は此ことも  
 なき事なれば非となして  
 遂に争ふべからざる  
 己が宗旨の經文の  
 七日と云ふは尋常の

されば地球の年齢は  
 思ひし者も多けれど  
 之を研究なす者が  
 假令一つの地層でも  
 掛らにやならぬ譯なれば  
 足らぬ杯とは大の虚言  
 地層をなせる地許りも  
 出來し者だか知れぬ程  
 過ぎたる年の數とては  
 及ばぬ程のことなるぞ  
 耶蘇僧徒は經文に  
 必死と論じたりけるも  
 ことを悟りて今迄は  
 意を取り違へたる如く  
 日にはなくして其實は

日に喩へたる七時代  
 年を重ねるものなりと  
 やつと一難のがれしも  
 起るは最も氣の毒の  
 抑も耶蘇宗の經文が  
 動植物も星辰も  
 唯の一つも人間の  
 更に見えざる星辰や  
 又萬年も其の昔  
 植物杯が悉く  
 人の爲ぞと云はんとて  
 こち付け好きの僧徒は  
 斯く何も蚊も機に臨み  
 意を變へ行かば行末は  
 載せたる事は何なるか

一つの時代も數萬の  
 最も巧にこち付けて  
 外の難儀の日々に  
 至ところは云べけれ  
 云へる所に據る時は  
 凡そありとこある者は  
 爲ならざるはなけれ共  
 人の出來ざる千年も  
 榮えて死せる動物や  
 はるかの後を生じ來し  
 石炭杯の例を指し  
 甘くごまかす者あれど  
 變に應じて經文の  
 耶蘇宗門の經文に  
 更に分らぬ事ならん

行末最も思つかな  
 耶蘇の教は他の宗の  
 誇りはすれど其内で  
 人より我にせられんと  
 杯と云ふのが其内の  
 されど我にも劣らざる  
 人に施すなかれたの  
 教の道は惟特り  
 人を作りて道なくば  
 義務を盡せる者なるか  
 日本人はさて置きて  
 土人の如きものとても  
 聞けば萬更道知らぬ  
 レッドジャケットは赤人の  
 或る時彼が耶蘇教の

教にはるか優されりと  
 敵を愛せと云ふことと  
 欲するごとく人にせよ  
 最上なりと見ゆるなり  
 己れ欲せぬことをばし  
 敵に徳以て報いよと  
 耶蘇宗而已に有ぬなり  
 人を作りし其神は  
 天竺人や支那人や  
 野蠻極まる亞米利加の  
 レッドジャケットが云ふ所  
 者と云ふのは不當なり  
 殊に秀でし將にして  
 宣教師なるクラムプに

云へる語は左の如し  
 我が兄弟よ主は今 此處を去られん其前に  
 我が返答を聞き度しと 實に尤のことぞかし  
 主はほるく遠國に 來れる者のことなれば  
 余は徒に主の足 留むる事をば願はぬぞ  
 さは去り乍ら余は茲に 往事に少しさかのぼり  
 余が祖先より聞及ぶ こと余輩に白人の  
 語る所を聞かすべし 我が兄弟よ聞きねかし  
 主は知らずや其昔 此大陸を我が祖先  
 所有なしたる時はあり 處は廣く日の出より  
 日の入迄も亘りたり 大神之を赤人に  
 わかち給ひて水牛や 鹿や其他の動物を  
 食物として與へたり 其よそふべき衣服には  
 海狸うしなやら熊の皮 是等のものをかく廣き  
 國にあまたに獲る手段 人に教へはし給へり

玉蜀黍とうもろこしを地に生じ パンに作れど與へたり  
 斯るめぐみを大神に 受けたる譯は赤人を  
 愛せられたる故ならん 若し我が中に時として  
 狩場のことと争論の 起る事ごもありとて  
 血を見で事は治まりき ざるに其後ち悪日の  
 我等が上にめぐり來て 主等の祖先大洋を  
 渡りて此地に來りけり 其の數初多からず  
 此地の者は其人を 惠みはすれど仇なさず  
 其人徒の云へる様 そも本國を去りたるは  
 國に悪人多き故 遙々此處に來れるは  
 己等がまもる宗門を 信仰なさん爲なりと  
 依て少しの地を乞へり 此地の者もあはれみて  
 其後望をかなへたり 乃ち彼等此處に住み  
 我等は彼に與ふるに コーンと肉を以てせり  
 彼等は之に酬ゆるに 却て毒酒を以てせり

白人こゝに新國を 見出したれば其由を  
 國に歸りて告げしかば 益々來る者あるも  
 我等は之をなつかしみ 恐るゝ事はあらざりき  
 我等を呼びて彼徒は 兄弟なりと云ひければ  
 我等は眞に彼徒が 斯く思へりと心得て  
 廣き土地をば與へたり 遂に彼の輩殊の外  
 増せるが故に尙廣き 我が全國を望みたり  
 我目も茲に覺めたれば 胸の思は安からず  
 遂に戦争と相成りて 狡猾極まる我が敵は  
 同じ人種の赤人を 雇うて之を赤人と  
 戦はしめしことたえず また最辛き慘毒の  
 酒を此地に持參して 數千人を殺したり  
 我が兄弟よ其かみは 余輩の所有廣くして  
 主等の住所狭かりき され共今は事變り  
 主等は最も強盛の 民とは成りて自分等は

布圍一枚廣々と 布く地も持たぬ任義となり  
 既に主等は我が國を 奪ふと云へど尙それで  
 飽たりとせず無理押し 我宗旨をば變へんとす  
 我が兄弟よ聞きねかし 主等云はすや余輩の  
 遙々此處に來りしは 大神の意に叶ふ様  
 之を仰がん其仕方 人に知らする爲なりと  
 して若し余輩白人の 教ふる宗旨信せずば  
 未來に於てなやまんと 主は正しく余は邪なり  
 余輩は天に昇られず ならん主等は云はるれど  
 主等は之を如何にして 眞に然りと知らるゝや  
 主の宗旨は書に載れり 若し大神が此宗を  
 主等許の爲ならで 余輩の爲に圖りたる  
 ものなるならば何故に 之を余輩に與へざる  
 それ而已ならずいかなれば 此書を解す智と共に  
 此書のありと云ふ事を 我祖先には知らせぬぞ

余輩は特り主等より 聞く事而已を知れるなり  
 して主徒の云ふ事は 何を信じてよかるやら  
 余輩は既に白人に 欺かれしは幾度ぞ  
 我が兄弟よ主徒は 大神仰ぐ其道は  
 一つに歸すと云はるれど 若し宗門は唯一つに  
 歸する譯であるならば なせ白人の其中で  
 宗派に斯る異同ある 主等は共に此書をば  
 讀み得るなるに何故に 斯く折合の悪きぞや  
 我が兄弟よ我々は 是等の事は解せぬぞ  
 主の宗旨は天父より 主の祖先に賜はりて  
 親より子にと傳はれる 事と主には云はるれど  
 余等の宗旨も天父より 余等の祖先に賜りて  
 遂に余輩に傳はれり 余輩は右のならひにて  
 天の神をば仰ぐなり 夫れ我が教は天恩を  
 彼れ此れ共に難有く 思へと教へ聞かすなり

並に教へ云へるやう 互に愛し和すべしと  
 されば余輩は宗教の 事に就ては争はず  
 我が兄弟よ人類は 皆諸共に大神の  
 造りなしたる者なれど 其白人と赤人と  
 全く別に造られて 面の色より風俗も  
 一つも違はぬ者はなし 神は主等に藝術を  
 與へらるれど是等には 余輩の眼を明けられず  
 されど余輩の藝術は 善き事なるを知れるなり  
 夫れ他の事は皆都て 斯る違のあるからは  
 宗旨も余等の智慧丈の ものを余等には與へしと  
 推察しては不條理か 神は正しきものなるぞ  
 其子の爲に何事か 最も善きが知るならん  
 余輩は是に満足す 我が兄弟よ自分等は  
 主の宗旨を亡ぼさん ことも願はず主徒の  
 之を棄つるも願はねど 余輩は人の宗旨より

自分の宗旨信じたし 我が兄弟よ主徒の  
 此處に来れる其主意は 余輩の國や金銀を  
 取らん爲には非ずして われらの心開かんが  
 爲のみなりと云はるれど 我も屢主徒の  
 宗旨の會に臨みしが 金を集めし事を知る  
 して其金は何故に 集められしか知らね共  
 蓋し僧侶の爲ならん 余輩も主の宗教を  
 信せん時は余輩より 金を取らんと事ならん  
 主は此頃此地にて 耶蘇の教を白人に  
 説かれたりと聞きつるが 余の近隣の人なれば  
 余は此輩を能く知れり されば暫く相待て  
 其説教が彼の輩に 如何なる驗ありたるか  
 篤と見届け申すべし 若し此輩を改良し  
 正直になし赤人を 欺くことを止めしめば  
 其時こそは我々も 主の云はれしこと共を

又考ふることあらん 右は則ち我が答  
 云ふべき事は別になし お別れ申すことなれば  
 將に貴君の手を握り 別を告げんものにこそ  
 主等の歸路を大神は 護り給ひて安全に  
 主等の友に會はしめん ことを余輩は冀望なり  
 此言開きて宣教師 會釋もなしに席を立ち  
 神の宗旨と惡魔めの 業とに好みあらぬぞと  
 云ひて手を握る事さへも 辭める故に赤人は  
 皆打笑みて立去れり  
 又耶蘇宗の人徒が 聖人なりと尊崇する  
 其人物は如何様の ものぞと云ふに中々に  
 其品行の面白き 者も随分ある事ぞ  
 先づ第一に彼のノアは 洪水の時唯一人  
 神に残されたすかりし 世人に勝れ有徳の  
 人なりけりと申せ共 大酒飲の酔ひたくれ

見られて悪るき處迄 出して裸で寝る始末  
 我子が之を見たりとて 烈火の如く憤り  
 見ざる孫迄咀ふとは 慈愛の深き親にこそ  
 親が女郎買するのをば 子が見付けたと親怒り  
 孫を勘當するものは 釋迦や孔子の教では  
 世にも稀なる善人と 云ふか云はぬか白き月  
 腰は曲りて白髪の人 孫迄持てる老人の  
 此不身持は世の人の 手本とすべき者ならず  
 又豫言者のアブラムは 妻のセーラを妹の  
 積になして姦通を させんとせし事もあり  
 又或る時は其妻の へーガを遂て子と共に  
 人なき土地に彼處此處 彷徨はしめし事もあり  
 其忤なるアイサーク 親に似ぬ子は鬼つ子と  
 親に劣らぬ不品行 妻のレバカが美人故  
 其に戀られ其爲に 我を害せん者もある

ことを恐れて我が妻を 妻にはあらで妹と  
 云ふて他人に犯さする 氣でありたるをうなてかる  
 其愛子なるジェコップは 神に煩る愛されし  
 者とは云へど我が父の 眼の見えざるを得たりとし  
 心太くも欺きて 兄のイソアの積りにて  
 父に祝され且つは又 兄の所有を奪ふたり  
 加之ジェコップは 己が姪なるリー而已が  
 其妹のレチエルをも 色香に迷ひ妻にせり  
 又或時は奴婢共と 多く通せることもあり  
 又有名のモーセスは 殊に温和の評判の  
 高き人にてあり乍ら 或は人をだまし討ち  
 又はさりこを皆殺し 又は女子の生捕を  
 士卒に與へ其身をば 汚さしめたる事もあり  
 ジヨシユアもこれに劣らざる 無慈悲極めし人なりき  
 其又次のサミュエルは 人に僧侶の手本とも

云はれはすれど其敵を 殺す而已にて他足らず  
 其身體をすた／＼に 切斷なして樂めり  
 其執念の深きこと 敵に屬する者とは  
 女子小供はまだおろか 赤子も殺し其上に  
 驢馬や羊も皆殺す 人の手本と爲すべきは  
 斯る無慈悲の者なるか エリシヤ小兒嬉笑して  
 爾禿首と云ひければ 之を咀ふて其後に  
 牝熊來りて小さき子を 四十二人も食みければ  
 天父果して我が呪咀 受納在りしと喜べり  
 又ダビットは神の意に 叶ひし者の事なれば  
 人たる者の最上の 者であるべき等なるに  
 なんぞ計らん不義非道 或は人の妻と寝る  
 或は人を欺ける 或は最も殘忍の  
 仕方で人を殺したり 死期に臨めど惡念は  
 まだ失せやらす其口に 人を咀ふて死したりき

誰より智ある人なりと 人の崇ぶソロモンは  
 古今稀なる色狂 是等は都て舊約の  
 全書に載する者なれど 之れ而已ならず新約の  
 全書に載する者とても 之に劣らぬものはあり  
 抑もこれは耶蘇教の 大黒柱とも云へる  
 セントポールがコリントの 人に對して云へる様  
 他の教會より奪ひ 給料取りて爾曹の  
 爲に役はしたるどぞ 給料取りて爾曹の  
 取られたものは不幸 是が聖人たる道か  
 奪ふと云ふは何ごぞ 是が聖人たる道か  
 ガラテヤ人にポール又 贈れる書に云へるやう  
 我儕にもせよ天よりの 使者にもせよ若く我も  
 曾て爾曹に傳へたる 所に逆ふ福音を  
 爾曹に傳ふる者あらば 彼は咀はれしむべしと  
 兎角咀ふが好きな宗 斯かる教を聽く者は

互に咀ひ咀はれつ 宗旨喧嘩は絶えざらん  
 耶蘇の教の人徒が 互に殺し殺されつ  
 世を送るのも道理なり セントポールに劣らざる  
 彼のビートルが我が命 惜しきが故に其師なる  
 耶蘇を知らざる人なりと 云へるは言語道斷ぞ

又ビートルの殘酷は 刀を抜きて人の耳  
 切たる事で知られたり 又此人は何よりも  
 人を咀ふが大好きで 最も恐るべき人なりき  
 之に續けるジョンとても 異宗の人に慈悲なきは  
 前の二人と同じこと (未定稿)

# 迷ひ子

羨まじきはよその子なり  
 父に手を引かれて行けるあり  
 母に抱かれて眠るあり  
 我が友は家に歸へれり  
 面白きあそびを止めて  
 家には母が待てりと云ひて

かなしやな何故に  
 我には父も母もなき  
 父母なき者が世に又ありや  
 我れ笑へども喜ぶ者なし  
 我れ歎けども憂ふる人なし  
 父母とは如何なる者なるや

# 豊太閤

一

戦へば勝ち攻むれば取る  
 僅に數年天下を一統  
 布衣より起りて四海を治む  
 御門の宸襟始めて安全  
 國家の隆盛是より興る  
 類なき智慧類なき武勇  
 嗚呼人なるか嗚呼神なるか  
 嗚呼太閤豊太閤

二

萬里を隔つる外國なるも

三

傲慢無禮の振舞あらば  
 靡ちて懲らして降參せしむ  
 何より重きは國家の名譽  
 振ひに振ひし日本の國威  
 輝き揚りし皇國の國旗  
 嗚呼人なるか嗚呼神なるか  
 嗚呼太閤豊太閤

太閤出づれば日本は狭し  
 世界に示せる無類の功トキトキ  
 萬里の果まで聞ゆる譽れ

皇國の名譽彼ゆる高し

日本男兒の誠の鑑

日本魂斯くてぞあれよ

嗚呼人なるか嗚呼神なるか  
 嗚呼太閤豊太閤



# 富士山

一

皇御國の武士の  
心を映す山と知れ  
高根に積る白雪は  
清き心の鑑なり  
天に聳ゆる山の峰  
仰げば心も彌高し  
仰げや仰げ富士山は  
大和心の守なり

二

朝夕あしたゆうすに眺むれど  
絶えて厭かぬは富士の山

三

朝日に照らす其高根  
視れば忘るゝ世の汚れ  
月影清き雪の峰  
心のくまも晴るゝなり  
仰げや仰げ富士山は  
大和心の守なり

異國の旅の夢にさへ  
父母と慕ひし富士の山  
海原渡り歸朝者かきあそびの  
始めて見るや富士の峰  
喜び躍り手を打ちて

アレアレ富士と叫ぶなり  
仰げや仰げ富士山は

大和心の守なり

## 新體詩

實に光陰は箭の如し、想へば早や、殆ど十五年の昔なり、矢田部、井上の二氏と共に、我れ新體詩抄を著しは、

世の人は兎角新奇に愕くが恒なり、未だ見慣れぬ體裁の詩とて、詩にも非らず、歌にも非らずと難せぬは稀なりき、中にも國學者流の如きは、雅俗和漢打雜せての用語、是れはと呆るゝ計りなりけり、斯る者をば詩杯とは、言語に絶えたることとせり、去り乍ら、此の時よりして、我こそは眞の新體詩とも云ひ得べき者を、作り出さめこの望念を起し、人々も出來しなり、新聞紙に雜誌に、技倆を試みむとする者を往々見受くるに至れり、中には國學の心得ある者もあり、餅屋は餅屋、其の用語は流石に風雅を極はめ、修辭自から平穩にして句調のよきものから、同臭味の人の爲めには、新體詩も大いに改良したり、杯と持囃さるゝも、尠からず、去り乍ら、此者流の作は、新體詩と云はむよりは、寧ろ俊基朝臣東下りの亞流と云はむ方適當ならめ、眞に改良新體詩とも云ひ得べき者は、未だ幾許もあらざるならむ、其れも其筈、作者の數の多からざりしは、是れ世に需要のなかりしが故なりしが、斯る方便を以て、思想感情を發

表するの必要を感せし人の、尠なりしが故なりしか、然るに、昨年より今年に掛けて、新體詩及び其の一族なる軍歌の作者は、頗に其の數を増加したり、日清戰爭の爲めに大いに需要起りしが故なり、殊に軍歌に於て然りとす。

抑も本邦に於ける今の軍歌の嚆矢は、十四年前に余の作りし、拔刀隊の歌にして、又本邦に於ける第二の軍歌は、其の後久しからずして、是も余の作りし、來れや來れの歌なりしなり、當時は勿論、其の後と雖も物識り顔の人々は押しなべて、軍歌杯とは本邦には用無き者と思ひしが如し、然るに、十四年の後なる今日に至り、天下一般に軍歌の必要を認むるの時節は到來せり、實に文部大臣は、學校生徒に軍歌を課すべき事を訓令せられたり、世の中の事は實に面白きものにぞある。

今日世に行はるゝ新體詩には、主として二様あるが如し、一は、峯の嵐か松風か流若しくは俊基朝臣東下りの類にして、一は新體詩抄に習へるものなり、二者の果して世人の嗜好に合ふ故か、但しは作者に智慧の無き故か、兎に角、更に一層新體なる者を見るは至て稀なり、然れども、此二者を以ては未だ満足すべきにあらざるなり、茲に於て、明治十年代に新體詩を創始する者は、明治二十年代に亦新體詩を創始するの特權ある者と自認し、數年前より又一種の新體詩を試作することを勉めたり、本

書に載する所は即ち斯の如きものなり。而して是等新體詩に關して特に辯じ置くべき事あり。體形の新奇なるが爲めに、詩にも非らず歌にも非らずと爲す輩世に尠なからざるが如し。如何様普通の考を以て見れば、或は然らむ。然れども是れ少しも余の意に介する所に非らず。余は只々余の目的を達せむと欲する者なり。余が斯の如き新體を用ふるは他の故あるにあらず。余の思想、余の感情を、感情的に語らむ爲めの方便と爲すものなり。七五若しく五七の調は、抵抗力少なく平穩に輕々と舌の動く爲めに便利なるも、種々變化ある思想及び情緒は、到底斯る一定窮屈なる體形を以て常に適當に云ひ表はし得べきに非らず。却て種々變化ある體形を使用するこそ適當なるべけれ。人はいさ知らず、少なくとも余は、七五或は五七の調を變化なく使用するを以て、感情的口演の方便に合ひたるものと爲さず。余の新體詩に彼此批評を加へむとする者は、余の如何に之を口演するかを先づ預め知るを要す。「畫題」忘れがたみ「吊詞」可兒大尉「我は喇叭手なり」等は既に口演せしことある者なり。其の折々に、清聴を賜はりし人々の眞面目なる批評を蒙らんことは、余の切に願ふ所なり。最も價值ある批評と思へばなり。明治十五年に於ては、軍歌は特り余の作りし所なりしなり。然るに、明治二十八年に

於ては、軍歌は貴賤之を作り、萬民其の必要を認むるに至りしなり。

洋風畫術の本邦に行はるとは數十年の昔よりの事なり。然れども、其の畫工の採用する畫題は數年前までは職として、景色建築若くは法外なる想像等に止まりしなり。是に於て、余は明治二十三年に將來大いに採擇すべきは人事的畫題なることを唱へたり。而して、今日は大いに、此種の畫題を採擇するの傾向あるに至りしなり。

近年余の作れる朗讀體若しくは口演體新體詩を以て、詩にも非らず歌にも非らず杯として排斥せむとする族、世に尠なからざるが如し。然れども、余が創始せる此の新詩形たる、將來大に行はるべき者なることは、余の爰に預言する所なり。

(新體詩歌集序)

## 畫題

(明治二十三年四月作)

某年某日。頃は秋の末つ方。時は黄昏。所は大森のステイション。汽車の来るを待つ折柄。二人の客を乗せたる車。息せき切つて挽き来る車夫。ステイションに着きたり。客は下りたり。車夫は賃金を請取らむとして手を出せり。時に心臓の破裂せるにや。金を請取らむとして手を伸じたる儘。楯棒の上に控り倒れて絶命したり。二人の客は、外国人なり。賃金をへ拂へば用はなし。車夫の死したるは。素より與かる所に非らざるなり。跡をも見ずして。早足に立去れり。ステイションに居合したる。他の車夫どもは。驚きて死人の周圍に集りたり。時に獨の老人。ホト／＼として歩み來れり。群集車夫どもは。老人の來るを見て。互に面を見合し。低語乍ら道をあけたり。老人は死人を見て。只茫然たる計りなり。是れなん。杖ども柱ども憑みたる子に。突然死なれたる親なり。諸君。今茲に見る者は如何なるものなるや。親を嘔まむが爲めに。務めを爲して命を捨てたる男子は。死して其處に横たはれり。命を捨て取り得たる賃金は。頭の邊に散亂してあり。無情なる乗客の後ろ影は。尙ほ遠くに見ゆるなり。天下にも替へ難き

一人の子に。透かに別れて途方に暮れたる老人あり。鬼ならぬ車夫どもの。死人の孝行を褒め。老人の不幸を憐みて。低語者亦其所あり。諸君。此れは是れ。深淵なる思想を表出し得るの畫題にあらざるか。余輩は畫人には非らざるなり。此問ひに答ふるに能はざる者なり。諸君は畫人なり。宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

頃は明治の初なり。時は冬の最中なり。某月某夜。所は兩國橋の上。氷渡る冬の月は哀れなり。月の光に照らさるゝ下なる水は。物凄し。時は丑滿。往來の人も途絶えたり。聞ゆるは只幽かなる按摩の笛の音と流るゝ水の音。欄干に寄り絶り。身を伸ばす者あり。身投なるか。身投なり。然れども。我が身を投げむとする者には非ざるなり。まだ。頭是も無き乳呑み子を。水中に投げむとするの男あり。狂氣の如く必死となりて。男の袖に絶り付き。上なる子をば投げさせじと。争ふ一個の童子あり。上には哀れなる月の眺むるあり。下には無情なる水の靜かに待つものあり。争ふは三人の親子なり。貧に迫まり。途方に暮て。今や吾兒を水中に投げむとするの鬼親あり。足らぬ力も願みず。我が弟を助けむと必死に争ふ童兒あり。親は惡魔なり。子は天使なり。惡魔が勝てるか。天使が勝てるか。稚子の命は助かりしか。余は之を知らざるなり。諸君。此れは是れ。深淵なる思想を表出するを得べき畫題にはあらざるか。余輩は畫人には非らざ

るなり。此問ひに答ふること能はざる者なり。諸君は畫人なり。宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

年は何年なるを問はず。日は幾日なるを論せず。朝八時頃。某區某町に見るべき者あり。近在より。荷車に荷を載せて市中に挽き來る男あり。後より車を押す若き女あり。脊には紐を以て負へる乳呑兒あり。あら無情なり。此の男。あら痛はしや。此の女。女子の身に車を押し。搗て加へて稚兒を負へり。日本は野蠻國なり。日本の男子惡むべきなり。年は何年なるを論せず。日は幾日なるを問はず。夕陽西に傾かむとするの頃。某區某町の町盡頭に見るべき者あり。快よげに。一輛の空車を挽き往くの男あり。否。空車には非らざるなり。車中には乳呑兒の口に乳房を含ませ。餘念なく子を愛するの婦人を載せたり。實に言ふに言はれざるの趣あり。朝に在つては地獄の觀を呈したるもの。夕に在つては極樂の觀を呈するものなり。大和男子無情なり。とは何者の詭言なるぞ。粗服を身に纏ひ。妻子を車に載せて挽き往く。此の男子は。身に美服を纏ひ。夫妻同伴。雙々兩々。馬車に乗り。軸をきしらして往く。王公貴人に耻るものなるや。如何なる貴人の快樂と雖も。汗を流して今日の務を畢り。妻子を載せたる車を挽きて。今や我家へ歸らむとする。此の男子の快樂に。勝るものは決してあらざるな

らむ。日本の風俗は野蠻なるか。予輩は野蠻の風俗を萬國に示さむことを願ふ者なり。此の觀物こそは。日本社會生活の困難を示すものなり。此の觀物こそは。日本女子の辛苦を示すものなり。此の觀物こそは。日本男子の性質を示すものなり。此の觀物こそは。日本帝國の宇内に存在する所以を示すものなり。此の觀物は。余輩一人の見ることを得るものには非らざるなり。何人も見ることを得べきものなり。和風の畫人にも。洋風の畫人にも。此の奇觀を畫きたる者の無きは。余輩の了解に苦しむ所なり。諸君。此れは是れ。採つて以て畫題とするの價値なきものなるか。優美高尚なる思想を表出し得べきの畫題にはあらざるか。余輩は畫人には非らざるなり。余輩は此の問ひに答ふること能はざる者なり。諸君は畫人なり。宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

# 郭公

(明治二十四年六月作)

勇ましや郭公  
小さなる身體にて  
限りなき大ほ空を  
獨り自由に翔り行く

下の世界を省みず  
雲居の内に翔り行く

勇ましや郭公  
かよわなる翼にて

勇ましや郭公  
葦より細きのぞなるに  
テッペン迄となく聲は  
幾百萬の人も聞く

勇ましや雲居の内になく鳥は

身は死しぬとも名こそ残らめ

# 忘れがたみ

(明治二十四年七月作)

風の音さへ聞えず。  
いと静かなる冬の夜の。  
星月夜なるは何となく。  
哀れなる心地せられけり。

賤の身は手足を伸して。  
はや熟睡せるも尠なからず。

夜の更け行くまゝに。  
ゆき通ふ人も次第に途絶え。  
庭に鳴く露の命の蟲の音は。  
絶えくゞにこそ聞えけれ。

明日の窻の細き烟は。  
立や立たずと行燈の。  
暗き影にて繰返しく。  
僅かなる賣溜めの。  
錢を算ふる夫婦の者あり

丑三には尙ほ程あれども。  
晝のかせぎに疲勞たる。  
忘れがたみ

乳呑子に乳房をはませ。  
脊を叩きて寐かしつゝ  
子の行末を案じ煩らひ

夜の更け行くもしらざる親あり。

神に願かけ佛に祈り。

薬よ灸よと手に手を盡し。

我れは死すとも最愛の。

子の命をば助けんと。

心を碎きし甲斐もなく。

命數已に盡きしにや。

玉の緒の絶えて果敢なく。

消え失せし子のなきがらに。

抱き付きて今は早や。

此世に生くる甲斐もなしと。

よと泣き入る母親あり。

百年の後までも。

老いたる親に孝行盡し。

海より深き大恩に。

行末ながく報いんと。

誓ひしことも水の泡にて

まだ萬分の一だにも。

盡さぬうちに親は早や。

歸らぬ旅に門出したれば。

夢かど計り思へども。

偕あるべきにあらざれば。

泣く／＼ゆくわんを爲し終り。

戀しき親のなきがらを。

今や柩に歛めんと。

氣を勵ませど若者は。

せきくる涙せきあえず。

只茫然として涙みたり。

蝶よ花よと掌の中の。

玉の如くに育てたる。

獨り娘の明日は目出度き婚姻にて。

其喜びと支度のために。

家内は上を下への騒ぎ。

父母は疾くけふの夜の過ぎ去りて。

明日の來たるを待ち兼ねるに。

恍惚子氣の羞かしさにて。

何事をなせども更に手に付かず。

寐ても寐られぬ娘あり。

明日は主君の面前にて。

佞人原の悪事をあばき。

事宜によりては差違へ。

忘れがたみ

我れも共々相果てんと。

忠義の覺悟は金鐵にて。

只一心に君の爲めに。

思ふてねたばを合する武士あり。

實に人は果敢なきものなり。

今日の夜はまだ過ぎ去らざるに。

ひたすらに明日明後日の事にのみ。

兎角心を移しがちにて。

如何なる天の災が。

すぐ眼前に迫ればとて。

一寸先はやみの譬へ。

明日ともいはず今宵のうちに。

深き淵漸に陥る身とは。

露しらすして百年の。

計をなすこそ哀れなれ。

風なく雨なく、いと静かなりし冬の夜は、  
忽ちにして、奈落の底を見るに至れり。

泣く者も笑ふ者も、

喜ぶ者も怒れる者も、

舞ふ者も唄ふものも、

楽しむ者も悲しむ者も、

均しく一度に聞きたるは、

地底に聞えし大山の、

崩るゝ計りの響きなりけり。

すさまじき勢にて、

大地は下より突き上げられ、

地上はさながら激浪の、  
打つが如くに震ひ動けり。

安政二年十月二日、

時刻は夜の亥の刻かよ、

地裂け、天落るかど驚かれたり。

見る／＼百萬の人家、

倉庫神社佛閣、

倒るゝあり崩るゝあり。

家にしかれ瓦に打たれて、

死せるは幾許なるやを知らず。

一時に落ち来る千萬の瓦、

一時に崩るゝ百萬の家の響は、

泣き叫ぶ老若男女の聲に和して、

響ふるにもものあらざりけり。

暫らくして、地の震ひ稍をさまり、

崩るゝ家の響薄らぐに随ひ、

あどに残りて聞えしは、

親を呼ぶ子の聲なり、

子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも遠くにも、

殊に哀れに聞えしは、

次第々々に細くなる。

助けてくれ助けてくれの聲なりけり。

理りなる哉。

忘れがたみ

梁に壓さるゝ者あり、

柱に挟まるゝ者あり。

土に埋まるゝ者あり。

壁にしかるゝ者ありて、

さなきだに、苦しむ者は多かりしに。

地の震ひ動くこと、

未だ息むか止まざるに、

四方の天は一面に、

次第々々に明かるくなりて、

さながら晝の如くになりしは、

所々方々の潰れ家より、

火は炎々ど燃え出し、

燄が天を焦がしとなり。

家に潰されて身は動かす。



悶え苦しむ其所に。  
燃え來る火の爲めに。  
烟に咽び熱さに耐へかね。  
近れんとしてあせれども。  
のがるゝことは叶はねば。  
聲を限りに叫べども。  
助けに來たる人はなく。  
無間の地獄阿鼻の熱。  
無慘といふも餘りありけり。  
此夜僅かの時の間に。  
死したる人の其數は。  
幾萬なるかをしらざるが。  
中にはいとも哀れなる。  
死にざまの者も多かりけり。

運強くして不思議にも。  
其身は萬死を遁れしも。  
親兄弟の無慘の死を。  
漫ろに悲しむ者もありけり  
枕を並べて臥し居たる。  
夫婦にてありながら。  
夫は梁に壓し潰ぶされしも。  
妻は牘の抜けたる爲めに。  
下に陥り不思議にも。  
命を助かりたるもあり。  
梁にしかれし吾妻を。  
助け出さんとあせれども。

力及ばざる其内に。  
あたりは一面火になりて。  
看す／＼妻の燔死のを。  
殘して去れる夫もあり。  
妻子は如何なしつるを。  
崩れ家を、取除け見ればこは如何に。  
妻は穴藏に半ば埋まり。  
片手には稚子の足を掴み。  
恨めし氣なる顔つきにて。  
色青ざめて死せるもありたり。  
左れば此夜の不運の者には。  
或は祝ひの席に於て。  
或は悲しみの最中に。  
忘れがたみ

寐耳に水に死せるなど。  
語るも哀れなる者ありしが。  
是等は人の身の上なり。  
我れにも此夜の話しあり。  
父は此夜は宿直の番にて。  
家を守り三人の。  
子を護りしは母なりけるが。  
上なる子二人は。  
母の左右に寐ね。  
末なるは乳母に抱れて。  
枕邊に臥し居たりき。  
有るまじき事なれども。  
すは地震よといふとひとごとく。

乳母は抱きし子を捨てり。  
我れのみ外へと逃げ出たり。  
母は啼く子を抱きあげ。  
右と左に寐たる子を。  
ゆり起さんごあせりしかども。  
稚子をかへし身にて。  
大浪にゆらるゝ如く動きつゝ。  
片手で起す左右の子は。  
冬の夜の寐入りばなにて。  
起せどもく。  
いつかなく起くればこそ。  
幻にて母に連れられ。  
外へ出でたる其時は。  
地のゆるゝのもやみしあとにて。

四方の天は火事の爲めに。  
既に眞赤になり居りたり。  
實に危ふかりしは。  
我々親子の命なりけり。  
抑も安政の地震には。  
水地なる舊家の。  
潰れぬものは稀なりしが。  
我等が住ひしふる家も。  
潰れぬ計りに傾きたりけり。  
今に於て想ひ起すも。  
身の毛のよだつは此夜のことなり。  
此地震にて我等が家の。  
もしや潰れもしたらんには。

我が兄弟は死したりとも。  
誰をも恨むべきならねど。  
もし母が死したらんには。  
我等が罪にてありたるならん。  
左りながら此夜もし。  
我等親子が死したるならば。  
何故母が死せしかは。  
世に知る人はなかりしならん。  
生くべかりしを子の爲めに。  
死せしなりとは誰か知るべき。  
今も尙ほ忘れざるは。  
久しき昔の此夜のことなり。  
實に有難きものは母の愛なり。  
忘れがたみ

母は其身の危ふきをも。  
顧みずして一心に。  
子を助けんと爲まじものなり。  
實に深きは親の恩なり。  
我れに今日あるは。  
かゝる愛を以て育て呉れたる。  
母ありたるが爲めなり。  
我れは自らしらざれども。  
我が母が此夜の如くに。  
其身の命の危ふきをも。  
顧みずして我々の。  
身をは護りてくれたるは。  
幾度なりしかかれざるならん。

此夜のことは亡き母の。  
我れには忘れがたみなり。  
此夜我々親子より。  
運拙くして死せる者には。  
助かるべきを子の故に。  
死したる母は幾許なるらむ。  
此夜のことば亡き母の。

我れには忘れがたみなり。  
此夜の如き天災の。  
もし今日の夜に起らんには。  
助かる命を子の爲めに。  
棄てんとするの母親は。  
幾許なるかじれざるならん。  
實に深きは親の思なり。  
忘れ難きは母の愛なり。

## 佐久間玄蕃

(明治二十四年八月作)

忠臣は二君に事へず、貞女は兩夫にまみえず。友の敵は又我が敵。我を知り頼みし人  
亡びたり。今は早や何をか願はむ。大國を宛て行ふと云はるも、動かざるは信義の  
爲め。佐久間玄蕃は斯くぞある。

人は何故に自殺をする。或は悲に堪へずして。或は恐るゝ所の爲めに。自害を爲すは  
婦女子のことなり。世の爲め人の爲めには格別。呵責の難を怖れての、自殺は武士の  
慚る所。佐久間玄蕃の心なり。

武運つたなくして敗を取り。敵の俘となりし者。首を刎ねられ死するのは。誰しも知  
れる理の當然。何を恐れて人目を避けむ。上下を着て繩に掛り。都の中をば引廻はさ  
れむ。佐久間玄蕃の願なり。

花の都を車に乗り引廻はさるゝは千萬の。人に觀られむ爲めと知れ。見る者の眼を愕かし。乳母に抱かるゝ稚兒も。永く語れや我が事を。はてな衣裳を着かざりて。佐久間玄蕃の所望なり。

鬼神の恐るゝ勇あるも。敵對ふ者は斯くなり。我に繩掛けて引廻はし。普く天下に威光を示さば。誰ありて之を見乍ら。怖れぬ者は世にあるまじ。誰か天下を争はむ。佐久間玄蕃の寸志なり。

憐を乞うて何にかせむ。自ら切腹したれば。さて何んぞ名譽になるべきぞ。一言半句も未練は云はじ。敵の思ふ存分に。法に任せて我を切れ。繩打掛けて首をば刎ねよ。佐久間玄蕃は男なり。

## 迷へる母

(明治二十五年五月作)

背負ひたりし子は何地行きけむ。  
抱きたりし子は如何なりつる。  
待てども待てども歸り來らず。  
呼べども呼べども答を爲さず。

他處の母は子を背負へり。  
他處の母は子を抱けり。  
我にも背負ひたる子はありしに。  
我にも抱きたる子はありしに。

駈來るは我子なるか。  
近づけば、我子にあらず。  
迷へる母

遊ぶ子は我子なるか。  
よく視れば我子にあらず。

笑ふ子は我子なるか。  
哭く聲は我子の聲か。  
迷へる母のあだの夢なり。  
我子は早や哭きもせず笑ひもせず。

子に別れたる母親の。  
冬の夜に獨り憫々。  
物を思へばともしびの。  
光もくらく哀れなり。

何やらむうつゝ心に。  
抱き寄すれど物はなし。

悲嘆に沈む寝顔に涙。  
如何なる夢をか見しならむ

## 弔詞

(明治二十七年八月二十二日作)

諸行の無常なるは人皆之を知る。死生命在るは又之を知らざる者なし。  
然れども。有爲多望の士の不幸短命にして死するを見れば。何人も之を悲まざる能はず。其の人の爲めに哀むなり。親戚朋友の爲めに哀むなり。國家の爲めに哀むなり。  
今や文學士日高眞實君の遠逝に當て。殊に哀惜に堪へざるものあり。  
篤實は人に最も缺くべからざる性質なり。然れども。之を具ふるの人未だ世に多きに非らず。

勉強は事を成就するに最も必要なる條件なり。然れども。勉強家は決して世に多なるに非らず。

學才は學者の最も多く有するを欲する所なり。然れども。其の乏しきを憂ふる者實に少なしとせず。

日高君の如きは。其性質極めて篤實にして。且つ頗る學才ありて。而かも勉強心に富まれたる者なりき。

君の學生として大學に在るや。品行方正學力優秀を以て常に稱せられたり。

君の特性にして就中賞讃すべかりしは。世人動もすれば奢侈に流れ易き今日に於て。常に極めて質素を旨とし。官祿位階あるの日に至ても。昔日學生生徒たりし時と。少しも異なることなかりしの一事なり。

然れども。君の遠逝に際して。大學及び國家の爲めに更に愁ふべき者あり。

本邦教育の事業たる。稍々完全に赴きたりと雖も。改良を加ふべきの點尙ほ決して少なからず。蓋し。教育學の未だ充分に研究せられざるが爲めなり。

教育學者を以て自ら任ずる者。輒近本邦に少なからず。然れども。深く哲學を修め。其基礎に依て教育學の實踐考究を謀りたるは。實に君を以て嚆矢とす。

君の海外に於て。深く教育學を修めて歸朝せらるゝに當てや。大學は實に良教師を得。教育界は無比の研究家を得たり。

是に於て。本邦の教育學は將に大に勃興せんことしたり。

然るに。此の多望ある學士は。忽地にして遠逝せられたり。

左なきだに哀を催す秋の時に。良夫を失へる妻あり。孝子を失へる親あり。良友を失へる友あり。良師を失へる學生あり。國家は良公民を失ひたり。大學は良教授を失ひたり。教育界は熱心なる研究家を失ひたり。實に悲の至に勝えざるなり。

## 往け往け日本男兒

一

往け往け日本男子

千歳の一遇ぞ

開闢の昔より

鍛へたる我の腕

試すは今の時

失ふな此機會

神の敵人の敵

うち殺せこの腕で

起て丈夫往け丈夫

往け往け天下に周く

武勇をしめせ

二

知らざる歟我敵は

大惡の人非人

大國とこれ誇り

小國をこれ侵す

野蠻をばこれ極め

非道をばこれ盡す

不義の賊詐僞の賊

亡ぼせやほろぼせや

起て丈夫往けますらを

往け往け天下に周く

往け往け日本男兒

武勇をしめせ

三

悪むべし我敵の  
辜なきを虐殺し  
汝には母なき歟  
泣く姉妹なく子あり  
起て丈夫往けますらを

悪虐は比類なし  
婦女子をば辱かしむ  
汝には妻なき歟  
其聲を聞かざる歟  
往け往け天下に周く

武勇をしめせ

四

敵軍の兵卒は  
彼は我母の敵  
我姉妹女子の敵  
敵軍の畜生に  
起て丈夫往け丈夫

強盜か豺狼か  
彼は我妻の敵  
神國の清き血を  
穢さすることなかれ  
往け往け天下に周く

武勇をしめせ

五

うちころせ大砲で  
衝き崩せ剣をもて  
東洋の文明を  
撃てく突けく  
起て丈夫往け丈夫

文明の大敵を  
蠻族の巢窟を  
進むるは我が力  
君の爲め國の爲め  
往け往け天下に周く

武勇をしめせ

# 我が海軍

一

朝日に輝く日の丸の旗  
千島の果より沖繩迄も  
一度も今迄汚されざりし  
敵の軍艦幾百あるも

二

亞細亞に又なき此島國に  
幼き時より海には慣れて  
我をば攻めんとする者あらば  
敵の軍艦幾百あるも

三

風吹き浪立つ嵐の時も  
命を惜まぬ日本男兒

閃く皇國の軍艦共よ  
開關この方異國の敵に  
貴き海岸守れや守れ  
千尋の底へと沈めてしまへ

天の悪で生れし者は  
暴風も恐れず波にも怖ぢず  
武勇を比べん怒濤の中に  
千尋の底へと沈めて見せむ

妻子の爲には沖へと出でよ  
何ぞや恐れん敵の軍艦

浪をば枕に死ぬるも覺悟

敵の軍艦幾百あるも

四

弱き船にて大海渡り  
鬼神なりと呼ばれし者は  
彼より受けたる武勇を以て  
敵の軍艦幾百あるも

五

水雷大砲甲鐵艦を  
皇國に仇なす敵のあらば  
一々汝の力で懲らし  
敵の軍艦幾百あるも

君あり國あり又墳墓あり

千尋の底へと沈めて見せむ

異國の海岸荒して廻はり  
大膽不敵の汝の祖先  
天晴守れや我が神國を  
千尋の底へと沈めて見せむ

自由に扱ふ非凡の手練  
萬里を隔つる國なりとても  
國旗の威嚴を天下に示せ  
千尋の底へと沈めてしまへ



## 旅順の英雄可兒大尉

(明治二十八年一月作)

開闢以來未だ曾て今日の如く國光の輝けるはなし。  
開闢以來未だ曾て今日の如く我邦人の名譽の高大なるはなし。良運なり幸福なり  
此の時期に遭遇せるの日本人は、  
然れども殊に良運幸福なるは海陸の軍人なり。  
古來幾多の戦争に於けるが如く。彼等は同胞人と戦ふ者には非らざるなり。  
四百餘州と誇る。世界無雙の大國こそ彼等の敵なれ。  
而して國光斯の如く輝き。邦人の名譽斯の如く揚がれるは。抑も何者の力に由るか  
我に三十倍の國土を有し。我に十倍するの人口ある敵と戦て。連戦連勝。陸に海に。常  
に勝を制して。我が神州を泰山の康に置けるは。實に軍人の忠勇に在り。  
大軍を破り。堅城を抜く者は云ふも更なり。不幸敵丸に中て戦死する者。其の名譽は  
亦國史と共に決して滅せざるなり。  
今の軍人たる者。其憂ふる所は。特に出陣の命を受けざるにあり。

今の軍人たる者。其の願ふ所は。最も至難なる方面に向ふにあり。  
平壤は實に無類の天險に。無量の人工を加へたるの要害にして。數年の籠城を期し  
て敵軍の據れりし處なり。  
然るに。第一軍は一舉此の堅城を攻落して。普く宇内に其の武威を振へり。  
支那の北洋艦隊は。東洋隨一の強艦隊と誇稱せし者なりき。  
然るに。我海軍は海洋島の一戦に於て。支那海軍の戦闘力を半ば殄滅したり。  
此の二捷の如きは。萬國をして日本帝國を以て。最強國の一なりと云はしむるに至  
らしめしものなり。  
第一軍の名譽たり。我が海軍の名譽たり。之を稱せざるの人民なく。之を羨まざるの  
軍人は。あらざりしなり。  
是に於て。東洋第一の要害と聞えたる。旅順攻撃の命を受けし軍人は。實に愉快極は  
まりしと云ふべし。  
旅順の略取は實に敵國咽喉の扼扼なり。  
歐米人は堅睡を吞んで。我が軍人の手練如何にと待ち構へたり。  
上將官より下士卒に至るまで。苟も第二軍に屬する者は。誰あつて。其の任の廣大な

るを知らざるはなかりしなり。  
果せるかな。東洋第一の要害は。第二軍の一舉に由て見事に陥落せり。  
實に日本帝國の名譽なり。我が軍人の面目何物か之に過ぎむ。  
各國の人民は唯々に驚愕するの外なかりしなり。  
旅順陥落の報至るや。至尊よりは優渥無二の勅語を賜はり。四千萬の同胞は上下の別なく。此の大捷を祝せざるはなかりしなり。  
旅順陥落の後に於ける。二軍軍人の愉快は果して如何なりしぞ。  
忠義を盡せる者の愉快なりしなり。國恩に報いし者の愉快なりしなり。取る事能はずと人の言ひ合へりし要害を。見事攻略せし者の愉快なりしなり。全世界の人に其の武勇を賞讃せらるゝ者の愉快なりしなり。  
嗚呼快事なり。嗚呼壯事なり。愉快極はまりて。人々手の舞ひ足の置き處を知らざりしなり。  
戦死者は毫釐も憾む所なくして瞑目し。負傷者は如何なる痛苦をも感ぜざるの時なりしなり。  
然るに。此の快時に際して。一人快々として悲歎に沈み。無念の情に苦むの丈夫あり。

之を可兒大尉とす。

大尉は忠勇無二の士。第二軍に屬して旅順の攻撃に向ふと聞きては。君の喜びは譬ふるに物なかりしなり。  
金州城は陥りたり。大連灣は取れたり。彌々旅順の攻撃なり。  
作戦の計畫は整ひたり。各將校の攻口は定まりたり。  
大尉の如きは即ち。二龍山砲臺攻撃の命を受けたる一人。  
實に千載の一遇。日本男兒が忠勇を著はすの時こそ來りけれ。  
大尉の勇氣は勃々として興り。大尉の熱心は日頃百倍せり。  
旅順攻撃の時期。來るを遲しと待ちにけり。  
時に天なるか命なるか。大尉の身上に一大厄難落ち來れり。  
日頃健全強壯の大尉は。此の大切な時に臨み。最も悪性の病魔に侵されたり。進軍には實に恐るべきの病性なり。而かも。總攻撃の時期迫るに隨ひ。病勢は彌々加はれり。  
是に於て。大尉の憂苦は幾許なりしを知らず。  
身體の苦痛は。大尉の意とせし所には非らざるなり。大尉をして心痛に勝えざらしめたるは。旅順の攻撃に際し。任務を盡す能はざらむかとの懸念なりしなり。

旅順攻撃の時期は彌々迫まれり。大尉の病は益々重し。大尉の憂苦は益々深し。彌々明治二十七年十一月二十一日とはなりたり。旅順の攻撃は今日。此の時。此の日。旅順の攻撃に臨める。我が神州の男兒にして。武勇を著はさぬ者は一人もあらざりしなり。然れども。誰か大尉の勇氣に及ばむ。昨夜來。大尉の病勢は彌々加はりたり。身體は衰弱を極はめ。實に。容易ならざるの容態にてありしなり。然れども。大尉意氣は少しも撓まず。部下を率ゐて。未明より。二龍山砲臺の攻撃を始め。雨下する彈丸を事ともせず。身を挺して猛進せり。大尉は既に。山頭に達せむとしたり。強堅なる砲臺は。大尉の勇氣に由て將に陥るに垂むとせり。重病を冒して能く爰に至りしは。大尉の喜びに勝へざりし所ならむ。遂に能く敵の砲臺を陥れむことは。大尉の誓て期せし所なり。然れども。天遂に大尉に此名譽を與へざりしなり。大尉の猛進は却て大尉の病勢を激烈になしたり。心は彌々にはやるも。遂に一步も進む能はざるの窮困に陥りたり。

是に於て絶體絶命。大尉は憾を吞んで。任務を部下の少尉に譲れり。憐むべし。堪へ難き苦痛を凌ぎ。諸隊に先き立ち我が隊を劇進せしめて。漸くに昇り來りし甲斐もなく。我が手に落ちむ砲臺を。みすく後に殘し置きて。再び山を下り往けり。

明治二十七年十一月二十一日は。抑も如何なる日なりしぞ。他の軍人の爲めには。古今未曾有の良辰吉日なりしなり。特に可兒氏の爲めには。最大最悪の厄日にぞありける。

人は皆な。忠勇を著はせるを喜び。世界無比の堅壘を攻落して。古今無類の大捷を得たるを祝ひ合へりしに。獨り大尉の快々として。悲歎に沈み。無念遣る方なかりしは。實に宜べなりと云ふべきなり。

傷じや。旅順の山々に響き渡れる凱歌の優聲も。大尉の爲めには。無殘なる斷腸の響をぞ與へける。

旅順陥落の後。大尉は陣中に在て。鬱々として病を養ひ居りしが。一日飄然として出で往きて。遂に還らず。

翌日に至り急報あり。二龍山の絶頂に於て一士官の自殺せる者ありと。

衆馳せ往きて視れば、即ち前日出で、行方の知れざりし可兒大尉にぞありける。

大尉は銃を以て、見事に咽喉を打ち貫きて自殺を遂げたり。

大尉の懷中せし簡短の遺書は、大尉の心情を明に示せるなり。

大尉の自殺を聞く者は、何人とも雖も、袖を濡さざる者は有らざるならむ。

世に憐むべき人は決して尠なからざるなり。然れども、大尉の如き者は又多くは有らざるならむ。

大尉の死の如きは、實に哀はれなる死と云ふべきなり。而して又、大尉の死の如きは、實に勇死と云ふべきなり。實に壯死と云ふべきなり。

旅順陥落の際に、敵味方の死者は夥多なりしと雖も、敵にも味方にも、可兒氏の如く壯觀極はまれる死を遂げたる者は、他には決して在らざるならむ。

可兒氏の如きは、奮撃突戦の際、飛び來る彈丸に中て、止むを得ず慘憺なる死を遂げたるには非らざるなり。

可兒氏の如きは、我と我が手を以て死せる者なり。而して、其自殺たる、小心なる婦女子が、精神錯亂の爲めに遂げたるの自殺には非らずして、意識あり、自覺心に富むの丈夫が、沈思熟慮數日の後、強堅なる意志を以て、靜に實行したるの自殺なり。

可兒氏の自殺の如きは、日本男兒の何物たるかを、普く世界に明示せる者なり。

可兒氏の如きは、實に窺困極はまれる悲境に陥り、克く之に處するの道を知れりし人なり。

二龍山の絶頂に於ける可兒氏の自殺は、支那四億の怯懦漢に、日本魂の何物なるかを指示する碑標なり。

汚名を後世に遺さむ事を恐れて、慕なく自殺を遂げだるの人は、却て比類なきの勇士として、永く後世に英名を遺す者なり。

交戦の始めより、連戦連勝、常に皇軍の勝を得るは、抑も如何なる原因に由るか。敵兵の怯懦なるに引き替へ、我が軍は可兒氏の如く、名譽を重んじ、廉潔極はまるの勇士を以て成れるが故なり。

可兒氏の如きは、實に軍人の龜鑑たり。可兒氏の如きは、日本民族の代表者として眞に耻ぢざるの士なり。人若し、旅順の英雄は誰なりと問はざれば、予は斷然可兒大尉なりと答へむ。

## 我は喇叭手なり

(明治二十八年四月作)

劔を振るの士官銃を發つの士卒是れぞ勇ましき軍人なり。

堅門を破る者鐵壁を攀づる者誰か其の勇を稱せざらん。

或は單騎敵陣に近寄りて親しく偵察の任務を盡し味方に大勝を得しむる者あり。

或は暗夜に乗じて敵艦に近寄り水雷を發して之を轟沈せしむるものあり。

壯絶快絶と天下皆唱ふ。

爰に軍人にして其任劔を振るに非ず彈を放つに非ざる者あり之を喇叭手とす。

陣中に戰場に朝にも夕にも進撃に退却に唯々に喇叭を吹く而已なり是れぞ即ち

喇叭手なり。(繫りに拘泥せず以下これは舊來の法)

彈丸右に落ち彈丸左に落ち彈丸前に落ち彈丸後に落つるも喇叭手は之を顧るに  
違あらざるなり。

白刃首に臨むも彈丸身に中るも泰然自若將官の命に應じて喇叭を吹くの外彼は  
爲す事を知らざる者なり味方の勝敗彼に關する渺なからざればなり。

然れども大軍を破るも堅城を落すも誰か之を喇叭手の功なりと云はむ。

岡山縣人白神源次郎彼は亦一個の喇叭手なりしなり。

人は云へり彼は唯々喇叭吹きなりと。

彼は云へり我は唯々喇叭吹きなりと。

成歡の役彼は進軍の喇叭を奏す我軍猛進砲聲既に交る忽ち飛來る一丸彼の胸部  
を貫く。

鮮血淋漓後に挫と倒れたり然れども喇叭を放たず唳々と吹き続けしなり。

實にや白神は喇叭手なりしなり彼が吹きし喇叭の音は高く天涯に届きしなり廣  
く萬國に達せしなり。

然れども我軍凱旋の時に際しては彼の靈の緒と共に既に絶ゆる所となりしなり。  
之を聞かむと欲するも最早聞く事能はざりしなり。

然れども成歡の役白神が吹きし進軍喇叭の音は四千萬同胞の耳には今も明に聞  
ゆるなり。

白神は唯々喇叭手なりしなり白神は唯々喇叭手なりしなり喇叭手の最期は實に  
斯の如くなりしなり。

## 輸卒

(明治二十八年五月作)

某年某月某日某處に於て、口角沫を飛ばして、二人の器々激論する者あり。其の一人は、身體長大、容貌魁偉、身に軍服を纏ひ、腰に劍を帯びたる者、其の帽、其の服に由て、彼は砲兵に屬する者と知られたり。

當時其の爭論に耳を傾けし者は、即ち知りしならむ。其の爭點たる、輜重輸卒の名譽に大いに關する者なりし事を。

事の起りは、或は誤解に出でしやも知れず。然れども、彼れ砲兵の爲めには、聞き捨てならぬ事のありしと見えたり。

彼は、熱心に且つ憤然として、對者を叱じ、對者を論じたり。

歩兵なるも騎兵なるも、砲兵なるも、輜重兵なるも、同じく國家の爲めに盡す者なり。固より互に瑣少の尊卑だにあるなことは、彼れ砲兵が、熱心を極はめて辯論せし所なり。

一兵卒と雖も、我が軍人の能く義理を解する。斯の如くなるは、當時其の場に居合し

たる人々の、何れも嘆賞に堪へざりし所なり。

其の身軍人にてあり乍ら、自ら戦ふの機會を得ざる者、彼の、輜重輸卒の如きは、吾人の同情を最も促さむとする者なり。

輜重輸卒の如きは、其の勞最も多くして、而かも、勳功を立つるの機會、最も尠なき者なり。

寒風膚を劈くも、飛雪面を撲つも、強雨は身を没じ、凍傷は是れ迫るも、雪を蹴り氷を踏み、若しくは泥中に入りて、晝もなく夜もなく、疲勞るゝも、思ふ能はず。人の食するも食する能はず。人の眠るも眠る能はず。孜々として往き孜々として來る者、斯の如きは、即ち輜重輸卒の境涯なり。

兵卒は如何に忠勇なるも、將官は如何に智略に富むも、料食彈藥にして、缺乏を告げむか、彼等は又如何ともする能はざるなり。

砲兵をして歩兵をして、克く戦ひ克く勝たしむる者は、彼れ輜重兵の力、與つて多しと云ふべきなり。

彼れ砲兵が、輜重輸卒の名譽の爲めに、熱心を極はめて辯論せるは、實に宜べなりと云ふべきなり。

明治二十八年三月九日、田庄臺の攻撃に際し、彈丸雨飛の間に在て、衆に先んじ、一際目立ちて奔走するの一輪卒ありしが、戦ひ當に闌なるの時、衰れ一丸の爲めに、左脚に大傷を受け、地上に挫と倒れたり。

戦友、此の有様を見、直ちに馳せ來りて、率きたる馬を放さむ事を頻りに勸む。

然れども、彼れ更に肯せず。我れの死は惜むに足らず、此の馬、此の彈藥は、戦闘上須臾も缺くべからざるものなり。我が命脈のあらん限りは、決して此の手綱を放つ能はず。卿等安心せられよと。斯く云ひて、益々手綱を握り固めんごしたりしなり。

奇特なり彼の心、殊勝なり彼の辨へ、世界何れの國にか斯くの如き輪卒ある。

茨城縣人山崎由松、彼は亦真正の日本男兒なりしなり。彼の一言の如きは、輻重輪卒の任務たる。如何に重大のものなるかを、普く天下に示しよものなり。

山崎由松、彼の振舞の如きは、一兵卒の舉動と雖も、如何に壯嚴を極はめ得べきかを、吾人に親しく示しよものなり。

惜むべし、醫術の効なく、彼は遂に長眠の客となりしなり。

皇軍の安危の外には、更に餘念なかりし、の丈夫は、任務未だ終らざるに、衆に先ちて斯く世を去れるは、實に遺憾にてありしならん。

然れども、其の任務を盡すの道に至りては、彼の如きは、醇化の極に達せし者と云ふべきなり。何者の理想か、將た之に過ぐる者あらん、何んぞ甘んじて瞑目せざらんや。然れども、彼の潔き最期に關しては、轉た感慨に勝へざるものなきに非らず。夙に夜半に、彼が忠義の手を以て率きたりし手綱は、今は何人か之を執れる。馬は果して其の主の替はりしを知れるか。馬は果して憂ふる所あらざるか。

然れども、更に悲哀に勝へざる者あり。丈夫逝けり、而して家には、老いたる父母の唯々茫然とする者あり。

丈夫逝けり、而して家には、助なき妻の、人目を忍びて泣く者あり。

丈夫逝けり、而して家には、蒙昧き小兒の、父の歸りを何時か何時かと、母に尋ぬる者もあり。

## 忘るゝな此の日を

(明治二十八年五月作)

忘るゝな此日を記臆せよ此の日を。

明治二十八年五月十三日は、荷も大日本帝國の人民たる者は、子々孫々千載の後までも、決して忘るべからざるの日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、明治二十八年四月十七日下の關にて調印せし、媾和條約の公布せられたる日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、下の關媾和條約に附屬する地圖を以て、清國が我に割讓せし遼東半島の地域を始めて公布せられたるの日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、大日本帝國が、亞細亞大陸の如何なる部分を得しかを知りし日にして、亦之を失へる事を知りし日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、下の關媾和條約は、我が 天皇陛下が大御心に適し、間然する所なしと曰はせられしものなることを 陛下の四千萬の臣民が、畏みて知り奉りしの日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、下の關媾和條約は、我が英聖文武なる 天皇陛下が、大御心に適し、間然する所なしとせらるゝに拘はらず、友邦の忠言を容れ給ひて、半島地域還附の事を、特に政府に命じ給ひし事を、陛下の四千萬の臣民が、畏みて知り奉りしの日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、平壤に、黃海に、旅順に、蓋平に、比類無き働きを爲して戦死せる陸海軍人の爲めに、四千萬の同胞が殊に哀悼の念を起したるの日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、我が忠勇なる陸海軍人の力に因つて、常に勝者の位置に立ちたる神州四千萬の人民をして、忽地一大敗北を爲したるの感あらしめたるの日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、帝國四千萬の人民の爲めには、最も愉快なる日にてあるべかりしに、却て恰も君父の柩を送りて往くが如き感あらしめし日なり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ、帝國四千萬の人民の爲めには、最も憂ふべき、最も悲むべきの日なりしなり。而して又、明治二十八年五月十三日は、帝國



四千萬の人民に、最も大なる恩恵を與へたるの日なりしなり。

明治二十八年五月十三日は如何なる日なるぞ。帝國四千萬の人民の爲めには、實に救濟日とも云ふべきの日なり。明治二十八年五月十三日は、我邦人民の生活に一大革新を起したるの日なり。帝國四千萬の人民をして、私心を去り、私怨を忘れて、同心協力偏に奉國盡忠の覺悟を以て、日夜黽勉事に努めむとするの決心を致さしめたるは、實に明治二十八年五月十三日の出來事なり。

明治二十八年五月十三日は、英聖文武なる、天皇陛下が、帝國陸海軍人に勅諭を賜ひて、隊伍ニ在ルモノト散シテ郷關ニ歸ルモノトニ諭サク五事ヲ服膺シテ軍人ノ本分ヲ恪守シ一誠以テ他日ノ報效ヲ期セヨと最嚴に曰ひし日にぞありける。

某々政府の我に對する友誼は實に厚しと云ふべきなり。忠勇なる我が軍人の血を以て買ひ得たる遼東半島。清國政府が甘んじて我に割讓したる遼東半島は、某々友國の忠言の爲めに、我は之を清國に還附すべきに至りしと雖も、某々友國は是が報として更に數倍の價値ある寶を、我に惜氣もなく惠與したる恩者なり。

我邦四千萬の人民に、古來未曾有の意識を授けたるは、即ち彼等友誼國の賜物なり。我邦四千萬の人民に、古來未曾有の奮發心を起さしめたるは、即ち彼等友誼國の賜

物なり。我邦四千萬の人民に、古來未曾有の忠義心を懷かしめたるは、即ち彼等友誼國の賜物なり。

一度忠勇を以て取り得たる物は、又忠勇を以て取り得ること難きに非らざるならむ。然れども、明治二十八年に於て、斯の如き一大精神を我が四千萬の人民に加へむことは、決して何人も豫想する能はざりしならむ。而して能く之を我に加へたるは、實に某々友國の恩賜なり。

清國との媾和整ひ、再び平和恢復の後に於て、我邦人の爲めに最も恐るべき者は、復讐を企てむとする清國に非らず。新強國の勃興を嫉妬せむとする西洋諸國に非らず。日清戦争の意外に上首尾なりし爲めに、我邦人の慢心得々たらむとするの傾向なりしなり。

清國との媾和は既に整ひたり。平和は再び恢復せられたり。而して、四千萬の同胞中、誰か慢心得々たる、某々友邦の恩は實に大なりと云ふべきなり。

日清戦争の結果として、切齒扼腕慷慨戒心日夜奮勵國力の發達を是れ圖らむものは、敗者たる清國の人民ならむとは、何人も豫想せし所なりしが、何んぞ圖らむ。其の位置に立つ者は、却て勝者たる我々日本人なるに至れり。某々友國の恩は實に大な

りと云ふべきなり、

鋤鎌を執るの農夫も、重荷を背負ふの役夫も、絲を紡ぎ機を織るの賤の女も、梃を打ち草鞋を作るの老夫も、石盤を抱へて學校へ通ふ兒童も、明治二十八年五月十日の詔勅は、未來永劫片時も忘るゝ能はざる所ならむ。

頃者某街の路傍に人の群を爲すあり、近寄りて之を觀れば、山の如くに重荷を積みたる荷車の前に傾きて停まるあり、之を挽き來れる馬は地上に倒れ、重き車の轆ウケエの爲めに敷き据ゑられて動く能はず、馬方は馬をして立たしめむと欲して頻りに促せども、馬は唯々悶ウ躁カく而已なり、轆の爲に壓せられたるの馬は到底起ること能はず、然れども、馬方は悪ニき馬ぞと苛イ立ダてり、警官來りて此の有様を見、馬方を制せむとしたり、馬方は聞かざる者の如く、忿怒イカリに任せて益々手荒に馬を責めむとしたり、憫むべし、立つこと能はざりしは馬の罪には非らざりしなり、誰か馬方の振舞を惡まざらむ。

此の目、此の處を過ぎて南方數歩に在る一橋を渡りし者は、橋の彼方オノに又人の山を爲すを見しならむ、而して群中には又一人の警官ありて、一賤夫をして地上に棄て在りたる一塊の物を取上げ之に纏オモムロへる襁褓オモムロを徐に取り、剝ヒさしめたり、群れる人々は果して如何なる物を見しぞ、生れて未だ幾許にも成らざる乳哺子の死骸シカガにぞありける、群衆の眼に遮シカりしは、辜ツギ無ムき顔カ雪ユキの膚弱ハダヘカヨクなる手足なりしなり、何人も惻隱の心の起らざりしはあらざるならむ、棄てられし者何の因果ぞ、棄てし者如何なる鬼ぞ、此の小兒犯せる罪とは如何なることとてよもやあらざりしならむ。

非道の世なり、無慙の世なり、前には無辜なる畜生の虐待に苦しむあり、今は無辜なる小兒の路傍に棄てられしあり。

然れども、彼の馬彼の小兒、彼等は果して無辜なりしか、犯せる罪とは果して一も在らざりしか。

彼等は共に、弱者と稱する最大最惡の罪者にてありしなり、畜生なるも人類なるも、斯の如きは即ち弱者の境界なり、弱者たる勿れ、弱者たる勿れ。

(新體詩以下此編に在りたる新體詩集に纏せられたり)

# 神の命

(明治二十八年八月六日起草未定稿)

尊じや神の命、畏しや神の命、従へば榮え、背けば亡ぶ。貴きも賤きも、明らけき神の命を、嚴しき神の命を、攷々として之を求ぎね、尊きも賤きも、一身の瑣事と雖も、神慮に照して行ふべきなり。況や國家の大事をや。我日の本の天皇の、何事にまれ常に必ず、神の命に依り給ふぞありがたき。君主私欲の爲めに、兵を弄びしことなきは、我邦の外將た何れの國かある。我天皇の外つ國を討ち給ふや、道の爲めにし給はざるはなし、神の命に依り給はぬはなし。

神の命は外國を討つべしとなりしに、之を悟り給はざりし爲めに、却て神怒にふれ給ひし君さへ坐々しき。

申すも恐れ多きは、人王十四代の君、帶中日子天皇の御最期にぞありける。此の御門、筑紫の詞志比宮に坐々して、熊曾の國を將擊給はむとせし時に、御琴を控かして、建内宿禰大臣、沙庭に居て神の命を請ひ奉りき。

大后息長帶比賣命やがて歸神して、言を教へ覺し詔ひつらくは、西の方に國あり、金銀を始めとし、目の炎耀く種々の珍寶其の國に多なるを、吾今其の國を歸賜はむと詔り給ひき。

斯く明らけき神の命を、天皇の、悟り給はざりしこそ是非もなき。

高地に登りて西の方を見れど、國土は見えず、唯大海のみこそ有れと曰して、詐り給ふ神と謂して、御琴を押し退けて控き給はず、黙ひ坐しぬ。

其の神太く忿らして、凡茲の天の下は、汝の知らさむ國に非らず、汝は一道に向ひませと詔り給ひき。

之を聞き建内宿禰大臣、恐し我天皇猶ほ其の大御琴あそばせと白し奉りき。

天皇はさながら御夢の中に居坐すが如く、爲し給ふことをさへ夢幻の御心地、唯大臣の白すまに稍、其の御琴を取り依せ給ひて、なま／＼に控き居まじ給ひけり。

然るに幾久もあらず、御琴の音は忽地に聞えずなりぬ。

野于玉の闇の夜や、燃せる火さへほの暗し、控かせる御琴の音も沈み、神慮如何にと氣遣はれ、覺束なくぞ見えにける。

あら不思議や、如何し給ひしぞと、火を舉げて見まつれば、こは如何に、早や既に崩

り坐々しにき。

實に畏きは神の命なり。至尊に坐々すも、背き給はど斯く、顔面の天罰あり。

三韓の征伐は、本朝第一の神に坐々す、天照大御神の御心に出でしことなり。

皇軍克く水陸の百難を拂ひ、克く戦ひ克く勝てるは、神の御魂の助に依りけり。

邦人外國人と戦て常に勝てるは、神の命に従ふが故なり。昔も今も、尊しや神の命畏

しや神の命。

## 日本武尊

(明治二十八年七月六日起草未定稿)

天に懸れる星は之を算ふるを得べし。濱に敷くの眞砂は之を計ることを得む。然れども古來我邦に輩出せる英雄豪傑は、未だ決して其の數を算ふる能はず。

世界廣しと雖も、何れの國か我邦の如くに、數多の名君を出せる。

世界廣しと雖も、何れの國か我邦の如くに、數多の良臣を出せる。

世界廣しと雖も、何れの國か我邦の如くに、數多の孝子を出せる。

世界廣しと雖も、何れの國か我邦の如くに、數多の烈女を出せる。

美術に工藝に、亦英雄の出でし事、決して尠なからざるなり。

然れども我が神州の人民を、最も克く代表するは、果して之を誰と爲す。

厩戸皇子なるか、藤原鎌足なるか、菅原道真なるか、源爲朝なるか、平重盛なるか、楠正

成なるか、豊臣秀吉なるか、徳川家康なるか、彼等は固より、我國民を代表するの資格

を、何れも大いに具へざるには非らず。

然れども、或は智に優れ勇に劣り、或は情多く智少く、或は智仁勇三徳を兼備するも、

尋常肉體人と少しく同情を缺くの恐れ無きに非らず、智あり勇ありて且つ優しき心を具へ、克く物の情を知りて、凡夫と共に悲み、婦女子と共に哭くを知れるは、日本武尊の右に出るは、未だ決して在らざるならむ。古來我邦に輩出せる數多の英雄の中にて、吾人の同情を最も多く得るは即ち日本武尊なりとす。

吾人の温き心と彼の温き心と眞に克く調和して相敬つは、厩戸皇子に非らず、藤原鎌足に非らず、菅原道眞に非らず、源爲朝に非らず、平重盛に非らず、楠正成に非らず、豊臣秀吉に非らず、徳川家康に非らず、却て彼等より遙に上世に出で給ひし日本武尊にて坐々すなり。

人王十二代の君を景行天皇と曰し奉れり、天皇の御宇は我帝國の歴史に於ては最も目出度御宇の一なり、神武天皇東征以來、世々の御門の聖威に因て、天下は次第に治まり來りしと雖も、荒神不伏人等尙ほ東西に多なりしを、悉く打平けて、天下始めて、全く治まるに至りしは、實に此の御代の御功にてありしなり。而して能く其任に當り給ひしは實に日本武尊にぞ坐々しける。

景行天皇は御子等凡て八十王坐々しきなり。然れども其の八十王の中にて、御智勇

古今絶倫に坐々しきは即ち小碓命にて御坐しき。

命御年をめさるゝに隨ひ御智勇日々に赫燦に成り給ひしなり。

荒神不伏人等の尙ほ國に絶えざるは、天皇の深く宸襟を惱まし給ひし所なりき。

「西の方に熊曾建二人有り、是れ不伏无禮人等なり、故其の人等を取れ」と詔給ひて命を遣はし給ひけり。

此の時命は年尙ほ十六にて、御髮は御額に結はせ給へり。

命に一人の御妹坐々しき、倭比賣命と曰し、命を慈愛み給ふこと一方ならざりき。

御出陣に臨み、命は御妹倭比賣の御衣御裳を給はり、劔を御懷に納れて幸行ましき。

熊曾建が家に到りて見給へば、家の邊は軍三重に圍み室を作りてぞ居りける。

折しも、新室樂催さむと、内には酒宴の用意忙しく、酒食を設け備へたり。

命は傍を遊行居給ひて、樂する目を待給ひき。

彌々樂の目になりたり、結はせる御髮は童女の髮の如梳り垂れ給へり、御妹の御衣

御裳を服給ひて、童女の姿に装ひて、女人の中に入りて、室の内に入り坐しき。

愚なる熊曾建兄弟二人は、鄙には稀なる嬢子の容色と見感て己が中に坐せて、盛に

樂したりけり。酒宴當に酣なり、現を抜かして興じ合へり。時分は好しと、御懷より劔

を出し熊曾くまそうが衣の衿えのきんを取りて、劔けん以て胸より刺通し給ふ。弟建見てつたけみ畏みおそて逃げ出す室の椅本いすもとに追ひ至りて背を取らへて、劔以て尻より刺通し給ふ。

弟建苦痛を凌ぎて、其の御刀を莫動かし給ひそ。僕白言すべき事有り」と白す。暫許しばらくして押し伏せ給ふ。

汝命者誰にますぞ。汝命者誰にますぞ。吾は綱向つなむかひ之日代宮ひしろのみやに坐して、大八島國所知す、大帶日子おほたしひこ淤斯呂おしよろ和氣わけ天皇の御子みこ倭男やまと具那王ぐなわに坐す意禮熊曾いれくまそう建二人不伏無禮と聞看きまして、意禮いれを取殺とれと詔給ひて遣はせり。

信まことに然しかまさむ西の方には吾二人を除きて、建たけく強き人はなし。然るに大倭の國に吾二人に益あして建たけき男おとこは坐しけり。是を以て、吾御名われのみかを獻けんらむ、自今いよのち以後のちは、倭建御子やまとたけのみこと教へ申すべし。

是事まこと自訖おしまつれば、即ち熱炭あつせきの如振り折こきて殺し給ひき。さしにも猛あき熊曾建くまそうたけ兄弟二人も、小碓命の御智勇みちゆうにて、既に亡なび訖りければ、還へり上り坐さむとし給ふ。

御途みちすから、山の神河かみがはの神かみ又穴戸神あなうだのかみを悉ことごとく言向ことむか和なして上り給ふ。

出雲國いずものくにに入り坐しては、出雲建いずものたけを殺らむと欲ほして、彼と友垣結ともがきむすび給へり。竊ひそかに赤檮あかたきを以て、刀やちに詐作つくりなし給ひ、御佩みへがして、其そのに肥河ひがはに沐あぶをぞし給ひき。

倭建命やまとたけのみこと河より先づ上り坐して、出雲建いずものたけが解とき置おける真まことの横よこ刀やちをば取り佩へがかして、刀易たやす爲なむと詔り給ふ。

後に出雲建いずものたけ河より上りて、倭建命やまとたけのみことの作り給ひたる、詐刀いつのたがをば佩へがにけり。斯ごとくと視給ひて、倭建命やまとたけのみことは伊奢いぜ刀合たがははさむと挑こみ給ふ。

互たがに刀やちを抜く時に、出雲建いずものたけ詐刀いつのたがを得抜とかす慌忙あはて脇わき脇わき其そのの所ところを、倭建命やまとたけのみこと刀やちを抜かして、唯一打ひとに殺し給へり。

八雲立やつかみ、出雲建いずものたけ之佩このへが太刀たが黒葛くろくま多纏おほも真身まこと無鳴呼ななを。

とは、倭建命やまとたけのみこと此このの時歌このときうたひ給ひしとや。

此このく撥治はらひげて參上まゐりて覆奏かへりし給ひき。

未だ御年みとも往ゆせぬ身なるに、父の御門みかどの命いのちを蒙あり、遠とほき國くにに出いでままして、兩風りゆうふうを冒をひ、百難ひやくなんを拂はひ、非凡ふつぱんなる御智勇みちゆう以て熊曾建くまそうたけ兄弟二人を始めとし、其そのの他山河あらの荒神あらいがみ等ら不伏人等ふふくじんらを、言向ことむか和なして、還かへり給ひし事なれば、天皇の御悦みえきも、如何計いかへならむと、尊

は更なり、皆人思ひ合へりしに、御慰勞も有る哉無しにて、遠征の命亦頻に下りけり。東の方十二道の荒夫流神、及摩都樓波奴人等を、言向和平と詔り給ひて、比々羅木の八尋矛をぞ給ひける。

尊畏りて罷行でます時に、伊勢の大御神の宮に参りまして、神の御門を拜み給へり。其の砌に、御妹倭比賣命に白し給へらくは、

天皇既吾を死ねやと思はすらむ、何か西の方の悪人等を、擊に遣して返り参上り來し間、幾時も未經ば、軍衆を賜はずて、今更に東の方十二道の悪人等を平に遣すらむ、此に因りて思惟へば、猶ほ吾は既死焉と思看なり、と白して、潜然と思ひ泣き給ひしなり。

日本武尊の御母を播磨稻日太郎姫と曰し給ひしが、景行天皇姫を立て、皇后と爲し給へり。皇后同胞にして、孖子をぞ産みましける。天皇異み惡みて、確に置き給ふ。二王を號て大碓小碓と曰し給ひき。

日本武尊は即ち此の小碓命の事にて坐々しとなり。壯に及びて容貌魁偉身長一丈、力能く鼎を扛げ給ふ。

小碓命は、特り御智勇の優れ給ひし而已ならず、御心優しく、御情深く、忠孝の道をさ

へ、最と克く辨へ給ひしなり。

然るに御兄弟にてあり乍ら、而かも御孖子にてあり乍ら、大碓命は、小碓命とは打て變はりし御性根、驚難き御振舞こそ多かりけれ。

是に、三野國造の祖神大根王に、兄比賣弟比賣とて二の女ありけるが、二嬢とも容姿麗美こと類なき者にぞありける。

天皇之を聞看定めて、大碓命を遣して喚上げ給ふ。

申すも恐あること乍ら、大碓命は召上ずして、即ち己と自ら其二嬢女に婚給ひて、更に他女人を求めて、召させ給へる嬢女と詐して、貢上り給ひたり。

然れども天皇いかで欺かれ給はむ、他女なる事を知めすものから、此の嬢女等には婚もせずして、惚はじめ居給ひけり。

斯くて、天皇小碓命に詔り給はく、何とかも、汝の兄朝夕の大御食に参出來ざる、大儀ながら、汝彼を教へ覺せとの詔勅。

天皇如此詔り給ひて、後既五日にはなりぬれども、大碓命は猶ほ參出來給はざりき。是に於て、天皇小碓命に向ひ賜はく、何故に、汝の兄久く參出來ざる若し未だ誨へずあり乎と。

小碓命は既にねぎつと答曰し給ひき。

又、如何様にねぎつとの御尋。

「朝曙」に厠に入りたりし時、持捕へて搦批ぎて、其の技を引闕きて、薦に裏みて投棄てつと答へ給へり。

斯くと聞看て、天皇の御驚一方ならず、其の御子の建き荒き情を甚惶み坐々しけり、猶ほ後に、如何なる荒き御行爲もあらむかと、密に恐れ給ひしなり。

熊曾建兄弟二人を取れと詔り給ひて遣し、は、此の時に於ける、尊の荒き御行爲を、惶み給ひし故なりしごなり。

實に、御傷敷き尊の御不幸、其の御武勇は却て御身の敵とはなりにけり。

世に、親に疎まるゝ程不幸なるはあらざるなり。若し、孝心深き子にして親に疎まるゝものあらむか、殊に憐むべき者と云ふべし。

西の方の悪人等を撃に遣して、返り參上り來し間、幾時も未經ば、軍衆をも賜はずて、更に、東の方十二道の悪人等を平に遣されて、罷行で坐す時に、御嬖倭比賣命の許に到りて、患ひ泣き給ひしは、實に御理ご云ふべきなり。

抑も我邦には、天に懸れる星の如くに勇者はあるも、誰か日本武尊の勇に及ばむ。

抑も我邦には、濱に敷く真砂の如くに孝子は多きも、誰か日本武尊の孝に及ばむ。

此の勇者、此の孝子、而かも至尊の御子に坐々しに、尙ほ且つ此の比類なき大不幸に遭遇ひて、患ひ泣き給ひしなり。

臣民の子たる者、不幸此の上なしと、悲みに勝へ難きことあらば、至尊の御子にも、日本武尊の如くに、患ひ泣き給ひし者の、坐々しきことを念ふべきなり。

日本武尊の御不幸は、臣民の子たる者の、片時も忘るべからざる所なり。

日本武尊は、患ひ泣き給ひしなり。倭比賣命は之を慰め給ひつ。草那藝劍を賜ひ、亦御囊を賜ひて、若し急事あらば、茲の囊の口を解き給へとも詔り給ひける。

東國に幸で坐して、山河の荒神及不伏人等を悉に言向和平給はむと、相武國に到り坐し、に、國造詐り白さく、此の野の中に大沼あり、是の沼の中に住める神は、甚く道速振神なりと。

尊、其の神を看行さむと、其野の中に入り坐しつれば、國造其の野に火をなも着けたりける。

欺かれぬと知めして、御嬖の給へる囊の口を、解き開けて見給へば、裏には火打ぞ有りける。



是に於て、先づ御刀を以て草を薙り撥ひ、火打を以て火を打ち出で、向火を着けて焼退て、恙なく還り出で坐して、國造等は皆切り滅し、即ち火を着けて焼き給ひき。其れより尙ほも入り幸で坐して、走水海を渡り坐さむとせられし時に、渡神を興て、御船廻ひて得進み渡り坐さず。

尊は更なり従ひまつれる者共も、如何爲さむと、思按にこそは暮れられけれ。其の時、后弟橘比賣命白し給はく、妾御子に易りて海中に入りなむ、御子は所遣の政遂げて覆奏し給ふべしと。即ち海に入り坐さむとする時に、菅壘八重、皮壘八重、繩壘八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。あらず不思議やな、今までは、山の如くに興ちたりし暴浪自ら伏ぎて、御船は前へと進みけり。

后には、尊に易り給ふこと故、御決心は固よりのことなれども、流石に妻とて夫とて、遠き國に、荒神不伏人等を言向和平しに幸で坐すにも、離れ給はぬ御交ひ、是れ今生の御別れと、后には御歎き、如何計なりけらむ。されば其の時の御歌に、

さゝねさし 相模の小野に  
焼ゆる火の 火中に立ちて

問ひし君はも

と歌ひ給ひしなり。

弟橘比賣は、實に貞女の鑑に坐々しとなり。高きも賤きも人の妻たる者は、後の御行に習ふべきなり。

日本民族が、弟橘比賣より蒙れる恩は、實に海より深しと云ふべきなり。荒神不伏人等の悉に滅されて、葦原中津國の克く治まるに至りしは、日本武尊の御功に困りしなり。而して尊をして百難の中にて克く堪へしめまつりしは、後の側に坐して懇に事へ給ひしが故ならむ。殊に、走水海の御難に際しては、後の御助なかりしならば、争でか之を免れ給ひしぞ。されば我邦の今日あるは、實に後の御徳に困れりと云ふべし。

其れより七日ありて、後の御櫛海邊に依りたりき。乃ち其の御櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

尊は尙ほも更に入り幸で坐して、荒ぶる蝦夷等、山河の荒ぶる神等を悉に言向和平して、還り上幸坐す時に、碓日の嶺に登り坐ししが、毎に、弟橘媛を願ひ給ふ御情ありければ、嶺より東南を望み見給ひて、吾孀者耶と三度歎かせ給ひしなり。

かくて、吉備武彦を越國に遣はし、尊は信濃に入り坐しぬ。  
信濃國は山高く谷幽く、翠き嶺は萬重なり、人杖に倚るも昇り難し、巖は峻しく磴は  
紆れり、長き峯は數千あり、馬なづみて進かず。

然れども日本武尊は、烟を披き霧を凌ぎて大山を徑り給ふ。

既にして峯に逮り坐しに、飢れ給ひしが故に、山中にて御糧食されけり。(古事記 中の六十一)

(書 八、九紀)

是に、山の神尊を苦しめむとて、白き鹿に化りて尊の御前に立てけり。

尊之を異じみ給ひ、御昨遣の一蒜の片端以て彈き給ふ、則ち蒜は鹿の眼に中り、彼は  
打殺されにけり。

不思議なるかな、尊は忽地道を失ひて、出る所を知り給はず。

時に、何處よりとも知らず、白き狗自ら來りて、尊を導るの狀を爲せり。

尊狗に随つて行で給ひて、能く美濃に出ることを得給ひき。其れより尾張に還り來  
まして、先日二期りをかじり、美夜愛比賣の許に入り坐して、留まり給ひて月を踰え  
ぬ。

是に近江の伊吹山に、荒神ありと聞かせしものから、之を取らむと幸行坐ししが、此

の山の神の如きは、徒手にて取りてむと、御刀の草那藝劍は、之を美夜愛比賣の許に  
置きて、直に其の山に騰り坐しき。

時に、山邊に白き猪に逢へり、其の大きき牛の如くなりしなり。

是の白き猪に化れる者は、其の神の使者にこそあらめ、今ま殺らすとも還らむ時に  
將殺と詔り給ひて、騰り坐しき。

然るに、是の白き猪に化れる者は、神の正身にぞありける。

大冰雨を零らせて、日本武尊を打惑はしまつりき。

峯には霧あり、谷は暄し、行くべきの路なく、跋涉べきの所を知らず、只々強ちに行き  
給ひて、僅に出るを得給ひけり。

然れども猶ほ御意失ひて、酔ひ坐せるが如し、玉倉部の清水に到りて、其の水を飲  
て御心始めて稍醒め坐しき。

然れども、尊は此の頃よりして始めてなやみ玉ふこと御坐しき、當藝野の上に到り  
坐し、時に、吾心恒は虚よりも翔り行むと念つるを、今吾足得歩まず、當藝斯の形に  
成れり、とぞ詔り給ひける。

其地より差少し幸行坐しに、彌甚く疲れ坐しければ、御杖を衝かして漸き歩み坐

しき。

三重村に到り坐せる時に、亦吾足三重の勾如して甚く疲れたり」と詔り給ひき、能煩野に到り坐せる時に、國思して歌ひ曰く、

倭は 國の眞秀

たどなづく 青垣山

隠れある 倭し

美はし

又

命の 全けむ人は

巖菰 平群の山の

隠白檜が葉を 碧華に挿せ

其の子

と歌ひて、命の全くてあらむ人は倭に返りて平群山の白檜の葉を打挿して、樂しく遊ぶことを得べきも、吾は此所にて今死なむと、悲しみ坐して曰ひけり。

或は又

愛げやし

吾家の方よ

雲る起ち來も

と歌ひ給へり。

御病甚急になりぬる時に、吉備武彦を遣して、天皇に奏せしめて、臣命を天朝に受け、遠く東の夷を征てるに、神の御恩を被り皇の御威に頼りて、叛者罪に伏し荒神自ら調ひぬ。是を以て甲を卷き戈を戢めて、憶悌て還れり。曷の日曷の時に、か天朝に復り命さむと冀へり。然るに天命忽に至て、隙咽停めがたし。是を以て獨り曠野に臥て誰にも語るることなし。然れども、身の亡せむことは固より惜まず、唯見ることはざるを愁ふと曰ひしが、

娘女の 床の邊に

吾が置きし 劍の大刀

其の大刀はや

と歌ひ竟へて即ち崩坐しぬ。

嗚呼悲い哉。尊の始めて西の方、熊曾建を取りに幸で坐し、は御年甫めて十六歳の時に坐々しき西の方の荒神不伏人等を、悉く言向和平して還り坐し、に又幾程も

なく軍衆をも賜はずて、東の方十二道の悪人等を平に遣され給ひて、外に居坐すこと十五年の久に亘り、風雨を凌ぎ怒濤を冒し、或は峻山路なきに昇りて、飢餓に苦しみ妖魔に惱まされ給ひし等、漸くにして天下を悉に平け、竟り給ひしに、未だ一日も息ひ給ひしことは無く、國思して還り坐す途にて、三十歳を一期とし、慕なく崩り坐々しき。

日本武尊は東の方十二道の悪人等を平に遣され給ひし爲めに、最愛の御妻をして悲哀極る御最期を遂げしめ給ひしなり。

日本武尊は失せ給ひし御妻のことは片時も忘れ給ふこと能はずして、恒に悲しみ給ひしなり。

日本武尊は外に在ること十五年の久きに亘り給ひ、切に國思し倭の國に返らむことを切に欲し給ひたれども、遂に返ることを得給はずして崩り坐しきなり。

日本武尊の御若年にて父の御門に別れ給ひしより、是に殆ど十五年、一と度は父の御門に見えむとは、日一日と待居給ひし所なりしに、遂に是も叶はずして崩り坐々しぬ。

最初、西の方熊曾建兄弟二人を取りに幸で坐し、時に於ては、日本武尊は果して如

何なる者にて坐々しきか、童女の如くに装ひて熊曾建兄弟二人を唯一打に切り殺し給ひしなり。十五年の後に於ける日本武尊は果して如何に坐々しきか、御足はたぎし形の形になりしなり。三重の勾如しきなり、御杖を衝かして漸うと歩み給ひしなり。然れども、尊當時御年は尙ほ三十に過ぎ給はざりしなり。我邦の今日あるは、東西の荒神不伏人等を言向和平す爲めに、尊の犠牲になり給ひしが故なり。

世人楠氏の忠義を稱するを知る、然れども未だ日本武尊の忠孝を稱するを知らず。世人豊公の偉勳を稱するを知る、然れども未だ日本武尊の御功を稱するを知らず。然れども、吾人の同情を最も多く得べきは、楠氏に非らず、豊公に非らずして、日本武尊に坐々さむ。

日本武尊は至尊の御子に坐々しきなり、而して、寒暑を冒し風雨に曝露して、國家の爲めに外に居坐すこと十五年の久しきに亘り給ひしなり。

日本武尊は至尊の御子に坐々しきなり、而して、天皇既吾を死ねとや思はずらむと曰されて、思ひ泣き給ひしなり。

日本武尊は至尊の御子に坐々しきなり、而して、最愛の御妻と、最も忍び難き御別れを爲し給ひしなり。

日本武尊は至尊の御子に坐々しとなり而して、十五年の御艱苦の爲めに、身心共に遂に疲れ果て給ひ、國忍ばして頻りに遣らむとの御願ありしも、倭に程近く到り坐し乍ら、遂に御願は叶はずして、空しく黄泉の客となり給ひしなり。

日本武尊は至尊の御子に坐々しとなり而して、吾人と同じき肉體と精神とを有し給ひしなり。

日本武尊は至尊の御子に坐々しなり而して、吾人と同じき身心の御憂苦御坐しとなり。

## 孝德天皇

(明治二十八年十月起草未定稿)

天に二日なく、地に二王なし。然れども、萬世一系の天子を戴くは獨り我邦の人民而已なり。

然れども、君主を弑するの臣は出でしなり。天子に擬するの臣は現はれしなり。

稻目より馬子、馬子より蝦夷、蝦夷より入鹿と蘇我氏の驕暴は代一代に増長して遂に停止する所を知らざりしなり。

崇峻帝は誰の爲めに弑せられ給ひしぞ。厩戸皇子の御子御孫は誰の爲めに亡ぼされ給ひしぞ。共に天皇の命を俟たずして自ら大臣となり、家は之を宮門と曰ひ、子の家は之を谷宮門と曰ひたり。男女は之を稱して王子とこそは曰ひしなれ。

蘇我氏の驕暴は遂に天下の惡む所となりたり。古人王を除きては、彼の滅亡を願ひ給はざりし皇子は御一柱も御坐さざりき。

智勇に富める忠臣の世に乏しきは、天下の共に愛ひし所なり。

尙ほ若輩の身なれども、智謀衆に勝りし者と其の名の漸く知られしは唯一人の中

臣連鎌子にぞありける。

蘇我氏の驕暴日々に益々強るを見ては、鎌子は私に之を喜びならむ。

忠を盡し家を興すの時節到來せりと、彼は夙に之を覺りぬ。

蘇我氏をじぼさむ者は蘇我氏に替り得べき者とは彼は早くより之を知れり。

任官の命あるも再三固辭して就かず、疾と稱して退て閑居せしと見せしは即ち計

略蘇我方に非ざる皇子等と結托の事に日夜肝膽を凝しけり。

左れば當時最も御位置の高かりし輕皇子、御病氣の爲めに朝せられずと承りては、

皇子に善かりしを幸ひとして、宮に詣て宿にこそは侍りけれ。

中臣鎌子の連の意氣高く、思慮深く、威風犯すべがらざるは、皇子は之を熟く識り給

ひぬ。

寵妃阿部氏をして別殿を淨め給ひ、高く新殿を鋪かして極はめて厚き御款待。

彼は王にて坐々々々、此は臣の分際にてありしなり、然れども敬ひ重め給ふ事特

に尋常にあらざりけり。

鎌子は只管皇子の厚遇には感じ入りぬ。乃ち舍人に語つて、殊奉恩澤過前所望誰

能不使王天下耶と曰ひしとなり。

舍人は便なく鎌子の語りし所を以て皇子に告げ奉りたり。

皇子聞き給ひて御喜び一方ならず、實に頼母敷き臣とは思召されけり。何時かは皇位を踐み給はむとの御望は、爰に始めて御心に起りしなり。

然れども、至尊をも凌ぐ蘇我子の威勢、皇子は誰一睡の夢を見給ひし御心地にぞありつるならむ。

然るに鎌子の陰謀は遂に能く其功を奏するを得たり、古今無雙の權臣、天子にも擬せんごせし入鹿は宮中に於てはしなく刺客の手に殞れ、其の屍は藩を於て覆はるゝに至れり。大臣の蝦夷は僞宮と共に一片の煙こそは失せにけれ。

是に於て皇極帝は中大兄皇子に御讓位の事を密に傳へ給ひたり。

然れども皇子は鎌子の忠言に従ひて輕皇子に讓り給へり。

而して輕皇子は又古人大兄王に讓らむとし給ひたれども、古人大兄王は焉ぞ之を受け給ふべき。

是に於て遂に輕皇子は皇位を繼承し給ひたり、皇子は鎌子の前言を食まざる事を如何に感稱し給ひけむ、鎌子を以て實に信義の深き者とや思召しけむ。皇子の御喜びは譬ふるものなかりしならむ。夏の夜の夢よりも尙ほ徒なるもの

と覺り給はざりしこそ覺てけれ。

然れども幾程もなくして御夢は忽地に覺めにけり。

中大兄と鎌子との計略に依つて立ち給ひし天皇皇位に居給ふは誰御名のみ。

鎌子の甘言に絆され給ひ嬉しと思召して皇位に即き給ひし日を恨みと思召されざりしは、御在位五年の間に於て將た何日御坐しぞ。

子は親に孝を盡す爲めなり。臣は君に忠を盡す爲めなり。妻は夫に貞節を盡す爲めなり。

子背き、臣背き、二世と三世と契りし妻亦棄てて去らむか、何物の不幸か將た是に過ぐる者あらむ。

遷都の詮議起り、皇太子は倭の京に遷らむと欲せられしに、天皇之を許し給はざりしものから、皇太子は皇祖母尊、間人皇后を始として、皇弟等並に公卿大夫百官人等を悉く引き連れまして、倭飛鳥川の邊の行宮にぞ移り給ひける。

いたはしや、一天萬乗の君は難波宮に御一人置去りにせられ給へり。

子は背きたり、臣は背きたり、二世三世と契りし妻も亦棄て去れり。天皇の御胸中は察し奉るだに最と畏し。

間人皇后に送り給ひし、舸娜紀都該阿我柯賦古麻播比积涅世儒阿我柯賦古麻乎比騰瀨都羅武箇との御歌は何にと之を讀み奉るべき。

皇太子、皇祖母尊、間人皇后、皇弟等、並に公卿大夫百官等は、一人天皇を置きて難波宮を去れりしが、歳餘にして亦天皇に見る爲めに皆打ち連れて難波宮にぞ來りける。而て是れ果して何れの時なりしか。實に天皇崩御の時にぞありける。

最も溫和なるさがに坐々しける御門も、皇太子以下の無慈悲極まれる振舞を憤り給ふの餘りに、遂に御不豫になり給ひぬ。

## 小中村博士の死去に際して

(明治二十八年十月十日作草稿)

若者の死するに際して多く悲み、おきな老者の死するに際して少なく悲むは、是れ人情の恒なるが如し。

若者の死するを見て多く悲むは、抑も何に因れるか。萬物の靈として生れ出でし甲斐なく、常に人の生き得べき限にだに達するを得ずして、空しく此の世を去るの故なり。將來爲す事あるべきの不幸にして其の機會を得る事なく早く逝くを憫むが故なり。去る者も憾み留まる者も亦憾むなり。

おきな老者の死するに會うては、或は云ふ、年には不足なしと。或は云ふ、七十古來稀なりと。斯る慰めの言葉さへあるなり。蓋し生くべきの時を生き盡すべき義務を終はりし者と做せばなり。

然れども眞に悲む者は、斯の如きの語を以て決して慰むる能はざるなり。

然れども有爲多望なる者特り若者に限るに非ず。有爲多望なる者は十代二十代の者を恒とす。然れども七十八十の高齡に達したるも尙ほ有爲多望なる者亦稀に

なきに非ざるなり。

文學博士小中村清矩先生の如きは即ち斯の如き者の一人にて御坐じふなり。

若し夫れ齡と功績との上より云はむか、博士の如きは今日失せ給ひしと雖も、少しも憾みとせられざるならむ。人生は五十と云ふ。而して博士の如きは既に五十餘年の間専心學問に従事せられて、而かも朝廷の爲めに、大學の爲めに、將た學問界の爲めに、博士が多年今日までに既に盡されたる所は實に多なりと云ふべきなり。博士の其の道に於ける功績は實に赫々として普く天下の知る所なり。

然れども博士は、國家の爲めに、學問の爲めに、其の盡すべき所は既に盡し終られたりとせられしには非ざるなり。博士は却て將來に於て大に爲す所あらむとせられし者なりしなり。

博士が文科大學教授の任を辭せられたるは僅に數年以前の事にてありしなり。我邦人民の習慣として、五六十の齡に達する時は既に老いたりと稱して、何事も爲すの義務なき者と爲して、退隱閑居の身となりて、氣樂に世を送るを以て人の道と爲し、人の願となせるなり。實に一大弊風と云ふべきなり。

小中村博士が文科大學教授の任を辭せられたる時には、博士は既に七十餘の高齡



にて御坐しとなり。然れども博士の辭任は老いたるの故を以て安樂を求めらるゝの爲めには非ざりしなり。博士の辭任は専心著述に従事せられむ爲めにてありしなり。博士の辭任は多年研究の結果を整理せられて、續々天下に公にし給はむとの心にて御坐しとなり。

博士は七十餘の高齡にて御坐しとなり。雖も尙ほ有爲多望の士と稱すべき者にて御坐しとなり。

天此の剛氣なる老人に、此の多望ある老人に、尙ほ百年の壽を貸すべきにてありしなり。

然るに此の有爲多望なる老人は今や忽然として遠逝し給ひしなり。

天道は是なるか非なるか。

余曾て少女を喪ひし事ありたり。呼吸は既に止みしなり。心臓は最早打たざるに至りしなり。既に絶命せりと醫師は云ひしなり。余も亦既に其の絶命せる事を知りしなり。然れども我が少女眞に死せしとは余は殆ど信ずる事能はざりしなり。豫て余の胸中に懐きし彼の將來に關する種々の計畫は尙ほ歴然として余の心裡に存せしなり。

小中村博士の訃音に始めて接したる時に當てや、確報疑ふべからざる者なりしと雖も、余は殆ど之を信ずる事能はざりしなり。君の遠逝は疑ひもなき事實なりしとは知りしと雖も、而も尙ほ眞に死せ給ひしとは想像する事能はざりしなり。余は君が尙ほ依然として著述に従事し居らるゝ者なりとの心地せらるゝなり。蓋し今日と雖も博士の知人にして尙ほ然く思はざる者は將た幾人あり哉。

然れども博士は實に逝き給ひしなり。博士は再び歸り來給はざるなり。大學は最早博士を見る事能はざるなり。學界は最早博士を見る事能はざるなり。而して博士に代るべき者は將た何れにあるや、實に悲の至りに勝へざるなり。

## 西郷隆盛

(未定稿)

### 序幕

#### 鹿兒島在郷路の場

(本舞臺は都て在郷路の模様正面路の裏廣き原野あり後に樹木繁茂したる丘遠く見へ路傍大木二三本大木の間に通行人の爲に腰掛石二三あり私學校生徒早崎小鹿浪川立郎獵裝束にて獵銃を携へ路傍の石に腰打掛け談話を爲し居る體にて幕明く)

早「今日は如何したものが早朝より彼方あつち此方こちと徘徊をせし甲斐もなく最早三時に近けれど小鳥一羽獲られぬとは最とも稀なる不獵で御座る。

浪「獵は無くとも此様に日毎々々に早朝より山から谿と奔走なせば日々に益々堅固を加へ山を攀るも谿を越ゆるも疲れを覺えぬ今の身體獲物は有ても無くつても。

早「身體が強くなりさへすれば何も憂ふことは御座らぬ獵は素とく附けたりにて身體を鍛鍊するのが勤め勤めを兼ての樂みなれば獲物があればまうけ物無くとも少しも恨みは御座らぬ。

浪「或は訓練を爲し或は銃獵に出で、身に鍛鍊を加ふるも若しや國家の一大事と云ふべき時も来りなば吾々共が身を棄て、皇國の旗を護らん爲め取るに足らざる小國より辱をば被りて其れを耻とも思はざる卑怯未練の奴原に天下を自由にされる時は實に憂ふべきことで御座る。

早「頼むに足らぬ奴原を頼みにせんとする時は却て後れを取る習ひ國家の大事と云ふ時は卑怯者には構はずに有志の者と計るの外無し。

浪「仰せの如き覺悟にて勤めがてらの運動故獲物は有ても無くつても今少し歴史廻つて見ませう。

早「左様で御座る今少しやりませう。

(下、兩人は立つて獵銃を擔ぎ上手へ這入る其トタンに上手より樵夫二人出で來り早崎浪川と行違ひ乍ら後ろ姿を振りかへり見て)

樵(甲)「今彼所の林の中でも此寒いのも構はずに私學校の生徒衆が大層大勢集つ

て、相撲を取つたり、飛ッこをしたりして居らるゝのを見たが、今又其所へも、私學校の衆が獵に行かゝるが、私學校の衆は克く運動をさつしやるなア。

樵(乙)「あんなに身體を鍛へられたら、さぞ良い軍人に成れるだらう。

樵(甲)「戦争の稽古も彼の様に、桐野様や篠原様がお師匠様でなされると故、大層上手に成られるさうだ。今時は兵隊と云ふものがあるから、戦争があつても唯の人は、出なくつてもいゝのだが、矢張り本當の戦争と云ふと、私學校の人杯が出掛なければなるまいよ。

樵(乙)「如何して如何して、あんな強い人達の、手を借りずにはゐられるものか、如何してあんなに強い人が、今時出来たものかのう。さうだえ彼の人達にあやかる様に、彼の石へ腰でも掛けて、一服やらかさうぢやないか。

樵(甲)「それも克からう、一ぶくやらう。

(ト、兩人腰掛石へ腰打掛けて、煙草を煙らす。)

樵(甲)「私學校の人達は、あんなに強いに似氣もなく、少しも威張つて百姓や、町人杯を困らせることのないのは感心だのう。

樵(乙)「だが、彼の人達も四五年前、まだ私學校の無かりし頃には、随分威張つて吾々

も、困つたともあつたつけが、西郷様が此土地へお歸りなされて、早速に私學校が出来てからは、丸で違つた若殿衆、後々に獵だの、訓練だの、出精斗りして御座る。

(ト、語り合ふ折しも、下手より士族體の者二人、何か話し乍ら出来り、樵夫の談話して居るを見て、密に傍の木の後隠れる、樵夫は斯くとも知らず。)

樵(甲)「西郷様が御歸國に成つたが爲に大人しく、成つたは若き人而已ならず、縣廳の役人衆も、四五年前は動もすると、威張りちらして下様の者をめつ法困らせたが、今では丸で打て變り、親が我子を世話する様に、何から何迄深切に、行届きたる御政治も、固さはと云へば難有き西郷様のお骨折。

樵(乙)「如何して今の世の中に、あんなお方が出来たものか、日本中の御政治を、西郷様がなすつたら、下の者は悦ぶだらうに、其れを却て九州の、此片隅へ追返へし、悪い心の人達が、自由自在に天下を搔廻し、上を犯し下を虐げ、國の耻辱を何とも思はず、自分計りが榮耀榮華、唯だ一人の清盛でさへ、昔しの人は堪へ兼ねしに、清盛揃の今の世の中、兎角世間の騒じきも、實に尤のことで御座る。

(ト、談ふ折しも、最前より木蔭にイみ聞き居たる、二人の士族はつと立出で、)

士(甲)「吾々共は最前より、此木の蔭にて其方達の、語る所を聴き居りしが、其方共の

申す所は、大いに事實に反して居る。西郷氏の名望あるは、今に始ぬこと乍ら、悪人原が寄合つて、西郷殿を此土地へ、追返したる杯云ふことは、少しも影も形も無きこと、西郷氏は陸軍大將、誰も何共出來ざる御身分、西郷殿が政府を去て、薩摩の隅へ歸られしは、征韓論のことに付き、今の大臣參議等と、説の合はざる所より、自分が勝手に去られしなり、精く事情も辨へず、めつたなことを云つてはならぬぞ。

士(乙)「西郷殿を譽めるのを、惡しと云ふにはあらねども、今の大臣參議のことを、清盛杯と謗るのは、天子へ對し不敵と云ふもの、聰明叡智の今上帝、お目鏡違ひのあらう筈無し、其れを兎や角云ふ時は、上をなみする大不敵、警察官の耳にでも、斯様なことが聞えしなら、容易にことは濟む間敷きぞ、きつと慎む様にしやれ。

「小言がてらの御説諭に、興もさめざめ、面見合せ、人の心は様々ど、訝る二人の胸の中。」

(ト、此内二人よろしくこなしあつて立上る、士族の兩人は上手へ這入る、樵夫は後を見送り乍ら)

樵(甲)「御深切なる今の御言葉、以來は屹と、

樵(甲乙)「慎みまする。

(ト、士族兩人に禮を述べ、蔭が見えなくなりたる時)

樵(甲)「彼の兩人は此土地には、ちと珍敷い貨では無いか。

樵(乙)「さうよ、何んだかをつりきに、役人達の肩を持ち、西郷様にはけちを付け、大不敬だの何んだのぞ、分らねえことを陳べ立て、若し警察の耳に入らば、容易に濟むの濟まねえのぞ、馬鹿なことをぬかしやあがつた、京大阪の警察なら、そんなこともあるかは知らねぞ、鹿兒島縣下の警察に、そんな馬鹿はあるものか、今己達の云つたことは、警部や巡査が常々に、自ら人に云ふことだ。

樵(甲)「殊に依たら彼奴等は、政府が密によこしたる、間諜まあしものかも知れねえせ。

樵(乙)「さうと知つたら此方でも。

樵(甲)「後の祭だ仕方がねえ。

(ト、談話をし乍ら樵夫兩人、下手へ這入る見得にて、道具廻る。)

### 獵場の場

(本舞臺同じ山路、正面だら／＼上りの高き丘に、樹木澤山あり)

「古里の慣れし路とは知り乍ら、變りし色の空色や、散り敷く落葉風の音深き山

路の行先を思ふた人は思案面」

(ト、前の士族兩人眉を皺め、打ち案じたる面持にて、下手より這入り)

士(甲)「聞きしに勝る當地の様子、樵夫迄が彼の様に、西郷殿を尊んで、大臣方や参議をば、仇の如くに悪むとは、はてにが／＼しいことで御座る。

士(乙)「これぞ正敷く篠原や、桐野の輩が奸智以て、愚民を馴着る故で御座らう。

士(甲)「少しも早く此事を、政府へ通信せずばなるまい。

士(乙)「邊りに人の居らうも知れず、密に／＼、

(ト、語合ふ折しも、一發の砲聲と共に一羽の鷹、路傍へドーンと落つ、二人の士族大に驚く、正面の樹木の間より、早崎浪川鐵砲を携へ、急いで出で來り、早崎頭を持って鷹を取上げ)

早「まづこの如く君側の悪人原を、

浪「誅戮する日は近きにあらん。

(ト、兩人憤激の色面に表れ、兩人の士族、此體を見て益々驚く體宜しくあつて幕)

## 二幕目

### 郵便奪掠の場

(貳幕目本舞臺鹿兒島近在街道の摸様正面、街道の裏都て竹叢、上手に立木一本、下手より郵便車夫郵便車を挽きて急いで此街道を通り過ぎんとする時、面を掩ひたる壯士兩人、竹叢の中より現れ出で、矢庭に左右より轆棒を取押へ)

壯(甲)「此車に用が有る。

車「郵便局所の役人ならでは御用の有らう筈が無い。

壯(乙)「ぐづ／＼云はずに車を渡せ。

車「渡して役目が済むものか。

壯(甲)「何を。

壯(甲乙)「こしやくな。

(ト、是より三人立廻りと成り、遂に壯士兩人にて郵便車夫を背手に縛り、轆棒をはめ、上手の立木にく／＼し付け)

壯(甲)「斯様して置けば是れでよし。」

(ト、是れより兩人して郵便箱の錠前を破壊して郵便物を取り出し、一々上書を點檢なし、中にて一通を擇抜き、其他は皆な固との通り箱の内に入れ)

壯(甲)「吾々の推量に違はず得たる此手紙、如何なることを認めしか、少しも早く兩君へ御渡申して様子を知らん。」

壯(乙)「いざ御一所に。」

(ト、兩人連れ立ちて、上手へ這入る件にて道具廻る。)

### 桐野邸相談の場

(本舞臺四間、中足の貳重本庇巾の廣き本椽附、正面上手の方一間の書棚、此下に地袋、更紗形の襖續いて下の方三尺の出這入、續て下の方一間の違ひ棚、續いて下の方一間半の床の間、書棚に書籍箱數個、違ひ棚に碁盤貳個、床の間に鐵砲數挺、下手に廻り椽より次の間へ出這、上手の方にて桐野篠原と圍碁の模様にて幕明く。)

桐「如何で御座る篠原氏、此度こそは二三目、拙者が勝で御座らうな。」

篠「まだく如何ごも分りませぬ。」

桐「千騎が一騎に成る迄でも、戦ひ詰める御所存か。」

篠「下手な様かは存せねど、遣る所まで遣らざれば、眞の勝負は分りませぬ。」

桐「左様な戦争の仕方では、定めし多き討死ならん。」

篠「命が惜き人々は、戦争に出ぬが宜しう御座る。」

桐「其れでは之も殺しませう。」

「戲にことを寄ての物語り、互に明す心掛け。」

(ト、兩人面を見合す體宜しく、折から廻椽の方より若黨出て來り。)

若「御主人様へ申上ます、早崎様と浪川様、何か急ぎの御用の由にて、あれへ御越しに成りました。」

桐「ム、左様か、是へすつと御通し申せ。」

若「は。」

(ト、若黨立出る、暫くあつて早崎、浪川入り來る。桐野兩人に向ひ、)

桐「是れはく、各々方には、ようこそその御入來すつとこちらへ御通下さい。」

早、浪「然らば御免下さいませ。」

(ト、兩人は近く寄て座を占むる。)

早「桐野氏篠原氏、面白き物が手に入りました。

桐「其面白き物と云ふは、如何なる品で御座るよな、

浪「即ち之れで御座ります。

(ト、一通の書状を渡す。桐野受取り)

桐「是れは如何なる手紙で御座る。

早「中を見ざれば吾々も、如何なるものかは存せねど、必ず仔細のあるべき手紙。

浪「名宛斗りで當方の、差出人の名はなき故、誰が認めし手紙共、外の人には分らね

ども、某共は兼てより、體に覚えある手跡。

早「吾々共が豫てより、疑ひ掛る某の、手跡に相違は御座いませぬ。

篠「其れには何か證據が御座るか。

早「即ち證據は是なる手紙。

(ト、又一通の手紙を取出し、之を桐野に渡す。桐野は之を受取り、二通の手紙の上書の字を比べ見て、)

桐「二通の文字は同じ手跡、篠原氏には如何思召さる。

(ト、篠原に二通の手紙を渡す。篠原之を受取り、)

篠「如何様同じ手跡で御座る。然らば是なる二通の手紙は豫て疑ふ某の手跡に相違無きか。

早「豫てお聞に入れたる如く、何共以て不審き彼の人々の舉動故、彼より求めし交際を、此方にて奇貨と爲し、其本性を見發さんと、種々に工風を凝せども、彼等も中々油断せず、何時も巧に遁る故、充分疑ひありと雖も、未だ證據は得ざりし處、探偵人の報知に據れば、彼の人達は一同に、昨日津村の宅に會し、密談數刻に及びしよし、何やら長き一通の書面を津村が認めて、郵便役所へ今朝早く、持參せしと聞きし故、津村が手跡は過日得し、其書面にて知り居れば、東京行の印ある、郵便物の其中に、あらば我手に入るべしと、郵便車を途にて抑へ、一々手紙を調べしに、果して得たる此一通、差出人の名は無けれど、違ふようなき津村が手跡、大事の認めあるは必定、早くお開き成さりませ。

桐「定めし宛名も偽名で御座らう。

(ト、封を切り、)

桐「孰れも然らば御聞なさい。

(ト、手紙を読む。)

拜啓陳ば其後當地の形勢は、益々切迫の模様にて、何時破裂致すも難計。私學校生徒の情たる、豚の首を切にも必ず某大臣の御姓名を呼び、烏獸を打留めても斯の如き君側の惡を誅戮するの日は近きにあるべしと云ひ、百姓町人獵師樵夫に至る迄で、日に益々西郷氏を妄尊し、大臣參議を惡むこと惡魔を惡むが如くにして、一日も早く西郷氏の天下に成らんことを熱望せざるはなく、西郷氏の爲めに命を棄てんことを願はざる者は當縣下にては一人も有之間敷と存候實に驚き入つたる事情に御座候、是れ偏に桐野篠原等の奸計に由ることと推せられ候、斯る事情に御座候故、最も氣遣はしきは當地に貯藏の彈藥の義に御座候、若し萬一此彈藥を彼れ私學校生徒の爲めに奪掠せらるる如きこともあらんには實に由々しき一大事に有之、之れを當地に置くは實に慮を助くるの具と存候、斯る彈藥さへ之れ無きに於ては、何程狂暴の徒と雖も容易にことを起す事は出來間敷、されば豫々申上候通り、此彈藥は一日も早く大阪其外便宜の地へ御移し相成候様相成度、是れ實に旦夕の急務に御座候、此義は先便にも細く申上候故、定めし御ぬかりも無之、昨今は其の御運びにも相成べき事と切に希望致候、彈藥を彼等に渡

さぶることを得ば何よりの天幸にて有之候、拙者共は固より最初より覺悟の事故、萬一大事にも相成らんとするに至らば臨機一刀兩斷の方便を行ふべくと存候、拙者共生存中は容易に事は起させ間敷、決心に御座候、御賢察可被下候、右至急申進候、敬具。

(ト、読み終る。)

皆「ム、ー。

(ト、一同驚く)

篠「思ひしよりは大事の手紙。

桐「是なる手紙の手に入りたるは、誠に不思議の天幸なり。

篠「實に油斷は成りませぬ。

桐「此文面を以て見れば、棄て置き難き彼の者共。

篠「殊に注意を要するは、本書に記する最後の文句。

(ト、手紙の末を手に取り)

「萬一大事に相成らんとするに至らば臨機一刀兩斷の方便を行ふべくと存候」

(ト、靜に讀む。)



桐「恐るべし、恐るべし。」

(ト、一同こなし宜しく、桐野篠原に呷き、又他の兩人を近く招きて呷く、兩人點頭き)

早「然らば是より。」

早浪「すぐ様。」

桐「密かに。」

「ハット答へもそこ〜に、」

(ト、兩人急ぎにて辭し、下手へ這入る。)

篠「彼等とても薩摩武士、決心なせし其ことは、爲し遂げずには置かぬもの。」

桐「大將軍の御身の上……………」

(ト、兩人こなし宜敷幕。)

幕引附ると風の音にてツナキ、直に引返す。)

### 間諜捕縛の場

(本舞臺、津村岡本寓居寺院坐敷、同間幅の廣き濡れ椽附、内廻り都て淺黄色

大形張附け、正面上の方一間壁、他も同じ張附、長押より「ツボン」「マンテル」「シヤツ」掛る、壁に向ひて机二個、各々上に書籍二三冊、下に三尺の出這入、下に一間の違ひ棚、下に一間半の床の間、正舞臺都て庭の摸樣、早崎、浪川、外四人の私學校生徒、津村岡本を圍る大立廻り、の摸樣にて、幕明く。  
(二人と六人にて激烈なる立廻り、稍々暫ありて、遂に津村岡本の兩人は私學校生徒の爲に縛せらる。)

早「私學校へ連れ行きて嚴しく吟味を仕らん。」

浪「いざ參らん。」

(ト、兩人を引立つて出る件にて幕。)

### 三幕目

#### 船頭義助宅の場

(本舞臺、都て船宿、店先の摸樣、上手に火鉢、後に中敷居入、一間戸棚、秋田ぶき大形張付、戸棚の上神棚、下手一間の出這り海に臨む、下手には海に臨み、二間の竹手摺り附、間戸裏は海に臨み、遠見に船數艘、表の方上手に唐網を乾

す、下手に櫓三挺立掛く、義助は綱を編み、妻のお濱はつぎ物を爲し乍ら、談話する模様にて幕明く。

義 「内の娘は此頃は何せ、彼の様にふさいで計り居るのであらう。

濱 「あれには深い子細のあること、あなたは何も御存じ無き故、どうから御話し申さうと思ひしことは度々あれど、御心配をば増す而已と、今日まで控へて居りました。

義 「聞かずに居ても済むことなら、聞かずに居るのもよけれど、さう云ふ譯にも行かぬことなら、少しも早く聞かして呉りやれ。

濱 「さう何時迄も云はずにも、居られぬことである故に、いつそ御話しませう。

「ト、仕事を止めて」

濱 「親の慾目か知らねども、容色なら氣質なら、十人並には勝れた娘、稽古事は何にても、させれば出来ぬことはなく、年頃にさへ成らぬ頃より、よその親の眼に止まり、内の忤の女房に、何卒呉れろと諸方より、申込みは多くあれど、ま少し親の手許に置き、成人させた其上で、嫁にやることも、婿を取ることも、そこは臨機應變と、あなたの仰に従ひて、程よく斷り置きたれど、最早二八も過ぎたれば、善き縁談の口あら

ば、娘に問ふて相談せよと、仰せられたは、去年の夏、されども長し短しで、申し込みは多くあれど、ア、これならと思ふ口は、誠に稀で御座いますが、頃者中の二三口は、家柄と云ひ本人と云ひ、此の兩親の考へでは、申し分無き口と思ふて娘に話して見れば、何時でも不興な顔ぶりのをば、こ娘の耻しき、嬉しい所をかくさんと、上部にかざる不興かと、心を付けて探つて見ても、何分うそとも思はれず、親達計りが納得しても、其の肝腎の本人の、心に済まぬ縁談は、却て愛の種なれば、又其中に娘にも、氣に入る口もあるならんと、思ふて見ても、解せざるは、人並勝れし孝行も、親の心に背きしことは、只の一度も無きものなるに、一度ならず二度三度親の勧めを聞かぬのは、深き仔細もあらんかと、心を附けて居りたるに、頃者思ひ當りしは、こそ、その秋より數多度、我が家で船を雇はれて、沖へ出られし津村殿が、東京よりの間諜と露見を爲して、いけざられ、私學校の生徒衆に連れて行かれし、其始末を娘が始めて聞きし時、面色變つての其驚き、はては訝しと思ひし故、其れより心を着け居りしに、益々怪しき娘の様子、日々に出入りの人達に、其れとはなしに、彼人の、其後の安否を尋ぬる様子、只のこゝろは思はれませんが、

「聞いて驚く夫の義助、手に持つ綱を下に置き。」

(ト、義助改まりて妻に向ひ)

義「すりや其方の鑑定では、津村氏と娘とは怪しき中と見ゆるよな、あの娘と津村氏と。」

「面色變へて夫の言葉妻は怒をなだめんこ、

(ト、お濱わざと笑を含み)

濱「孝行者のあの子のこと故、親の苦勞に成る様な善らぬことはある筈だけれど、俗に思案の外とやら、年はの行かぬ者のこと故、心に叶ひし所やありて、先きには云はず我獨りもゆる思ひの片思ひ、其れかあらぬか知らねども、良しや思ひつ思はれつ、互に心相生の松の齡に成るまでもと誓ひし如きことはあるも、妄なこと無かりしことは、私がきつと受合ます。」

義「西郷様に恩ある我等、津村の如き素性のものと、縁組などは出来べき筈無し、申さば敵も同然の、その關係を知らずして、思ひを掛けし娘の因果、思ひ切る様おことより、克々申聞かして呉りやれ、左も無き時は我々親子の、如何なる難儀に成らうも知れず、おことは事情も熱く知り居れば、必ずぬかりはありはせまい。」

濱「そこにぬかりはなければ、如何なる親の意見にも、従ひかぬるがあの道なれ

ば、覺束なきが何より苦勞。」

義「されども男はとらはれにて、何時放免に成る者か、知れざるものことなれば、あきらめ難きこともあるまじ。」

濱「あなたは男のこと故に、左様なことをおつしやれど、女の心と云ふものは、斯く淺間敷きものにはあらず。思ふ男が難儀に遭へば、尙ほく慕ふがその慣ひ、津村殿の今の難儀は、娘の爲めには鐵の鎖。」

義「はて困つたものだ。」

「子故に迷ふ親心、義理と情けのしがらみに、踏み分け兼ねし夫婦の者、途方にくれて居たりけり。」

(ト、夫婦の者思案最中、沖の方に當りて、凧笛の音聞ゆ、義助急に耳をそばたて。)

義「あれは慥かに入港の、蒸氣船の笛の音なり、蒸氣船が入港爲さば、如何なる船か見届けて、直に報知をする様にと、篠原様と桐野様より、兼ての仰せの趣なれば、早く様子を聞糾し、御注進をせねばならぬ。」

(ト、立上らんごせし處へ、水夫一人遶しく下手より出で來り、義助に向ひ。)

水「豫ての仰に従ひて、埠頭に見張つて居りたる處、石炭の煙は空にたなびきて、沖の方より箭の如く、浪を蹴立て、近寄るは、三菱會社の船なれども、いかりを卸せば、忽地に、ボートを卸して乗り入りて、上陸爲せし人達は、陸軍士官と見受けました。

「聞くより義助は身を起し、拳を固め面相を變へ、膝を進めて逃だしく、

(ト、義助水夫に向ひ)

義「して其陸軍士官達は、何所を指して参りたるぞ。

水「其の行先を窺ひしに、正さしく砲兵屬廠の構の内へ入りました。

濱「すりや、何に、今上陸の士官達が、あの彈藥の製造場へ。

義「克く注進を致して呉れた。是より再び立戻り、又々様子をきかして呉りやれ。

水「ハ、

(ト、答へて下手へ這入る)

義「桐野様や篠原様の御推量に違はずして、さては東京政府より、我が彈藥を奪ひに来しよな。

濱「あの彈藥は去り乍ら、政府のものでは御座いませんか。

義「其れは全く名而已のこと、あの彈藥の製造所は、公の御遺物、今日此の日に至るまで、此彈藥を作りしは、鹿兒島人の力なり、其れを甘まく奪はんとは、あきれ果てたる謀みなり、是も津村の。

(ト、思入れあつて)

少しも早く此のことをば、御兩人へお知らせ申さん。

「固き心の鹿兒島男子、踏み行く道は一筋に、私學校へと指して行く。

(ト、義助逸散に花道より這入る)

「跡には一人茫然と、妻のお濱は居すわりて、前後不覺に見えにけり。次の間にては娘のお船、先刻よりの父母の、我が身の上の物語り、聞くとは無しに耳に入り、針の席に座す如く、生ける心地は無かりしが、私學校へと出で行きし、父の足音にはげまされ、障子を開けて出で来る、」

(ト、そつと這入りて母親の傍に居座り)

船「母上宥して下さいまし。

「娘の聲にはつと氣が付き、

(ト、かたへを見返り)

濱 「オ、宥さいで何んどしやう。

船 「今お兩人の御話しは、聞くとは無しに次の間で、遂一承はりました此上も無き不孝者めと、定めしお怒りなさいませうが、どうぞ宥して下さいまし。

濱 「孝行者のそなた故、よからぬことはなき筈と、私は承知をして居れば別に怒りはせざれども、儘に成らぬが浮世の習ひ、津村氏と云ふ人は鹿兒島でありながら、鹿兒島人には敵の身知らざることゝは云ひ乍ら、御恩の深き御方の、敵をおこすは慕ふとは、よく／＼因果な我が親子、お父さんのお心を、少つとは察して上げるがよい。

船 「何とも以て有難き、母上の其お言葉、海より深き御恩をば、お返し申すことはせで、恩を仇とは我身のこと、よしや枕はかはさずとも、互に思ひ思はれて、末は夫婦と誓ひし上は、敵同士でも夫婦も同然、操を守れば親には不孝、親に孝行爲さんとするれば、誓に背き操を破り、女子冥理に盡きねばならず、縁をば切るとするにもせよ、心の念を絶たれずば、通ふ心は妻よ夫と、慕ふお人の身の上に、降り掛りたる危難をば、案じまいとは思ふとも、そりや女子には出来ぬこと、良しや我が身を棄つることも、慕ふお方を救はんと、思はぬことは出来ぬなり、嗚呼如何したら宜からうか。

濱 「浮ばぬ淵瀬に落ち入るは、都て女性の習ひなり、そなた一人りのことにあらねば、致し方なきことなれど、雲合悪しき今の空、如何なることがあらうとも、短氣なことはしてたまふな、嵐に逢へる棄小船は、神の冥護を仰ぐの外なし、短氣なことは必ずせまいぞ。

船 「母様。

「情の深き母親の、言葉にわつと泣く計り、娘お船は母親に、抱き着きてぞふし沈む。

(ト、兩人悲歎にくれる思入れあつて幕。

ト、幕引付ると風の音にてツナギ直に引返す。)

### 彈藥奪掠の場

(本舞臺部て砲兵屬廠門前の模様、正面、大いなる冠木門内に屬廠の建築の屋根、門の上に突出して現はる、門の左右黒き板塀、塀の左右に小土手、上に満月晃々さえ渡り、さながら白晝の如し、役夫大勢門前に集り、内より明

くるを待ち居る體にて、幕明く。

役(一)「こんな大勢集つて、今夜は何をするのかへ。」

役(二)「何んだとお前は知らねえのか、あんまりぼんやりして居るのう、平生精を出す故に、今夜は何か褒美を、我々共へ下さるさうだ。」

役(三)「月見の様な晩だから、お團子にても下さるか。」

役(四)「今頃月見があるものか、こんなに寒い晩故に、豚鍋でも下さるのだらう。」

役(五)「手前え達は本當に、今夜の褒美を知らねえのか、知らずば己れが教へてやらう、矢つ張り團子と鼻薬だが、團子は少つて固過ぎて、中々齒には合はねえ團子、又鼻薬は固かあねえが、めつたに鼻へあてがうと、鼻を破らるゝ様なもの、うかつに手出しは出来ねえ褒美だ。」

役(六)「聞けば今夜のお役目は、此屬廠の彈藥を、先日港へ着したる、赤龍丸へ運ぶのださうだ。」

役(七)「此地の者が大勢で、汗を流してこしらへた、此彈藥を何故に、他國へ持つて行くのであらう。」

役(八)「此の彈藥は政府のもの故、陸軍省で御用があらば、如何なる國へも持つて行

くわさ。

役(九)「西郷様、桐野様も、矢つ張り陸軍ぢやねへか。」

役(十)「陸軍とも陸軍とも、こんな立派な陸軍は、決して外にはありやしまい。」

役(十一)「こんな立派な陸軍があるのに、外へ彈藥を持つて行くとは如何う云ふ譯だ。」

役(十二)「私學校の兵隊が、戦争をしやうと思つても、何より一番肝腎な、彈や藥が無かつては、如何することも出来やしめえ。」

役(一)「戦争が出来ても出来ねえでも、賃錢取つて運ぶのが、我々の役目である。」

役(二)「賃錢取るのは宜けれども、何んだかいまゝしいやうだ。」

「餘計な世話をやく中に、内より門をさつと開き、じづく出る陸軍士官群り居る役夫に打向ひ。」

(ト、陸軍士官二人出で來つて)

士(甲)「其方共を此所へ、今夕大勢集めしは、此屬廠に數年來、貯へありし彈藥を、赤龍丸へ早急に、運搬爲さん爲めにして、至急を要することなれば、望み通りの賃錢を遣す程に、精出して、夜通し運搬爲して呉りやれ。」

役三 「賃錢取つて働く我々、望み通りであるからは、幾度なりとも運びます。  
士乙 「然らば一同門内へ、我等と共に急いで参れ。

(ト、先立ちて門内に這入る)

役皆 「ハッ

(ト、一同後より續いて這入る)

「皆な悉く門内に入りたる時を見すまして、小土手の内に豫てより、潜み居りたる池上、村田時は宜しと左右より、ばらばらと走り出で。

(ト、池上は右、村田は左りより出で來り)

村 「池上氏。

池 「村田氏。

村 「よもや是れ程早急に、船を廻はして彈藥を奪ひ去らんとしやうとは、誰も思ひはせざりしに、斯る處置をば致すとは、少しも早く我々に、事起させん其の爲めの、謀計とこそ知られたれ。

池 「事を起すか起さぬかは、己れ等自身の將來の、施政如何に依るなるに、少しも早く我々を、討ち亡ぼして、暴狀を擅になさんとは、ハテ悪むべき惡漢なり。

村 「我々共に朝敵の名をば負はせて討つ所存、斯るたくみと知り乍ら、陥らざるを得ざるとは、ハテ心外なことで御座る。

「誠真深き鹿兒島武士、勇氣は乏しからねども、非道と思ふ我敵の、處置に無念の男泣き。

(ト、兩人憤怒の思入れよろしくあつて)

村 「奥に聞こゆるあの音は、既にこちらへ参ると見えたり、壯士をこれへお呼びなされよ。

池 「ハッ。

「と答へて池上は、よびこの笛を取出し、ふけば忽地四方より、集り來る壯士の面々。

(ト、上手下手より壯士大勢出來り)

壯皆 「村田氏、池上氏。

村 「程なく此れへ参るで御座らう。

池 「合手は當地の役夫共、陸軍士官は少しの人数、何の苦も無き仕事で御座る。

村 「役夫は我等の味方も同然、云ふなり次第に成るべきもの故、ぬれ手で泡の仕事

で御座る。

池 「兎角うする中早やこゝへ。

壯(皆) 「宜しう御座る。

「待ち構へたる門前へ、斯くとも知らず陸軍士官意氣揚々と役夫を指揮し、鹿兒島人の身を取れば、命の綱の彈藥を、運搬させて出来る。

(ト、陸軍士官先き立ち、役夫に彈藥の箱をになはして出来る。

「斯くど見るより村田池上、大音聲に呼ばゝる様。

村 「此彈藥は何地へも、持去ることは相成らぬ。

池 「我々に渡せばよし、左も無き時は眼に物見するぞ。

「聞いて驚く役夫共、如何はせんと士官に向ひ。

役 「如何してよいので御座います。

士(甲) 「構はずんく、持て參れ。

士(乙) 「少しも遠慮をするに及ばぬ。

「ハツと答へて行かんとすれば、又もや村田大音揚げ。

村 「役夫と雖も汝等は、鹿兒島人にあらざるや、此彈藥を奪はれては、くやしと思

はぬか。

池 「鹿兒島人にてあり乍ら、西郷殿を亡さんたくみの者を助くるとは、見下げ果てたる者共なり。

役(一) 「西郷殿の敵と聞いては、此彈藥は持つては行けぬせ。

役(二) 「こちらの衆へお渡申し、西郷様の御味方に。

役(皆) 「我々共もしてもらはう。

「役夫はになひし彈藥の箱を下して膝まづき、池上、村田に打向ひ。

役 「西郷殿の御味方に、如何ぞなすつて下さいまし。

村 「役夫と雖も鹿兒島人其量見は感心々々。

池 「其方共は只今より、我々共と諸共に、此彈藥を持つて參れ。

役(皆) 「ハツ。

「下に置きたる彈藥の箱を再びかきになひ。

役(一) 「何れへなり共御差圖、

役(皆) 「次第。

村 「然らば參れ。



(ト、一同下手へ這入る)

「傍若無人の振舞に、あきれ果てたる陸軍士官茫然と立ち居たり。

(ト、陸軍士官茫然したる模様宜しくあつて幕)

#### 四幕目

##### 鹿兒島縣廳の場

(本舞臺、間口四間の西洋間、廻り白き形の張付、上手壁に對西洋書籍棚、下手に西洋開出這入、真中に丸形テーブル、廻りに椅子四五脚、大山綱良、中島健彦密談の體にて、幕明く。)

中「昨年以來歸省中の警察官の面々は、私學校の生徒を離間し、西郷殿を。

大「西郷殿を如何せんぞ。

中「申すも忌むべきことながら、我が陸軍の大將たる西郷殿を暗殺せんぞ、密に謀るもので御座る。

大「ム、

「聞いて惻れる大山綱良、何んと言葉も無かりけり。

中「まだ其れ而已に候はず、西郷殿を暗殺なし、之を熊本鎮臺に通報爲して機に投じ、海陸軍の力にて、私學校の人々を、匿殺爲さんと密謀を、旋じ居れる者で御座る。

大「何かそれには慥かなる證據ばし有てや。

中「證據は山の如くで御座る。桐野篠原兩將にも、既に此儀を御承知にや、西郷氏に高山にて、屢々出會謀議の上、舊兵隊を引率して、上京爲すに決せしより、私學校の黨員が、先日以來彈藥を掠奪なせしは右の次第。

「密事を語る其折柄。

(ト、此時下手のひらき口より屬官出來り)

屬「桐野様に篠原様、只今あれへお見えに成り、至急御目に掛りたしと、仰せられてと御座りまする。

大「なに桐野篠原兩將が、あれへお見えに成りしとは、急いでこれへ御通し申せ。

屬「ハッ。

(ト、裏手へ這入る。)

大「折好き處へ兩氏の來訪、様子も定めし分るで御座らう。

中「萬事のごとは兩將のお胸の中にあるで御座らう。

「案内の者に連れられて、やがて入來る篠原桐野、思案の雲の晴れやらす、重き心になひつゝ、肩をひそめて入り來る。

(ト、前の屬官の案内にて、桐野篠原ひらきより這入り、大山中島を見て近寄り)

桐「大山氏、――大事が起りました。

篠「中島氏も御存知ならん。

中「拙者の存する處をば、只今お話し申せし處。

大「先づ其れへお掛け下され。

(ト、腰掛を示す。)

桐、篠「然らば御免。

(ト、兩人椅子に着く。)

大「中島氏より大略は、只今承はりましたが、何共驚き入つたる次第。

桐「津村が書面先きの日に、我々共の手に入りて、東京歸りの警官が、密に謀り居る事の次第も大概分りたれば、早速彼等を縛め捕り、嚴しく拷問爲したる所、西郷殿の暗殺を謀りしことを逐一に、各々白狀致したり。

大「其れでは眞に大將を。

篠「暗殺せんと謀りしなり。

中「惡むべし、惡むべし。

大「して又誰の差圖にて、其暗殺を謀りましたか。

桐「其密計を授けしは、同じ薩摩の大久保、川路。

大「はて淺幕な人々なり、西郷亡ぶる其時は、大久保も亦亡びん、西郷大久保無からんには、鹿兒島人は何れに在る、兩虎相争ふ時、悦ぶものは獵師カキシなり、薩人の亡ぶる時、將た近きにあらん、嗚呼、天なるかな命なるかな。

(ト、悲歎の思入れ宜しくあつて)

篠「右の通りの次第故、西郷殿は出京せられ、この由を大久保に尋問せらるゝ覺悟なり。

大「斯る密謀ありたる上は、西郷殿の出京は、最も危險なることには非ずや。

桐「されば今回の上京には、舊兵隊を引卒し、我々どもに従ひて、西郷殿の御身の上、恙なき様充分に、警護を爲して參る積り。

大「舊兵隊を悉く引卒せらるゝ御見込なりや。

篠「舊兵隊の其外にも有志の者は一同に卒ひて出張、桐篠「爲す覺悟。

大「其勢凡そ幾許なりや。

中「一萬五千は少なくとも。

大「若し路筋の縣々にて、西郷殿の通行を拒みし時は如何の御處分。

桐「斯る不都合無き様に縣廳よりは豫め各府縣の鎮臺へ專使を發し公文にて、西郷殿の出張の理由を御通知爲されて下され。

大「萬一其れをも構はずに道を遮るものあらば。

篠「其時こそは用捨無く一々蹴破り通る積り。

大「然らば干戈に訴へても。

桐「非道を責むる其の爲めには、

篠「是非に及ばぬ、

桐篠中「ことで御座る。

(ト、一同歎息の思入れあつて)

大「さは言ひ乍ら斯くならば西郷殿に朝敵の名をば負はする恐れは無きや。

桐「よしや如何なる名を負ふも、只一徹に義を思ふ、西郷殿の御心、

中「其の有難き御心に報いん覺悟の我々ども。

篠「此度出陣爲すものは道の立たざる其時は生きて歸らぬ皆な覺悟。

桐「左れば激しき合戦の用意が何より肝要にて先き立つものは彈薬に、軍用金の二つで御座るが、用意の出来たは彈薬計り、軍用金の募集の法は如何致して宜きや、是れは餘人の力に行かず、大山氏の御賢慮を偏に仰ぐの外はなし。

篠「良き御工風は、

桐篠中「御座りませんか。

大「只今直ぐに確答を致すことは出来ざれども、篤と熟考爲せし上明日迄には愚案の程を必ず諸賢にお聞かせ申さん暫く御猶豫下されよ。

桐「然らば是れにてお分れ申さん。

篠「良き御返事を。

桐「明日までに。

大「必ず致す御座りませう。

(ト、一同立上がり、よき思入れあつて幕引付ると風の音にてつなき直に

引返す。）

### 大山綱良宅の場

（本舞臺、上手に二間に一間半の茶座敷二重、上手に三尺の違棚、下に地袋白色の襖、續いて下の方三尺、一筋白色襖の出這入、續いて上手に桐の小火鉢鐵瓶を置く、少し下つて行燈、一間の淺き床に掛物、小座敷下手跡へ下げて、本庇し本椽付座敷障子を立つ、小座敷より飛石を置く、本舞臺下手、枝折屣跡の方朝鮮垣内に芭蕉を植ゆ、大山綱良の妻貞子、打案じたる面持にて、行燈の傍に仕事を爲し居る模様にて、幕明く、）

貞「早や十二時も過ぎたれど、まだ御歸宅に成らざるは、此頃中の事件にて、夜を日に續いで御用の様子、容易ならざる此度の事件、御役目柄故、我が君には、外の者より百倍も御心配のことであらう、如何う成る事が困つたものだ。

（ト、仕事を方付けて、次の間の方に向けて手を拍す、下女のお初襖を明けて這入る。）

初「何御用で御座い升。

貞「まだお歸りにはならざるか。

初「まだ御歸りには成りません。

貞「大層お遅いことである、今まで仕事を爲して居たれど、丁度くぎりのよき所へ、参りし故に止めたれば、少し本でも讀まう程に、何か書齋に出て居る書物を持って来て呉りやれ。

初「へい畏りました。

（ト、次の間へ下り、三四冊書物を持って出來り）

初「こんな物ではいきませんか。

「主人の前に差置けば、貞子は之を手を取つて、  
（ト、取つてじつと見て）

貞「こりやこれ南北太平記圖會、初は良い本を持つて來やつたのう。

初「如何云ふ御本か存じませんが、面白さうなお繪が澤山、這入つて居ると思ひました、如何云ふことの書いてある、是れは御本で御座いますか、繪解きを何卒奥様に、して戴き度う御座います。

貞「是れは今より數百年前、北條氏が天下の權を、久しい間擅にし、勿體無くも朝廷